GAME NOVELS

# FINAL FANTASY® IV

## ファイナルファンタジーIV
## 下巻



手塚一郎

イラスト：オグロアキラ

原案・監修：時田貴司

SQUARE ENIX

GAME NOVELS



# FINAL FANTASY IV

ファイナルファンタジーIV

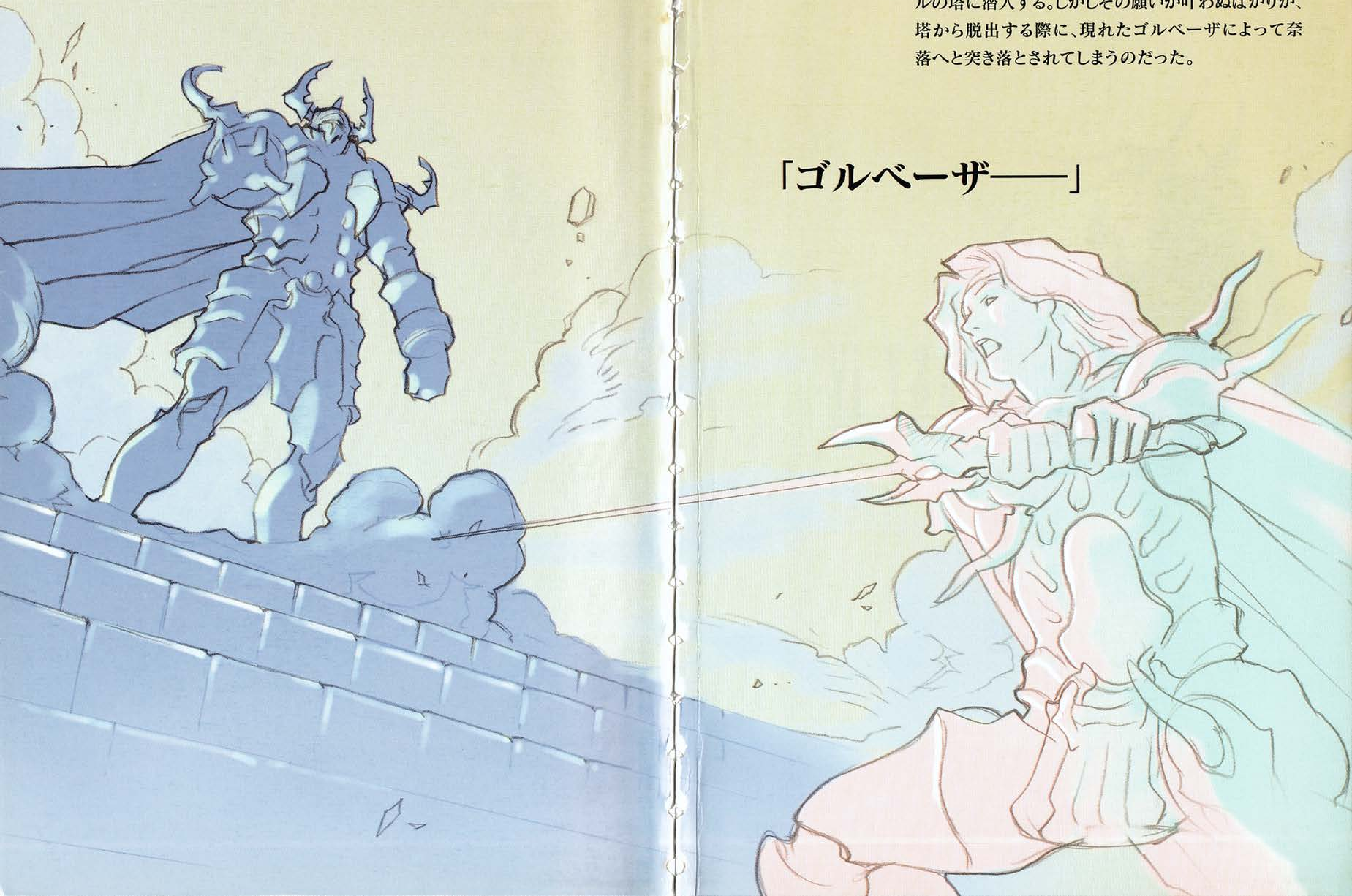
## 下巻

手塚一郎

「小賢しい真似を
　してくれたようだな」

強大な闇に対抗するべく暗黒騎士を捨て、聖騎士となったセシル。奪われたクリスタルを取り戻すため、仲間たちとともにゴルベーザの本拠地であるバブイルの塔に潜入する。しかしその願いが叶わぬばかりか、塔から脱出する際に、現れたゴルベーザによって奈落へと突き落とされてしまうのだった。

「ゴルベーザ――」



ファブールのモンク僧たちを束ねる立場にあった拳闘士ヤン。彼は祖国のクリスタルがゴルベーザによって奪われたのを機に、セシルたちと行動をともにする。飛空艇技師シドの操船する飛空艇エンタープライズ号に乗り、囚われたローザの救出へ向かうが、それが罠であるとヤンの本能が告げていた。

「――罠かもしれませぬな」

「うむ。
しかし、行くしかないじゃろう」

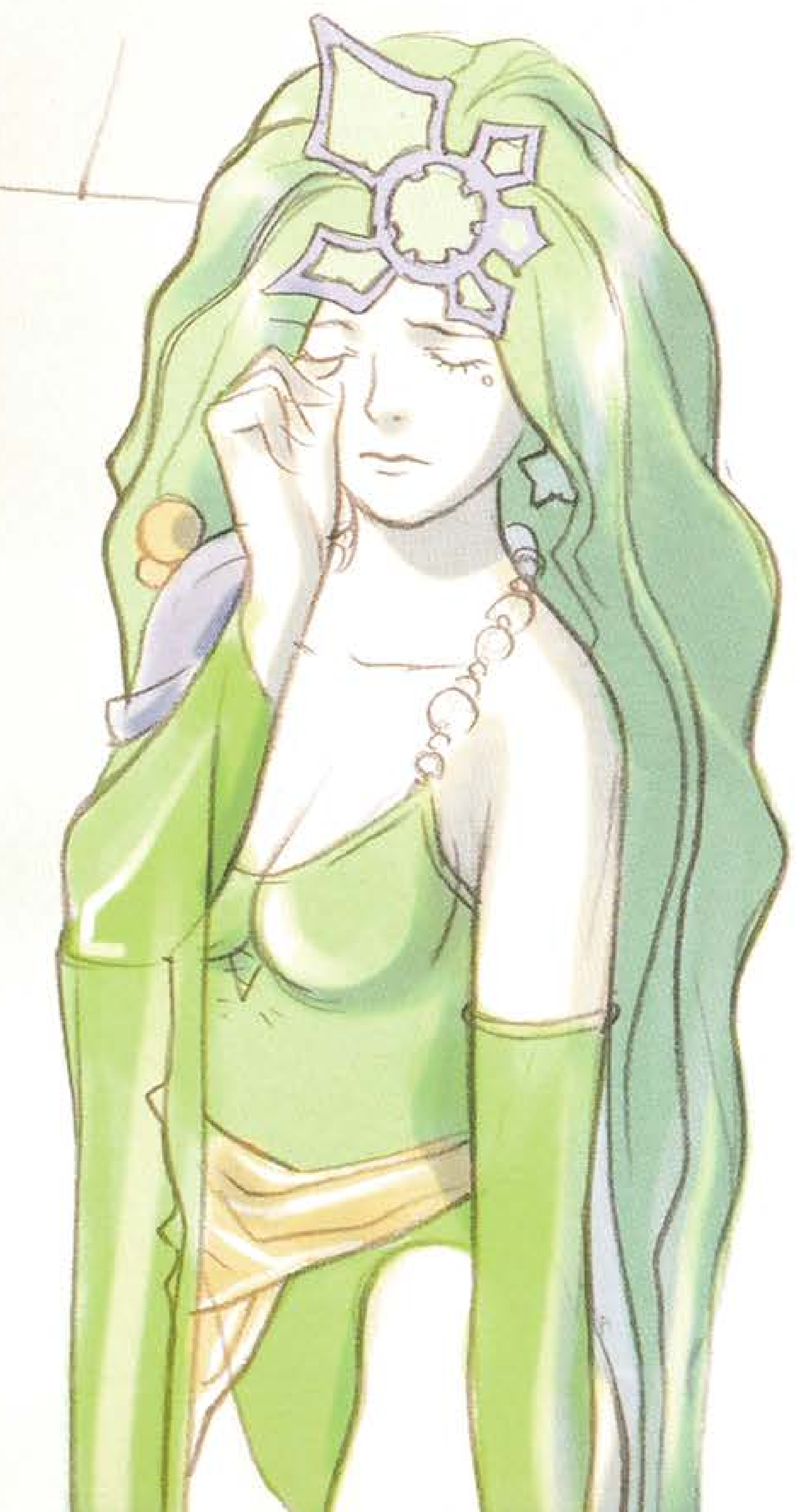





約束の日が訪れるそのときまで意識を閉ざし、無意識の底へと沈んでいる月の民。だが彼らの眠りを守る老人フースーヤは、妙な胸騒ぎを感じて目覚めてしまう。そこで目にしたのは警告を発している“月のクリスタル”だった。封印されし者が覚醒したことを知り、フースーヤは青き星の未来を憂う。

「嫌よ。これ以上、誰かが犠牲になるのなんて——」

クリスタル奪還の旅は賢者テラ、ヤン、そしてシドの命をつぎつぎと犠牲にしていった。そして今、エブラーナの王子エッジが一行と手を組むことを拒み、たったひとりで炎の魔人ルビカンテを追おうとしていた。だが彼の行く末を案じたリディアの涙が、強情なエッジの心をゆっくりと溶かしてゆく。





「お、おい……泣くなよ」



バロンより遥か南、エブラーナ領にそびえ立つ巨大な建造物、それがバブイルの塔である。いつの時代に、どのような目的で建設されたのかさえも定かではない。強固な封印が施されているはずのその塔を、ゴルベーザがクリスタル強奪のための本拠地としたのは偶然ではなかった。クリスタルの力を借りて稼動を開始したバブイルの塔が不気味に輝く。そこにはゴルベーザにしか知りえない秘密が隠されていたのだった——。

GAME NOVELS

# FINAL FANTASY. IV

ファイナルファンタジーIV

下巻

## CONTENTS

カバー・口絵・本文イラスト／オグロアキラ
カバー・表紙・帯・目次・章扉デザイン／渡辺宏一



# 第6章

FINAL FANTASY IV

ファイナルファンタジーIV

# 1

二十年ぶり、といったところだろうか。
それでもトロイア城は、当時の記憶のまま美しい姿で森のはずれにそびえ立っていた。陽光を弾く白い石造りの城壁を見つめていると、そこを這い登る無数の蔦にさえ、どこか秩序めいたものがあるように錯覚してしまうほどだ。
何もかも、あのときと同じだ。
——変わってしまったのは、わしだけか。
急に自分がとてもちっぽけな存在に思えてきた。
「先に神官のところへ行っていてくれぬかな」
そう言い残すとテラは、セシルらから離れて歩きはじめた。
ミンウとともにここを訪れてから、もう二十年になる。
あのころのトロイアは、度重なる魔物の襲撃により、国家存亡の危機に立たされていた。そこにミシディアからの使者として、テラとミンウが訪れたのである。
ふたりは魔物を退けただけでなく、今後同じようなことが起こった場合に備え、いくつかの魔法を置き土産にしようとした。しかし当時、まだ少女だった八人の神官たちは、破壊の象徴である黒魔法を拒み、白魔法のみを受け取ったのだった。

それからのトロイアの隆盛は目を見張るものがあった。今では高位魔法を行使する者を多数抱えた、白魔法の総本山と呼ばれるまでになっている。
それがテラには、たまらなくうれしかった。
トロイアは、自分の生き様を肯定してくれる、数少ない存在なのだから。
――とはいえ、城の者に会ったとしても、誰もわしに気づかぬかもしれぬだろうが。
しばらく周辺を散策していたテラは、ようやく覚悟を決め、城門をくぐった。
その足取りは、重い。
テラは怖かった。
もしも神官たちが、わしのことなど、すっかり忘れてしまっていたら――。
胸のうちにあるわずかな自尊心はたちまち打ち砕かれ、これまで送ってきた人生にたったひとつの意味も見出せなくなるだろう。それが、たまらなく恐ろしい。
わしと出会わなかったら、妻は今ごろ、見知らぬ男と幸せに暮らしていたかもしれない。
わしの子として生まれなかったら、アンナは死なずにすんだのかもしれない。
ふたりを死なせてしまった原因は、間違いなくこのわしにあるのだ。
それなのに、何の誇りもなく命を落としては、天国で待つふたりに顔向けできなくなる。他人を不幸にしかできなかった男を、誰が夫と、父と呼んでくれよう。
――と。

すれ違った女性たちの会話が耳に入った。
「――一昨日、運びこまれた人、ダムシアンの生き残りといってたわね」
テラは、その女性を呼び止める。「それに間違いはないのか」
「はい。自分は王子だと名乗っていますが、本当のことはわかりません」
「そうか」とテラはくちびるを噛んだ。
「今、救護室で手当てを受けておりますが――」
「ありがとう」
怪訝な表情を浮かべる女性たちは、テラへ軽く会釈し、行ってしまった。
間違いない、ギルバートだ。
セシルの話では、彼は大渦に呑みこまれたらしい。
亡くなったと思っていたが、このトロイアへ流れ着いたというわけか。
アンナが自分の命を犠牲にしてまで守ったあの男が――。
テラは、首を振った。それがどうしたというのだ。
命が助かったのならば、それでいいではないか。あえて会う必要もない。
再び城内を進む。
突き当たりの石段を上ると、礼拝堂に出た。そこで立ち止まる。
八人の神官たちを前にして跪くセシルたちの背中が見えた。

「──なるほど。あなた方の事情は大変よくわかりました」
凛とした神官の声が、石の壁に反響した。
どうやら、セシルがこちらの状況を伝えたところのようだった。
「しかし、ご存じのように〝土のクリスタル〟は、我らがトロイアの象徴。あなたが仲間を助けたいと思う気持ちは理解できますが、そのためにクリスタルをゴルベーザとやらへ差し出すなど、我らにできようはずもありません」
「クリスタルは、ゴルベーザを倒したのちに必ずお返しいたします」それでもセシルは必死で食い下がった。「それは約束いたします。ですから──」
「約束──」神官が微笑んだ。「あなた方の素性もわからないのに、ですか」
「ぼくは、バロンのセシルです。それは先ほど──」
「それを、どうやって証明するのです」
神官の容赦ない言葉に、セシルは言葉を失った。
「私たちが信じるに足るものを、残念ながらあなた方は持ち合わせていないようです」
「……ぼくたちを疑っているのですね」
「あなたが、クリスタルを騙し取るために、ゴルベーザから送りこまれたのだとしても、私たちは驚かないでしょうね」
「──失敬な！」ヤンが語気を強め、立ち上がった。

テラは、大きく息を吐いた。
できることならば出て行きたくなかった。だが、こうなっては仕方がない。
「止めぬか」
その言葉に、セシルたちが振り返る。
「――テラ様！」声を上げたのは、神官の中のひとりだった。
「久しぶりであるな」
言って、テラはセシルの横で立ち止まった。「覚えておってくれたか」
「このトロイアの隆盛があるのも、テラ様とミンウ様にご尽力いただいたからこそ。なぜその恩人のお顔を忘れることなどできましょう」今度は、神官たちが跪く番だった。
「このセシルたちの身元は、このわしが保証しよう」
神官が顔を伏せた。
「それでもクリスタルを借り受けることはできぬだろうか」
しばしの沈黙。
「じつを申しますと――」正面の神官が顔を上げずに言う。「このトロイア城に、我らが象徴である〝土のクリスタル〟はございません」
別の神官が、そのあとをつづけた。「トロイアより北。森の彼方の洞窟に棲む〝黒き妖精（ダークエルフ）〟の手に渡ってしまっております」

「──ダークエルフに奪われたか」テラは奥歯を噛んだ。「それでセシルにクリスタルを貸すことを拒んでおったというわけか」

神官たちは答えず、ただ沈黙しているだけだった。

「わしらがクリスタルを取り返したとしたら──」

「お貸しすることはできます。しかし、一筋縄では行きますまい」

「このテラがおってもか？」

「恐れながら」神官が顔を上げた。「洞窟の内部は、ダークエルフの作り出した非常に強力な磁力に支配されておりますゆえ」

テラは、セシルを見やる。ローザ救出の糸口がようやく見つかったというのに、聖騎士の顔に希望の光はなかった。より苦悩が深まったとの印象さえ受ける。

それでテラは悟る。磁力の支配下では、金属製の武具を身につけては闘えない。そのようなところで、仲間を守ることができるのか──それを危惧しているのだろう。

心配などいらぬぞ、このわしがついておる。

テラは、その言葉を口にすることはできなかった。

勝算が薄いことはわかり切っている。無謀な闘いを挑んで命を落とすことにでもなれば、ローザを救い出すことも、ゴルベーザを倒すことも夢となってしまう。

賢者が恐れているのは、運命に逆らうことだった。

あの〝魔の道〟で見た《幻視》が正しき未来であるのならば、そこへたどり着くための障害は、極力排除しなければならない。
運命に逆らえば、ゴルベーザと対峙することができなくなる可能性もあるのだ。
ダークエルフの棲む洞窟へと向かうか。
それとも何か別の策を立てるか。
選択肢はふたつあるが、どちらを選ぶべきか見当もつかない。
だから黙したまま、運命の賽が振られるのを待ちつづける。
啓示があった。
「——ぼくは行きます」セシルが立ち上がった。
ヤンが、そしてシドが頷く。
それが天の望む道か、とテラは覚悟を固めた。「よかろう。わしも、ともにゆくぞ」
ゴルベーザへとつづく道ならば拒む理由などあるわけもなかった——。

2

礼拝堂を出たところで、先頭をゆくテラは立ち止まった。
「——テラ?」

セシルが声をかけるが、それでも老魔道士は動かない。
一行の背後から、謡うような詩句が聞こえてきた。
八人の神官たちが、日課となっている祈りを捧げているのだろう。
「運命か」とテラは独りごちた。
ダークエルフを倒し、クリスタルを取り戻すことが未来へとつながっているようだ。
ならば――と賢者は考える。
ダムシアンの王子ギルバートは、どうなのか。
ファブールからバロンへと向かう船から投げ出された彼が、遠く離れたこのトロイアへ流れ着いたのは、単なる偶然だとは思えなかった。
テラは、無意識に背中を押され、歩きはじめる。
「――テラ殿、いったいどちらへ」とヤン。
「まったく、これだから年寄りは手が焼ける」シドが悪態をつく。
賢者の足取りに、迷いはない。
不可視の者に手を引かれるようにして進んでいった。
行く手を阻む扉を押し開けると、薬品の臭いが鼻腔を突いた。
「救護室のようですが」
セシルの言葉に、テラは頷いた。「ここにギルバートがおる」

「まさか――」
部屋の奥には寝台があり、そこに吟遊詩人が横たわっていた。
「――病人が臥せっております。どうかお静かに」
看護の女性が驚いたように駆け寄ってきたが、耳を貸す者はいなかった。
「ギルバート！」
口々に名を叫ばれ、ダムシアンの王子がゆっくりと目を覚ました。
「よかった……セシル、君も無事だったんだね」
吟遊詩人とは思えない、か細い声だった。半身を起こそうとしたが、食いしばった奥歯から苦痛を意味する言葉が漏れた。
「いけません。今、動けば、命の保障は――」付き添いの女性が慌てて駆け寄る。
聞いて、テラは表情を曇らせた。
それを察したのか、セシルが耳打ちしてくる。「ギルバートは、二度もゴルベーザへ挑み、重傷を負ってしまいました。それなのに……」
「その体でバロンへ乗りこもうとしたのか」
「はい」
「何と無謀な――」テラは信じられないといったように首を振る。それほどまでにこの男を駆り立てるのは、アンナへの愛なのであろう。

女性の制止を振り切り、ギルバートが起き上がろうとする。「ぼくも闘う」
「そんな体で何ができる」テラは寝台の横に立った。「大人しく寝ておれ」
「テラ……さん。生きていてくださったのですね」
「当たり前だ」
「よかった。本当によかった」
「ふん。よいことなどありはせんぞ」テラは、ギルバートに背を向ける。
「どういうことですか」
「じつは――」セシルが、それに答えた。「まだリディアが見つかっていない。それに、人質になったローザは、トロイアのクリスタルと引き換えだと通達された」
「そんな……」
「しかも、クリスタルはダークエルフに盗まれたという」
聞いて、ギルバートが眉根を寄せた。「ダークエルフに――」
「ああ、何でも洞窟を強力な磁力で覆ってしまっているらしい」
頷くと、ギルバートが目を閉じた。遠い日の記憶を懸命に掘り起こそうとしているかのようだった。「ダークエルフは、金属が苦手なんだ」
「知っているのか」
「もう二年ほど前のことになる。ダムシアンにダークエルフが出没したんだ。何とか撃退でき

たけど……そう、あのとき奴は〝火のクリスタル〟を狙っていた」
「そのダークエルフが、今度はこのトロイアに目をつけた……」
「恐らく、そうだろうね」
そこでギルバートは目を開いた。「これを持っていってくれないか」
言うと、寝台のかたわらに置かれている花瓶へと手を伸ばす。
そこには黄色い美しい花が活けてあった。
ギルバートは、そこから一輪の花を抜き取ると、セシルに差し出した。
「これは？」意味がわからないといったように首をかしげるセシル。
「ダムシアンでは珍しくもない花さ」
ギルバートが苦痛に耐えながらも微笑んだ。「すまない。みんなが闘っているときに……。
どうか、これをぼくの代わりに」
釈然としない顔つきのセシルだったが、それでも花を受け取る。
「さて、参るぞ」言うと、テラはひとり、救護室から出て行く。
すぐにセシルらが追いついてきた。
「もう少し、ギルバートにやさしい言葉をかけてあげてもよかったのではありませんか」
テラは立ち止まり、セシルを睨んだ。しかし、それは一瞬のこと。すぐに前方へと向き直り
と、再び歩きはじめた。

トロイア城をあとにする。
「わしが己の心を偽り、ねぎらいの言葉を口にしたところで――」
彼方までつづく森を見やり、テラは独りごちた。「ギルバートが喜ぶとは思えぬ」
「ですが、あれではギルバート殿が……」
ヤンがテラの前に立つ。「あまりにも――」
そんなヤンに、テラは手にした杖を突きつけた。「だから見舞ったのであろう」
無論、嘘である。ギルバートの容態が心配なのは確かだった。が、本心を言えば、運命に抗うことで未来が変わってしまうのを恐れたための行動なのだ。
「――時間がないぞ」テラが言うと、男たちは歩きはじめた。
〝一日だけ待ってやる。それまでにクリスタルを手に入れることだ〟
カインの残した言葉が、心に重くのしかかる。

3

心臓が脈打つたびに、激痛が全身を駆け巡った。
噴き出す汗が体を濡らしているが、口の中はからからに乾いており、呼吸をすると喉がかすれた笛の音のような音を立てる。

それでもギルバートの双眸から光は消えない。
睨むような視線を天井へと向け、そのときを待ちつづけている。
「ご無理をなさるからです。どうか、お薬をお飲みください」
付き添いの女性から、飲み薬を差し出された。
ギルバートは顔を逸らす。
しかし女性も引かなかった。「今は、しっかりと眠っておかなくてはいけません。これを飲めば、痛みを忘れ、ゆっくりとお休みになれます」
無理やり吟遊詩人の顔を自分のほうへ向けさせ、その口に薬を流しこもうとした。
「やめてくれ！」
ギルバートは、それを払いのけた。
途端に全身を激痛が駆け抜け、苦悶の声が漏れる。
看護の女性は呆れたようだった。「どうして、わざわざみずからの体を痛めつけるような真似をなさるのです。こんなことをしても、あなたは——」
「眠るわけにはゆかないんだ」
「——」
「みんなが命を懸けて闘っている」
ギルバートには、苦戦するセシルらの姿が実際に見えるかのようだった。

あのダークエルフは、手強い。
二年前の、ダークエルフによるダムシアン襲撃が思い出された。
――あれは、人々がそろそろ寝静まろうかという時刻のことだった。
賊が侵入したとの報が城内を駆け巡った。
他国に比べ、武力が圧倒的に劣るとはいえ、ダムシアン王のもとに集結した兵士たちは、いずれも愛国の精神に満ち溢れた若者ばかり。さしたる混乱もなく、玉座の間へと速やかに集結。賊を迎え撃つ手筈が整った。
その最前線に立つのは、ダムシアン王その人。しかし手に剣はなく、代わりに奏楽のための竪琴が握られていた。
ギルバートは、玉座の脇に立つ王妃の隣で震えている。
奇声を上げ、闇の中より現れたのは奇妙な人型をした影だった。
銀の蓬髪を冷たい夜気になびかせ、その奥に光る双眸で待ち受ける兵士たちを一瞥。耳の辺りまで切れ上がった薄いくちびるから垂れ下がる舌がひらひらと踊る。
直立しているはずなのに、だらりと下ろした両の腕が、床につくほど長い。
ダークエルフだ、とギルバートは思った。
放浪先で、この邪悪な妖精の話は何度か耳にしたことがある。
輝きを持った鉱石を好み、夜闇に紛れて略奪を行なうと言われている。

となると、その狙いはダムシアンのクリスタルに他ならない。
それを察知したからこそ、王は兵をこの玉座の間に集めたのだろう。
「妖かしの者よ、ここは人の住む地なるぞ。何用だ、返答次第では――」
王が竪琴を爪弾いたのが合図となり、兵士たちが一斉に剣を抜き放った。
月の明かりが刀身にぎらりと反射する。
ダークエルフのみならず、妖精たちは鉄などの金属を嫌うとされている。
それは、彼らの生命の源である超自然の力が、金属と触れることによって減衰してしまうからだという。魔道士たちが金属製の武具を身につけないのも、同様の理由だった。
しかし――
ダークエルフに怯えた様子は見られなかった。
ギルバートの胸のうちで、不安が急激に膨れ上がってゆく。
妖精の類は、大きくなったとしても、年端もゆかない子供のような身の丈だったはず。ところが目の前のそれは、大人と変わらぬほどの体躯の持ち主だった。
それは、気の遠くなるほどの長い年月を生き延びて来たとの証でもある。
静寂と沈黙。
ダークエルフからの返答はなかった。
否。ギルバートは気づいていた。邪悪なる妖精のくちびるから呟きが漏れていることに。

その囁きは、常人の耳には届かない。
しかし詩人としての才を持つふたりだけは別だった。
ダムシアン王が妖精討伐の命を下したのと、ギルバートが息を呑んだのは同時だった。
いかなる力が働いたのか、すべての兵士たちが悲鳴を上げながら床に伏せてしまう。まるで見えない力によって押さえつけられているかのようだった。
前線でダークエルフと対峙するのは、王ひとりになっていた。
王が爪弾こうとした竪琴を、邪悪なる妖精がその長い腕でなぎ払う。
竪琴は、身動きのできないままの兵士たちの背を飛び越え、床に落ちた。
王の目が足元に落ちている剣を捉えた。それを拾い上げようとする。しかし剣は、床に貼りついてしまっており、引き剥がすことができない。
あきらめた王が、後退った。「磁力か――」
ダークエルフの魔力によって石造りの城全体が磁力を帯びている。剣だけでなく、甲冑に身を固めた兵士たちもその磁力に囚われ、身動きひとつできなくなっていたのだ。
ギルバートが動いた。落ちていた竪琴を拾い上げると、その弦を爪弾く。
旅先で出会った老婆から教わった、悪しき妖精を諫(いさ)める詩だった。
突如として苦しみはじめるダークエルフ。
城を支配していた磁力が消失したのだろう。床に倒れていた兵士たちが、つぎつぎと立ち上

がり、落ちていた剣を拾い上げる。

そして妖精はクリスタルをあきらめ、夜の闇へと消えていったのだった――。

このトロイアの北にある洞窟に潜んでいるのは、恐らくあのときと同じダークエルフなのだろう。とすれば、自分の詩が役に立てるはずだった。

ギルバートは、寝台で半身を起こした。

懸命に息を殺し、かたわらの花瓶に生けてある花に意識を集中する。

不安そうに見つめる看護の女性は、ただ首をかしげるばかりだった。

だが、ギルバートには聞こえている。

セシルの苦悶の声が。

ヤンの拳を握る音が。

テラの荒い息遣いが。

シドの上げる悲鳴が。

今こそ、ぼくが――!

ギルバートは、片足を床についた。同時に眼前に閃光が走り、一瞬だけ遅れて全身がばらばらになるかのような激痛が襲ってきた。

「どこへ行こうと言うのです。まだ動けるお体ではありません」

寝台へ押し戻そうとする女性を払いのけ、ギルバートは立ち上がった。「どこにも行かない

さ。あれを取りに行くだけだよ」

部屋の隅に置かれている竪琴を見つめた。

そこまで、わずか数歩の距離。しかし今のギルバートには、地平の彼方にあるも等しい。

わずか二歩目で視界が暗転し、膝から崩れ落ちた。

ギルバートは、這って進んだ。

セシルたちを救えるのは、自分しかいない。

ぼくがこのトロイアに流れ着いたのは、偶然ではないのだ。

脳裏をよぎったのは、アンナの顔。

泣き顔ではない。悲しそうな顔でもない。

暖かな、陽だまりのような笑顔。見る者を幸せにし、力を与えてくれるあの笑顔だった。

偶然のひとつひとつには意味がある。

その連続こそが運命――。

ぼくは、このために生かされたのだから。

指先に触れた竪琴をしっかりと握りしめ、ギルバートは立ち上がった。

崩れ落ちそうになる肉体を叱咤し、寝台へと戻る。

ギルバートは、花瓶の花に聞かせるようにして、詩を奏ではじめる。

この植物には、花から花へと音を伝える性質があった。ダムシアンの人々は、これを通信手

段として用いており、〝ひそひ草〟と呼んでいた。
悪しき妖精を諌めるこの詩も、きっとセシルらのもとへ届いていることだろう。
ギルバートの顔に微笑が宿った。
花弁の奥から聞こえてきたのは、セシルの歓喜の叫び。
「やったぞ、ギルバート！」
そこまでが吟遊詩人の限界だった。
弦を爪弾く指が止まり、まぶたは閉じられ、ギルバートは意識を失った。

4

「この馬鹿者め――」
看護の女性からギルバートの行状を伝え聞いたテラは、そう呟いた。
あのとき、セシルの持っていた花から、心温まる旋律が流れ出た。
同時にダークエルフが苦しみはじめ、洞窟内を支配していた磁力が消失したのである。
こうなれば、ダークエルフなど敵ではない。
こうして〝土のクリスタル〟を奪還したテラたちは、トロイア城へ帰還。そのままギルバートの待つ救護室へと急いだのであった。

一行が見つめる中、ギルバートが目を開いた。
「テラさん……よかった。みんな、無事だったんですね」
「当たり前であろう。わしを誰だと思っておる、賢者テラであるぞ」
「ええ、そうですね」
「まったく……このような体で無理をしおって」
「ぼくは大丈夫です。それよりも、トロイアのクリスタルは？」
テラは、胸をしめつけられるようだった。
この男は、己の体よりも、仲間やクリスタルのことを案じている。
アンナの心を弄んだ、軽薄で臆病者の吟遊詩人だと？
虚飾と飽食にまみれ、民衆の心の痛みをまったく理解しようしない王族だと？
それは、いったい誰のことだ。
ふいにテラは目頭が熱くなるのを感じた。
「この馬鹿者め――」再び同じ言葉をくり返すと、ギルバートに背を向けた。
六十年もの間、わしは何を見て生きてきたのか。
アンナは正しかった。わしの目こそが節穴だったのだ。
涙が溢れてくる。老魔道士は、それを拭おうともせず、ただ背中を丸め、泣いた。
そんなテラを気遣うように、セシルがギルバートに寄り添った。

「心配はいらないよ、ギルバート。君のお陰でクリスタルを取り戻すことができた」
「ぼくのお陰で……？　いや、そんなことは――」
吟遊詩人が顔を赤らめる。「でも、よかった。本当によかった……」
「しかし、なぜ彼奴は急に苦しみ出したんじゃ？」とシド。「お主がセシルに渡した花から、あの詩が聞こえてきた直後じゃったぞ」
「吟遊詩人として各地を放浪していたときに、とあるお婆さんから教えてもらったのです。彼女は言っていました、人と妖精とは古き時代からの大切な友人なのだと」
「友人、か――」
「だから、ぼくたちは争うべきではないと言うのです。妖精は元来、悪戯が大好きな生き物。しかし、もしもその度が過ぎるようなことがあれば――」
「なるほど。あの詩でこらしめてやるというわけじゃな」
「ええ」ギルバートは頷いた。
ヤンが両の拳を胸の前で合わせ、頭を垂れた。「お陰で助かり申した」
「そんな……ぼくは――」
言いかけたギルバートの端正な顔が、苦痛に歪んだ。
テラは涙を拭ってから振り返り、セシルらを押しのけた。「大丈夫か」
「テラさん……」



「アンナは幸せ者じゃった。わしは、心からそう思う」
老魔道士の眉間から皺が消えていた。心にわだかまりなどない。愛娘にしか向けたことのない眼差しでギルバートを見つめる。「お主のような勇敢な者に愛されたのだからな」
「……テラさん」
「今は、その傷を癒すことだけに専念するのだ」
「ぼくもゴルベーザと――」
「ならぬ」吟遊詩人の言葉を、テラは断ち切った。「お主は、とてもよくやってくれた。わしらの未来への扉を開いてくれたのだから」
「――」
「アンナの仇は、このわしが討つ。ギルバート、お主の分もな」
「ありがとうございます」
言うと、ダムシアンの王子が目を閉じた。
そのまま寝息を立てはじめる。
ようやく緊張から解き放たれたのだろう。
「まずは、クリスタルを取り戻したことを神官たちに報告しよう」とセシル。
「うむ、そうじゃな」シドが頷く。
「しかしカイン殿は、どのようにして我々と接触するつもりなのか」ヤンが考えこむようにし

て腕を組んだ。「日没は近い。約束の期限は明日の昼だというのに――」
「わしらが、それを気にしたところで仕方あるまい」
テラは、三人の顔を順に眺めたあとで、懐に入れてあったクリスタルを取り出す。
透き通ったその水晶は、春の日差しをやさしく弾く水面のように輝いている。
だが、外界の光を反射しているのではなかった。
テラの手の上で、クリスタルは一定の明度を保ちながらも、刻々と光の相を変えてゆく。まるで輝ける液体が激しく流動しているかのようである。
いったい、この水晶にどのような力が秘められているのか。
テラは、クリスタルをそっと握った。その温もりが、心地よい。
ゴルベーザと対峙する瞬間が迫っている。
「行きましょう」
セシルの声が合図となり、一行は救護室をあとにする。
最後尾をゆくテラは、三人が出て行ったのを見てから、看護の女性を振り返った。
「この男の世話を、どうかよろしく頼む」
深々と頭を下げた。「わしの――息子なのだ」
顔を上げると、女性の驚いたような顔があった。
テラは、そんな彼女に微笑んだ。

「もっとも、一度たりとも父上と呼んでもらったことはないのだがな」
この世に未練などないと思っていたが、どうやらそうではなかったらしい。
しかし、そのほうがいいとテラは思いはじめていた。
六十年も生きてきたのだ。
去り際に、涙のひとつも流しておかねば、あまりにも寂しすぎる。

## 5

「信じられません——」
つづけて何かを言おうとした神官たちだったが、そこで言葉が途切れる。
それが、テラの差し出した〝土のクリスタル〟を目にしたときの彼らの反応だった。
シドは、そんな神官たち八人を、ただ黙って見つめている。
かすかな違和感を覚えたからだ。
「それでは約束どおり、このクリスタルをお借りします」セシルが言った。
沈黙。
テラの表情が曇った。「やはり不安か」
「はい」と神官が頭を下げる。「クリスタルは、持つ者によってその力を変えます。邪悪な者

の手に渡れば、どのようなことに使われるか……想像もつきませぬ」
「ふむ」とテラは顔をしかめ、顎の髭をしごく。
明らかに神官たちは、クリスタルを貸し出すことを渋っていた。
約束とはいえ、彼らの意に反した行動は取るべきではない。
だからこそセシルとテラは、どうすべきか悩んでいるのだろう。
仕方あるまい。ため息をつき、シドは言った。
「あんたらは最初から、わしらにクリスタルを貸すつもりなどなかったんじゃろう？」
弾かれたように神官たちが顔を上げた。
「シド、それは——」とセシル。
しかし飛空艇の老技師は、それを遮り言葉をつづける。「わしらは、ダークエルフから、クリスタルを取り戻したつもりじゃった。しかし、あんたらは、その労をねぎらうどころか、礼のひとつさえ一切口にしようともしなかった」
「まさか……」ようやくテラも気づいたようだった。「そなたらは、わざとダークエルフにクリスタルを盗ませておったのか——」
ややあってから、正面の神官の顔に笑みが浮いた。「お察しのとおりです」
「なぜ、そのようなことを」
「この辺境の地にありましても、バロンが各地のクリスタルを強奪しているとの噂は聞こえて

参ります。となれば、このトロイアへの進軍も時間の問題」
シドは鼻を鳴らした。「戦を避ける唯一の方法というわけじゃな」
まったく女というのは、何とも恐ろしい生き物じゃな。
「それで我らが帰還したときに、あのように驚かれたと……」
ヤンも合点がいった様子だった。
「あきらめて逃げ帰ってくるとでも考えていたんじゃろうな。まったく、わしらも甘く見られたもんじゃ」シドは笑った。が、それは一瞬のこと。すぐに真顔に戻り、「それで、どうするつもりじゃ？　ダークエルフは倒しちまったぞ」
「妖精は、決して滅びません」
「ほう――」
「超自然の力を糧に、やがて蘇るでしょう。しかし――」神官が寂しそうに微笑む。「それには決して短くない時間が必要になります」
「彼奴らが、それまで待ってくれるとは思えぬな」テラが腕組みをした。
「仮に間に合ったとしても」とセシル。「ゴルベーザにとって、あの天然の要塞がそれほどの障害になるとは思えません」
「どうするつもりじゃ？」
シドが、神官たちに問うた。

長い沈黙があった。
こうしている間にも時はその歩みを止めることはない。
すでに日は暮れ、大気に夜の冷たさが忍び寄ってきている。
「やはり、あなた方にクリスタルを託すより方法はないようです」
神官が渋々と認めた。「我々は争うことを好みませんゆえ」
「ありがとうございます」セシルは頭を下げた。「必ずや、ゴルベーザを倒し、クリスタルを再びこのトロイアへお返しいたします」
――と。
城外が、にわかに騒がしくなった。
一行は背後を振り返る。
城仕えの女性が駆けこんで来る。「神官様――！」
「何事です」
「バロンの飛空艇が現れました」
「カイン」セシルが親友の名を呟いた。
シドは頷いた。「まるで、わしらの行動を監視していたかのようじゃな」
「行ってくるぞ」とテラ。
八人の神官が頭を下げた。「ご武運をお祈り申し上げます」

一行は、礼拝堂をあとにし、城から飛び出た。
頭上には、滞空をつづける《赤き翼》があった。
「降りてくるつもりはなさそうだ」
言ってセシルは、シドを見やる。「エンタープライズ号へ」

＊

エンタープライズ号が離陸する。
《赤き翼》と同じ高度まで上昇したところで、甲板に竜騎士が姿を現すのが見えた。
そのカインが嗤った。「約束どおりに、クリスタルを手に入れたようだな」
「カイン、まだ正気に戻らぬのか」
舵を握りしめたまま、シドは声の限りに叫ぶ。
しかし、カインはそれに言葉を返そうともしなかった。
ただ、セシルを見つめている。
それに真っ直ぐ視線を返しながら、
「——ローザは、無事なのか」とセシルが訊く。
「もちろんだ。しかし、ここにはいない」

「何――！」
「安心しろ。俺が、これからローザのところへ案内してやる」
「いったい、どこへ」
カインは答えることなく、甲板から姿を消した。
同時に《赤き翼》が動きはじめる。
「セシルよ。どうする」
シドのあとを、ヤンがつづける。「罠かもしれませぬな」
そんなふたりを、テラが睨みつける。「だが、我らに他に何ができるというのだ」
次第に小さくなってゆく《赤き翼》をセシルは見つめていた。
そんな聖騎士の背中を、シドは軽く叩いた。
「わしらは、みなお前の味方じゃぞ」言ってから頷く。
「シド――」
「カインが案内しようとしている場所は見当もつかぬ。じゃが、そこにはローザがおる。そして、恐らくはゴルベーザもな。行くしかないじゃろう」
その言葉に、テラが、そしてヤンが頷く。
「ありがとう、みんな……」
「礼を言うのは、まだ早い」

テラが言った。「心してゆくぞ。ここからが正念場じゃ」

6

それは、幻などではなかった。

――《赤き翼》に導かれるようにして闇の中を飛行するエンタープライズ号。

その甲板に立ち尽くすテラは、突如現れた巨大な建造物に息を呑んだ。

暗雲を貫くようにして屹立するのは、塔。

だがテラは、それを幻影だと信じて疑わなかった。

ミシディアの長老ミンウとともに各地を旅してまわったのは、二十年も前のことになる。町や村を訪れただけではない。魔物の姿を求め、未開の地へも分け入った。この世界で訪れたことのない場所などない――それがテラの自慢だったのだ。

だが、このような塔を目にした記憶はない。断じて、ない。

エンタープライズ号は、速度を落とすことなく塔へと接近する。

テラは船首へ駆け寄ると、そこから身を乗り出し、眼下を見下ろした。

一面の漆黒の闇が見えただけだった。

顔を上げる。

塔が間近に迫っている。その外壁は、もはや視界に収まりきらない。
背後でセシルの声。「シド、このまま塔へ潜入できるか」
気がつけば、《赤き翼》の船影が消え失せていた。
恐らく、塔のどこかに飛空艇の発着場があるのだろう。
「――やってみよう」とシド。いつもの陽気さは影を潜め、どことなく声が硬い。
エンタープライズ号が速度を落とした。
セシルがテラの隣へやってきて、前方を睨む。
「面舵――寅の方角！」セシルの操舵号令が飛ぶ。
シドがそれに合わせ、舵輪を右へ。
「――宜候（ようそろ）」と再びセシル。
傾いた船体が、水平になる。
テラは、目をすがめた。やがて正面に淡い矩形が見えてきた。
どうやら、塔への進入口のようである。
テラは、両足ががたがたと震えるのを感じた。これが罠であるのは明白だ。クリスタルを受け取り、代わりにローザを引き渡すだけならば、わざわざこのような場所へ連れてくる必要などないのだから。
テラは〝魔の道（デビルロード）〟での《幻視》を思い出そうと目を閉じた。

あのとき、ゴルベーザと対峙した場所は、本当にここだったのだろうか。
だが、すでに記憶が忘却の彼方へと消え去ってしまったのか、あるいは元からその背景を見ていなかったのか、細部まで思い出すことはできなかった。
「掴まっておれ！」シドが叫んだ。
つぎの瞬間、足元に強い衝撃を感じ、よろけてしまう。
目を開くと、そこはすでに塔の内部だった。
セシルに体を支えてもらわなければ、間違いなく転倒していたであろう。
「──手荒いことだ」
というテラの不満の言葉は、シドの耳に届いたようだった。
「仕方あるまい。滑走路がどれほどの長さがあるのかわからんからの」
言い合いとなるのを避けようとしたのか、ふたりの間にヤンが割って入った。「いったい、ここはどこなのでしょうな」
一行は、エンタープライズ号から降りると、周囲を見まわした。
「何とも見事な造りじゃな」その見慣れぬ光景に、シドが目を丸くする。
異論を挟む者はいなかった。
材質は、すべて金属なのだろうか。淡い光を弾く、無機質な床と壁とどこまでもつづいている。異なる文明に只中へと迷いこんだような錯覚に陥るほどだった。

足を踏み出すと、その音が虚ろな大気に木霊する。
テラは、鈍色の壁にそっと触れてみた。
石とは明らかに違う冷たさに、慌てて手を引っこめた。
「――カイン、ローザはどこにいる！」
じれたように、セシルが叫んだ。
「そう慌てるな」竜騎士の姿はなかったが、声だけが響き渡った。「我らが主が、お前たちに一言、礼を言いたいそうだ」嗤った。
聞いてテラは身構えた。「主だと？」杖を握る手に力がこもる。「ゴルベーザか！」
――と。
「ゾットの塔へ、ようこそ」
鉛のような声が聞こえた。「約束を守ったようだな。喜ばしい限りだ」
カインと同じように、どこにいるのか見当もつかない。
「姿を見せぬか！」テラの足が、また震えはじめた。しかし、それは恐怖ではなく、怒りのためだった。顔が紅潮し、声が上ずる。「卑怯者め！」
「凄まじいまでの憎悪の念を感じるぞ」
ゴルベーザが嗤った。「ならば、塔の最上層を目指すがよい」
「そこにローザもいるのか」とセシル。

「見事、たどり着くことができたならば、ローザとクリスタルを交換してやろう」
「ローザは――無事なんだな？」
「今のところは、な」
「何――！」
「この塔は、血に飢えた魔物で溢れ返っている。急がねば、この娘の命がどうなるのか――。
残念ながら、私にはそれを保障することはできぬ」
ゴルベーザの哄笑が響き渡った。
「この外道め！」テラは吐き捨てるように言うと、走りはじめた。
その足音が残響音となり、木霊するゴルベーザの声を掻き消した。
「――テラ！」
背後から、セシルが叫ぶのが聞こえた。
だが、立ち止まるつもりなどない。脳裏をよぎるのは、愛娘の死に顔。
感じたことのないほどの怒りが、涙を干上がらせてしまっている。
アンナ――！
復讐の刻が迫っていた。



# 第7章

FINAL FANTASY IV

ファイナルファンタジーIV

1

静寂の中、己の靴音だけが響き渡る。
ゾットの塔、六層目。
カインが向かうのは、もうひとつ上の階層である最上層だった。
先刻、この塔へと帰還したカインは、ゴルベーザとともにセシルらと〝会話〟した。
そのあとでゴルベーザだけが、ローザの囚われている最上層へ向かったのだ。
「——歓迎の宴を準備せねばならぬな」
ゴルベーザは、そう言い残して姿を消した。
その言葉の意味するところは、カインにはわからなかった。
わからないからこそ、考え、思い悩んだ。
間もなく、セシルたちは最上層へとやってくる。
そのときゴルベーザが、クリスタルと引き換えにローザを解放するとは思えなかった。仮に彼女が自由の身になったとしても、今度はセシルたちが黙ってはいないはずだ。ゴルベーザに闘いを挑み、クリスタルを奪還しようとするだろう。
狡猾なゴルベーザのこと、とても無策とは思えない。
とすると——

奴の言う宴とは、セシルを陥れるための罠ということになる。
いったいゴルベーザは、何を画策しているのか。
それを自分の目で確かめるべく、カインは最上層へと向かっていた。
カインには予感があった。
——ゴルベーザは、当初からローザの存在を利用しようと考えていた。
だからこそ、ファブールで彼女を捕らえたのだ。
いったい、どれほどの残酷な罠が仕掛けられることになるのか。
カインは、セシルの死を望みながらも、心のどこかでそれを否定している。
セシルを憎悪しながらも、彼との思い出が忘れられずにいる。
だから、はやる気持ちを抑え、あえてゆっくりとした足取りで進んでいた。
できることならば、罠の全容を知りたくなかった。知ってしまったら、そこにセシルが陥るまで、大人しく待っていられる自信がないのだ。
立ち止まることができたら、どれほど楽なことか。
ローザ——。
愛する女への想いが、カインの背中を押した。
上層へとつづく階段を昇り切る。
ゴルベーザの背中があった。後ろ手で縛られ、うな垂れるローザの前にその漆黒の魔人が立

ちはだかり、彼女の額の辺りに右の掌をあてがっていた。
カインは、ふたりの頭上にある巨大な刃を目にして息を呑んだ。
ゴルベーザが振り返る。「宴の準備は整った」
カインは、刃から目を離せずにいた。
それは一本の細いロープで吊るされており、不安定に揺れている。
落下すれば、彼女の体など、容易く両断されてしまうだろう。
「――セシルの前でローザを殺すつもりか」
カインは、抑揚のない声で訊いた。
返答次第では、際限なく湧き上がるこの怒りを解き放つことになるかもしれない。
ゴルベーザが嗤った。「そのようなことをして何になる」
「――――」
「無益な殺生ほど、空しいものはなかろう」
その意外な言葉に、カインはすっかり毒気を抜かれてしまった。
同時に、ゴルベーザという男がわからなくなる。
彼の邪悪な輪郭がぼやけ、形の不明瞭な、暗黒の霧と化したかのような錯覚に陥った。
「貴様は、何を考えている」
問われたゴルベーザは、黙したままカインに向かって歩を進める。

竜騎士の体に緊張が走った。
しかし漆黒の甲冑の男は、カインのかたわらを過ぎ、そのまま下層への階段の前へ。
そこで立ち止まった。
「お前は……あの娘を欲しているのであろう」
カインは、ゴルベーザに背を向けたまま、身じろぎもしない。
固く口を結び、意識を失ったままのローザを見つめるだけ。
「否定も肯定もせぬか」ゴルベーザが再び嗤った。「今しばらく待つがよい。やがてお前の恋敵であるセシルは命を落とし、あの娘はお前のものとなる」
「俺には――」
カインは、ゆっくりとゴルベーザを振り返った。「ローザのほうこそが、死の淵に立たされているように見えるがな……」
「あの刃が気になるか」
「当然だ」
「あれは、セシルとローザの劇的な再会を演出するためのものに過ぎぬ」
「どういう意味だ」
「――いずれ、わかる」
言うと、ゴルベーザは再び歩きはじめた。「そろそろ時間だ」

カインは、肩越しにローザを見やる。
意識を取り戻した様子はない。
大きく息を吐くと、前方へと向き直り、ゴルベーザのあとを追った。

2

——ここだ。
テラは、足を止めた。
ゴルベーザの姿は《幻視》でしか目にしたことはない。
それでも本能が告げている、この禍々しい気配は奴のものであると。
遅れてきたセシルたち三人も、それに気づいたのだろう。無言のままで左右に広く展開すると、浅く腰を落とし、身構えた。
前方の暗がりに、ふたつの影が浮かび上がる。
「ご苦労であったな」
影のひとつが言った。重々しい、まるで鉛のような声だった。
「ゴルベーザ！」
気色ばむテラを左手で制止し、セシルが一歩、進み出た。「ローザは、どこだ」

鉛の声が嗤う。「クリスタルが先であろう」
「ローザは――」
「私は約束を破ることは好まない」
「わかった」言うとセシルがクリスタルを取り出す。
差し出されたその輝きに満ちた水晶を手にし、ゴルベーザは頷いた。「まさしく〝土のクリスタル〟。これで地上の四つのクリスタルは、我が手中に収まった」
「約束だ。ローザを返してもらおう」
「――約束、だと？」
「何――！」
「守らぬほうがよいのであろう」ゴルベーザの視線が、老魔道士へ向けられていた。「その死にぞこないの目が、そう言っておるではないか」
セシルが背後を振り返った。
テラは殺気を隠そうともせず、ゴルベーザを睨んでいる。「この悪党めが！」
「テラ――」
「お前のような老いぼれなどに用はない。と言いたいところだが――」
「貴様になくとも、わしにはある。十分すぎるほどにな」
テラは、セシルを杖で脇に押しのけると、「思い知れ、アンナの痛みを！」

怒りに任せ、賢者は立てつづけに呪文を詠唱。
声なき囁きを媒介とし、超自然の力が発動する。
漆黒の甲冑を焦がすのは〝炎獄(ファイガ)〟。
〝轟雷(サンダガ)〟が、あらゆる神経を焼き切る。
そして冷気によって細胞を破壊する〝氷塊(ブリザガ)〟。
しかし——
それらの高位魔法を喰らいながらも、ゴルベーザの膝を折ることは叶わなかった。
「どうした、老いぼれ。この程度か」
テラは肩で息をしながらも、仇敵から目を逸らさない。
萎えそうになる心を、怒りが必死になって支えている。
精神力が枯渇してしまい、つぎなる呪文を詠唱しても、その効果を現出させることはできるかは自信がなかった。だが——構うものか。
テラは、くちびるの端をわずかに吊り上げ、微笑んだ。
ついにこの瞬間が、《幻視》により垣間見た未来が、今、現実のものとなるのだ。
賢者の覚悟を悟ったのか、セシルが「やめろ、そんなことをすれば！」
「無茶な！　そなたの身がもたぬ！」ヤンも声の限りに叫ぶ。
だが、テラの決意は変わらなかった。

「精神力が干上がったのならば、代わりにこの命を捧げようぞ！」
詠唱がはじまった。
ふとミシディアの長老ミンウの言葉が脳裏をよぎる。
しかし、そなたは老いた身。〝堕星（メテオ）〟など使っては――。
それでも詠唱はつづく。
賢者の顔に刻まれているのは固い決意。揺るぎない覚悟。そして微笑み。
ゴルベーザの体が、わずかに動いた。
が、つぎの瞬間に呪文が発動。
頭上から降り注ぐのは、ひと抱えもありそうな無数の岩。
術者の怒りが炎に転化し、その岩を燃え滾（たぎ）らせる。
「封印されし黒魔法――〝堕星（メテオ）〟か」
漆黒の甲冑が、我が身を守ろうとするかのように両手をかざす。
その程度で、封印されし伝説の黒魔法の威力を軽減できるはずもない。
ゴルベーザの体は、荒波に翻弄される木の葉のように舞い、ついに崩れ落ちた。
片膝をつき、苦しむゴルベーザを前にし、テラの顔から笑みが消える。
持てるすべての精神力、さらには生命力までもを〝堕星（メテオ）〟に注ぎこんだ反動で、肉体から急速に生気が失われてしまったのだ。

賢者と呼ばれし老人は両膝を床につき、前のめりに伏した。

「よもや〝堕星(メテオ)〟を使うとはな」ゴルベーザが立ち上がった。「だがクリスタルは、すでに我が手の中」そこでかたわらに立つカインを見やる。

と――

糸の切れた操り人形のごとく、その体から力が抜け、どうと倒れる。

テラの〝堕星(メテオ)〟の余波を受けたためであろう。

「――術が解けたか。まあよい、お前の役目は終わった」

ゴルベーザがカインに背を向けた瞬間だった。

セシルが抜刀。その漆黒の背に向けて突進する。「逃がさん！」

それを予期していたかのように振り返ったゴルベーザは、右の掌を聖騎士へとかざす。

腹部に強い衝撃を受けたセシルは、思わず両膝をついてしまう。

その前にゴルベーザが立ちはだかった。

再び、漆黒の甲冑が掌をセシルに向ける。

ヤンもシドも動けずにいた。

死を覚悟したかのように、セシルが目を閉じる。

しかし――予想に反し、何も起こらなかった。

恐るおそるセシルは目を開く。「なぜ……とどめを刺さない」

　ゴルベーザが、怯えたように後退った。「お前は、いったい――」そこまで言うと、一行に背を向け、逃げるようにしてその場から消える。
「セシル殿」
　呪縛が解けたようにヤンが、そしてシドがセシルのもとへ駆け寄る。
　ヤンに支えられ、立ち上がったセシルは、
「ぼくはいい。それよりもテラを――」
　シドが頷き、テラを抱き起こした。「しっかりしろ」
「倒せなんだか……」賢者のくちびるから弱々しい声が漏れた。「ミンウの言うとおりであったな。憎しみに囚われ、闘った報いであろう」
「喋ってはいかん。すぐにトロイアへ運んでやるぞい！」
「セシルよ……どうか、どうかアンナの仇を――」
　テラの視界が、ゆっくりと暗くなってゆく。
「目を開けんかい！　このくそ爺！」シドがテラの体を揺さぶった。
「テラ殿」ヤンの目に涙が浮かぶ。
「テラ――アンナの仇は、ぼくらが必ず討つ」
　セシルの言葉を聞き届けると、テラはアンナのもとへと旅立った。

## 3

何度も名を呼ばれた。
無意識の沼に沈んでいた意識が、ゆっくりと浮上する。
——カイン！
誰だ、俺を呼ぶのは？
——しっかりしろ、カイン！
ようやく、それがセシルの声なのだと理解する。
だが、心が目覚めることを拒絶していた。
気を失う直前に耳にした、ゴルベーザの言葉が思い出される。
「術が解けたか。まあよい、お前の役目は終わった」
そして奴は、俺をここに残して姿を消した。そう、俺は捨てられたのだ。
術が解けただと——？
笑止。俺は、お前に操られたことなど、一度たりともない。これまで常に自分の内なる声に従い、生きてきた。誰にも命じられず、本能の赴くままに。
それは、ゴルベーザも承知していたのではないのか？
偶然、互いの利害が一致したことで行動をともにしただけではなかったのか？

まあ、いい。
奴が逃げ失せたところで、俺は何も変わらない。これまでと同じように、自分の意思で行動し、道を切り拓いてゆくだけだ。
カインは、まぶたを開いた。
目の前にセシルの顔があった。
不安そうなその表情が、歓喜のそれへと一変し、ついで双眸が涙に揺れる。
——なぜ、泣くのだ。俺などのために。
親友の姿が眩しかった。その真っ直ぐで一片の曇りもない視線が、まるで見る者の心の闇を呑みこまんとするかのように感じられる。
カインは、目を逸らすことができなかった。
「すまなかった、セシル」背負いつづけてきた罪の意識が言葉となって、震えるくちびるから零れ落ちた。「俺は、何ということをしてしまったのだ……」
聖騎士が口を小さく振る。「操られていたんだ」
「いや、違う。意識はあった。それなのに、俺はローザを——」
「ローザ？」セシルの表情が一変した。「ローザは、どこに」
カインは、セシルの手を借りて立ち上がると、頭上を仰ぐ。「この上の層にいる」
「急がねばならんな」

シドの言葉が合図となり、一行は走りはじめる。
先頭をゆくのは、カイン。
――塔の最上層に、果たしてローザの姿はあるのだろうか。
ゴルベーザは、言っていた。「宴の準備は整った」と。
そして「無益な殺生ほど、空しいものはなかろう」とも。
カインは、さしたる理由もなく、その言葉を信じていた。己の心の暗部が、ゴルベーザの持つ闇と共鳴しているかのように、そこに嘘や偽りがないと囁いている。
とはいえ、奴の狙いは、まったく見当もつかなかったのだが。
階段を駆け上がり、前方に立ちはだかる扉を蹴り破る。
そこには、後ろ手で縛られた、ひとりの女の姿があった。
あれからずっと気を失ったままなのか、顔を伏せられたままだった。
頭上には、細いロープで吊り下げられた巨大な刃が揺れている。
「――ローザ！」
セシルがカインを追い越し、愛する女のもとへと駆け寄る。
その声に目を覚ましたのだろうか、ローザが顔を上げた。疲弊し切っているようで、表情は暗く、どことなく目も虚ろだった。
「気をつけろ。刃が落ちる――！」

カインの言葉に呼応し、セシルが抜刀。ローザの自由を奪う戒めを断ち斬るや、彼女の体に手をまわし、後方へ跳躍。
つぎの瞬間、いかなる力が作用したのか、ロープが切断されて巨大な刃が落下した。先刻までローザの囚われていた場所に、その殺意の切っ先が突き刺さる。
セシルは、大きく息を吐くと、剣を収めてローザに向き直った。
「間一髪じゃったの」とシド。
「信じてた」ローザが顔を伏せ、額をセシルの胸に預ける。「きっと助けに来てくれると」
「すまなかった。こんなに遅くなってしまって」
女は、小さく首を振った。
セシルがそんな彼女の背に腕をまわし、やさしく抱きしめた。
「やれやれ、お熱いこっちゃな」シドが笑った。
ヤンも笑みを浮かべ、「これでひとつ、目的を果たせましたな」
カインだけが、セシルとローザから目を逸らせるようにして床に視線を落としている。
――間一髪？
本当に、そうなのだろうか。
視界の隅で抱擁するふたりに、カインはなぜか違和感を覚えた。
ふと、ゴルベーザの言葉が思い出された。〝今しばらく待つがよい。やがてお前の恋敵であ

るセシルは命を落とし、あの娘はお前のものとなる――〟。

カインは、小さく嗤った。

俺は、何を期待しているのだ。もう宴は、終わったというのに。

――と。

セシルの腕の中で、ローザが身じろぎする姿が見えた。

彼女の右手に現れたのは、小さな、それでいて研ぎ澄まされた光。

カインは、弾かれたように顔を上げた。そして思い出す。

あれは、バロン城はセシルの私室での出来事――。

迫るカインに考えを改めさせようとして、ローザが短剣を取り出したことがあった。

恐らく、あのときのものだろう。

カインは戦慄した。宴は、まだ終わってなどいない。それは、これからはじまる。奴はローザの心を、あの忌まわしき術により操っているのだ。

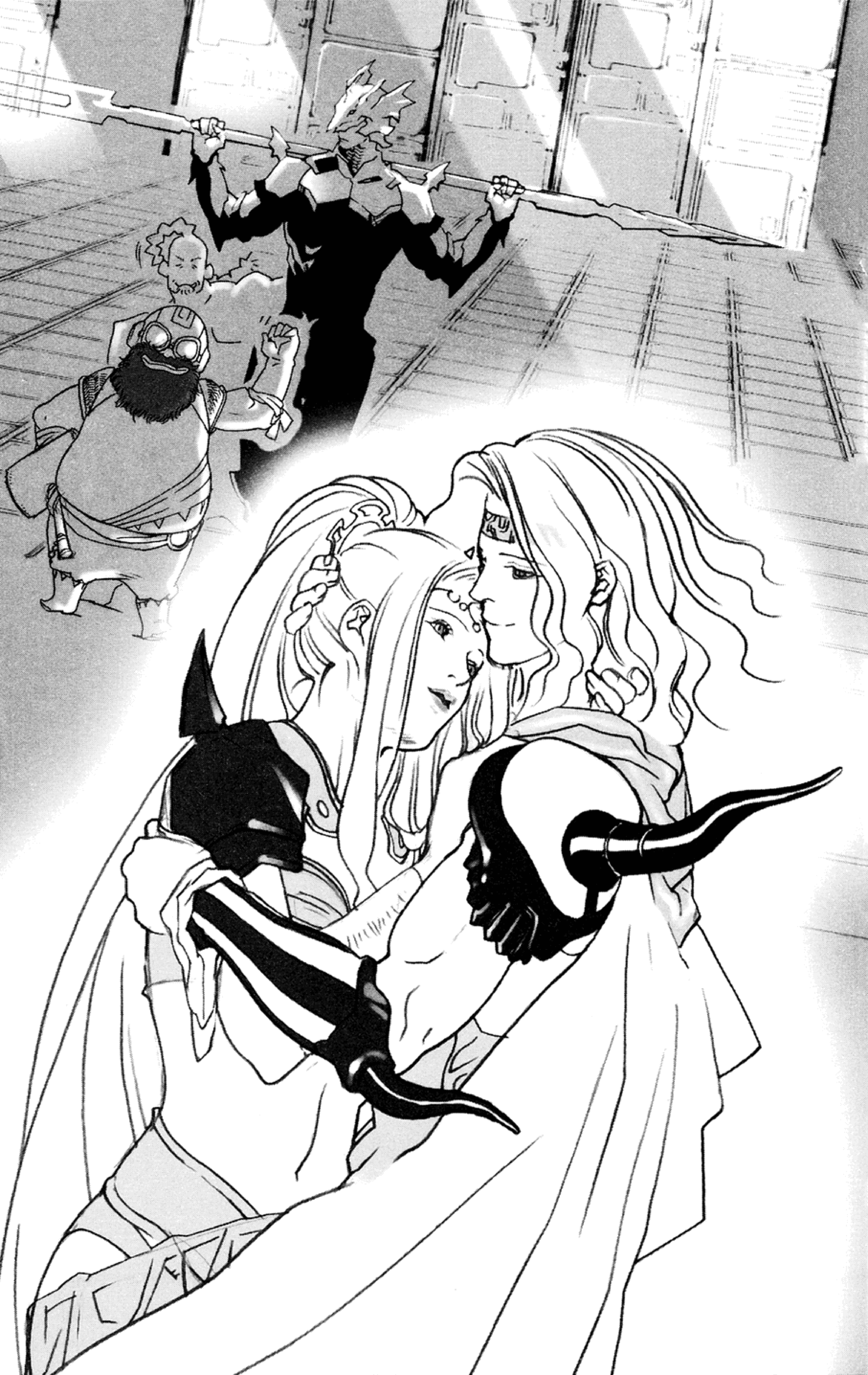
カインへの褒美――それは、ローザがセシルを亡き者にすること。

親友を裏切った男に相応しいのは、愛する男の命を奪った女。

同じ罪を背負えばこそ、ふたりは離れられなくなる。

ゴルベーザは、そう言いたいのだろう。

ローザの手にした短剣に気づいている者は、カイン以外にいなかった。このまま傍観者を決



めこめば、セシルはここで命を落とし、ゴルベーザを止める者はいなくなる。
そして、俺はローザを手に入れるのだ。
カインは、奥歯を強く噛み、両の拳を握りしめた。
いいのか？　本当に、それでいいのか？
確かに、それで俺の望みは叶うだろう。〝共犯〟という絆で、俺たちは結ばれることになり、互いの心の傷を舐め合いながら生きていくことになる。
——目を閉じろ。そうすれば、夢は現実のものとなろう。
そうカインに囁くのは、己の理性だった。しかし——
「ローザ！」
本能が叫んだ。
その白い手が血にまみれるなど、許すことはできない。
カインはローザに駆け寄ると、彼女の右手を取った。誰にも見咎められることなく、そこに握られた短剣を奪い、懐に隠す。セシルの戸惑いに気づいたが、構わなかった。
「許してくれ、ローザ。俺は、操られていたばかりではなかった」女の手を取ったまま、その場で跪く。「俺は、君に……側にいてほしかった」
ローザの掌に、あのときの傷があった。
カインがそこに強く触れると、わずかに血が滲んでくる。女の体が、小さく震えた。この痛

みが彼女の戒めを解くことを期待する。
「カイン――」
ローザの声に、竜騎士は顔を上げる。
白魔道士の目に光が戻っていた。だが、まだ状況が呑みこめないのだろう。目を大きく見開き、「私は、いったい――」つづく言葉を必死で探しているようだった。
そんな彼女に、カインは力強く頷く。
ローザは、かたわらのセシルを見やる。が、それは一瞬のこと。すぐにカインへ向き直り、同じように頷いた。「一緒に戦いましょう、カイン」調子を合わせてくる。
「ええい、ごちゃごちゃ言っとる場合じゃなかろうが」
シドが声を張り上げた。「ここは危険じゃぞ」
立ち上がったカインの肩を、セシルが叩いた。
「君の力が必要だ。ともに闘ってくれるな」
「セシル……すまなかった」頭を垂れた。
頷いたのか、ただ顔を伏せただけなのか。
それはカイン自身にもわからなかった。

## 4

と——。

遠く、地鳴りにも似た音が聞こえてきた。

同時に壁が、床が微細な振動を刻みはじめる。塔の崩壊という最悪の事態が脳裏をよぎった。

一刻も早く、ここから脱出しなければならない。

下層への階段を降りようとしたときのことだった。

風が吹いたように感じられた。つづいて前方の空間に異変が生じる。

不可視のはずの大気の流れが見えた。

それは渦巻き、次第に巨大化してゆく。

渦の中心に、人型が現出した。

風が止むと同時に、それが姿を現す。女性としか見えなかった。

だが、人間であるわけがない。絶世の美女としか形容のできない美貌に、凄惨な笑み。足先が床から離れていた。宙に浮いているのだ。

身の丈ほどある髪は、その一本ずつが生命を宿しているかのように不気味に蠢いていた。

「——バルバリシア」カインは叫び、手にしていた槍を握りしめると身構えた。

「お前も寝返ったようだね、カイン」バルバリシアと呼ばれた美しき魔物のくちびるが、さら

に吊り上る。「愚か者め。それだけの力を持ちながら」
お前も――
その部分で、ローザが身を強張らせたが、それに注意を払う者はいなかった。
「寝返ったのではない」とカイン。
その言葉は真実だった。誰に命じられたわけでもない。また、誰に操られたわけでもない。内なる声に導かれるまま、本能に従って生きてきただけなのだ。
誰もがそうであるように、カインの心の中にも光と闇とがある。相反するそのふたつは、しかし、たったひとつの望みへと向けられている。愛しいローザ、その人に。
――そのためならば、俺は聖者にも悪魔にもなれる。
「覚悟はできているようね」とバルバリシアが嗤った。「だが、もはや〝堕星(メテオ)〟の使い手はいない。ここで仲良く葬り去ってやろう」
女の体が、疾風の速さで動いた。
突き出されたのは、肉食獣の如く引き締まった腕。
それをシドが寸前でかわした――ように見えたが、のけぞる老技師の左の肩口から、血の赤が弾け飛んだ。「くっ、何じゃこれは！」
「風だ」カインが叫ぶ。「こいつは風を自在に操る」
バルバリシアの体の動きに大気が反応し、それが凶器となる。己の間合いを無視した攻撃を

仕掛けることができるのが、四天王のひとりである所以。
セシルが、傷ついたシドをかばうようにして、その前に立つ。「ヤン！」
「応！」弁髪の拳闘士は、風の魔女へ突進。
右の腰にためた拳を、相手のみぞおちへと叩きこむ。
しかし宙を舞う羽毛のように、バルバリシアの体は、ヤンの作り出した大気の乱れを敏感に察知。軽やかにその必殺の一撃をかわす。
拳が空を切りながらも、ヤンに焦りの表情はなかった。
体を沈めると、すぐ背後にいたカインが跳躍する。
ヤンの動きは、竜騎士の姿を隠すためのものだった。
虚を突かれた形のバルバリシアは反応できなかった。
「おのれ！」
カインの槍に腹部を貫かれ、美貌が歪む。悪鬼の如き表情へと一変していた。
「──む」ヤンが後方へと飛び退く。
カインもそれに気づき、間合いを広げた。
「これは──」とセシル。
周囲の大気が、足元から上方へと急激に上昇。
バルバリシアの怒気を孕むその颶風（ぐふう）は、頭上で黒煙のように姿を変えた。一瞬、空が割れ、

光が疾る。暗雲の中では、そこに生じた無数の氷の結晶同士が激しい摩擦をくり返している。それにより負の電荷が蓄積されていた。

一行を取り巻くのは正の電荷。正と負——両者の間の電位差が、一線を越える。

「喰らうがいい」バルバリシアの声が合図となった。

放電は、落雷という形で一行を直撃。それは電位差が中和され、大気中から耳を聾する轟音が消失するまでつづき、カインたちは片膝を折ることとなった。

と——五人の体を淡い光がやさしく包みこむ。

ローザの〝療光(ケアルラ)〟だった。

失われた生命力が戻ってくる。

とはいえ、戦況が不利であることに変わりはない。

「ローザは、わしに任せろ。セシル、お前は——」

シドの声に、聖騎士が頷く。

セシルとヤンは互いに顔を見合わせたあとで、バルバリシアとの間合いを一気に詰めた。

気勢をそぐように、再び大気が動く。

風は、瞬時にして勢いを増し、魔女を中心とした渦を形成した。

ヤンが拳を叩きこむ。だが、大気の壁を貫くことはできず、その代償として手を鮮血に染めた。風が止まぬ限り、手出しはできぬようだった。

刹刀の如き旋風の中、バルバリシアの体が浮かび上がる。
その顔には恍惚の表情。拳の痛みに苦悶するヤンを指差した。
「させるか！」セシルが頭上に掲げた剣を振り下ろす。しかし見えない壁に阻まれ、その一撃は無情にも跳ね返されてしまう。
風が舞ったかと思うと、その急激な大気の流れがヤンを呑みこんだ。
嵐に翻弄される木の葉のように、ヤンは死の舞踏をはじめる。
やがて踊り疲れたかのように、僧兵の長は崩れ落ちた。
つぎにバルバリシアが指差したのは、セシル。
そのとき、カインが跳躍。頭上の暗雲の中に姿を消したかと思うと、槍の切っ先を足下のバルバリシアへ向けて急降下する。
飛行中の竜の背から敵陣の只中へと飛び降り、その勢いを攻撃に転化し、壊滅的な打撃を与える——竜騎士がもっとも得意とする奇襲作戦だった。
カインは、それを応用したのである。
渾身の一撃は、バルバリシアの作り出した風の壁を粉砕する。
魔女の端正な顔が、驚愕に歪む。
カインは嗤った。「空中戦は、お前だけのものではない」
その機を、セシルが見逃すはずもなかった。ヤンも立ち上がり、拳を固める。

そして――

バルバリシアが、ついに両膝を床につく。己の血にまみれた掌を見つめている。肩が小さく震えたかと思うと、顔を上げた。そこには恍惚の笑み。

「私が死ねば、この塔は跡形もなく消えうせる」

「何――」

「大地へ叩きつけられるまで祈りでも捧げているがよいぞ」

断末魔の哄笑のあと、バルバリシアの体がひび割れ、砕け散った。

同時に、先刻からつづいていた塔の振動が、激しさを増す。

「エンタープライズへ」とセシル。

だが、シドが「駄目じゃ、間に合わん」

「私につかまって」ローザが一行の顔を見まわす。

カインは、しばし躊躇したのちに、差し出されたローザの右手を握った。

ローザがカインを引き寄せ、耳元で囁く。「ありがとう」

竜騎士は、視線をそらせた。

視界が眩い白に包まれる。

ローザの〝転移（テレポ）〟が発動した瞬間、塔が崩壊をはじめた。

# 5

緩い風が、大地を渡ってゆく。

エンタープライズ号の甲板に立つローザは、その風に誘われるかのように船首へと足を向けた。右の掌に巻かれた包帯を、やさしく握りしめる。

眼下に、アガルトの村が見えた。

バロンより遥か南方、採掘された鉱石を主な収入源とする小さな村である。

そこから視線をやや北へ向けると、噴煙を上げる山が目に入った。

あれが、地底世界への入り口なのは間違いない。

一行が地底を目指すことになったのは、カインの言葉が発端だった。

ローザの〝転移(テレポ)〟によって、辛くもゾットの塔から脱出した一行は、バロン城のセシルの部屋で実体化した。

命こそ助かったものの、セシルの落胆は大きかった。

テラを失ったばかりか、トロイアの神官から借り受けたクリスタルも奪われてしまった。ゴルベーザを倒し、四つのクリスタルを奪還するという目論みは、すべて潰えたのだ。

ローザの〝治癒(ケアル)〟で傷を癒すヤンとシドの表情も一様に暗い。

そのとき、カインが語りはじめたのである。

「ゴルベーザは、まだクリスタルを四つしか揃えていない」
意味を理解しかね、一行は互いに顔を見合わせた。
カインがつづける。「そう……闇のクリスタルだ」
「そういえば」とセシル。「〝土のクリスタル〟を手渡したときに、奴は言っていた。これで地上の四つのクリスタルは、我が手中に収まった——と」
「噂に聞いたことがあるぞい！」寝台に腰掛けていたシドが立ち上がった。「この世界の四つのクリスタルは、言うなれば表のクリスタル」
そのあとを引き受けたのはヤン。「つまり裏のクリスタルも存在する、と——？」
「しかし問題は、それがどこにあるのかじゃな」
シドは大きく息を吐くと、腕組みをした。「言葉どおりに考えるのならば……表が地上だとすると、裏は地底ということになるが」
「さすがシドだな」カインが感心したように言う。
「しかし穴でも掘らんと地底へは行けんぞ」
「ゴルベーザは、言っていた。光と闇……すべてのクリスタルを揃えたときに、月への道が開かれると」カインは窓辺に近づき、そこから外を眺める。
「月への道？」セシルが眉根を寄せた。
「それ以上のことは、この俺にもわからぬ」一行を振り返るカイン。その手には握り拳ほどの

大きさの、真紅に輝く石があった。「これを渡しておこう」
石を受け取ったセシルは、それをまじまじと見つめた。
溶岩の塊といったような石である。
表面が、今にもどろりと溶け出してしまいそうなほど赤く、わずかに明滅していた。
しかし熱はなく、ひんやりと冷たい。
「これは――」とセシルは顔を上げ、カインを見やる。
「鍵だと言っていた。ゴルベーザがな」
「――」
「この石を掲げることで、地底への道が開けるらしい」
「それは、どこなの？」ヤンの治療を終えたローザが、ふたりのもとへやってくる。
カインは小さく首を振った。「わからん」
「何を考えこんどる。わしらには、エンタープライズがあるじゃろう。わからなければ探せばよい。この世界なんぞ、あっという間にひとまわりじゃわい」
「でも、あれはゾットの塔に――」
「ふん、甘く見てもらっては困るのう。最新型の飛空艇じゃぞ。遠隔操作で、すでにこのバロンへと戻ってきとるわい」
「ならば、決まりですな」ヤンが拳を固めた。

「出発は明朝。それまで、ゆっくりと体を休めることじゃ」
こうして、地底への道を探す探索がはじまった。
エンタープライズ号を駆り、世界中のあらゆる土地を訪れる。
最後にたどり着いたのが、辺境の村アガルトだった。
一行は、ドワーフ族の末裔が住むと言われるこの村の中央部に、古ぼけた井戸を発見する。
セシルの掌の上で、真紅の石の明滅が、何かに呼応するかのように速まってゆく。
「どうやら、ここのようじゃな」
シドの言葉に、セシルは頷き、井戸の中へ石を投げこんだ。
ふた呼吸ほどののちに、大地が揺れた。
村の北にそびえるアガルト鉱山が鳴動し、噴火した。
エンタープライズ号へと戻った一行が、上空から山頂を見下ろすと、そこには巨大な穴が穿たれているのが見えたのだった——。
船首に立つローザは、黒煙を吹き上げるその大穴を見つめている。
——と。
かたわらにカインが立っていることに気づいた。
「お前は船室へ行っていろ。出航する」竜騎士が言った。
「カイン、私は——」

ローザは何かを言いかけたが、口をつぐみ、カインに背を向け歩きはじめる。
胸に去来するのは、例えようのない不安。ゾットの塔で、カインの静止がなければ、自分はセシルを傷つけていた——否、命を奪っていたかもしれない。その点では、カインに感謝してもしきれない。しかし、それでもカインの心が見えなかった。
ローザとカインは、幼いころから、ずっと一緒に育った。
互いの性格は、知り尽くしているつもりだった。そう、これまでは——。
しかし、彼は変わった。ゴルベーザに操られ、自分の知らないことを知り、自分が見たこともないものを見てきたはずだ。
船室へとつづく扉の前で、ローザは振り返った。自分の知らないカインが、そこにいる。もう、あのころには戻れないのだと、ローザは痛感し、目頭が熱くなる。
エンタープライズ号が動きはじめた。
船首を下げ、大穴に向かって急降下する。
黒煙に突入したことで、周囲が闇に染まってゆく。
ローザは、カインの姿が闇と同化してゆくような錯覚を覚え、身震いする。
しかし——それでもローザは、カインを信じた。
思い出は決して自分たちを裏切らない。そう、心に強く言い聞かせて。



# 第8章

FINAL FANTASY IV
ファイナルファンタジーIV

# 1

闇に塗り潰されていた視界が、一瞬で真っ赤に染まる。

同時に、息苦しいまでの熱風がエンタープライズ号の甲板を舐めていった。

カインは、船首から体を乗り出し、眼下の光景を見やる。

赤と黒の斑（まだら）が広がっていた。

広大な溶岩の海に、黒々とした陸地が見える。

――地底世界は、灼熱の地だった。

このどこかに、四つの〝闇のクリスタル〟が隠されているらしい。

絶対に、奴に渡してはならない。

しかし、あのゴルベーザを出し抜くことなど、果たしてできるのだろうか。

無理だろうとカインは思う。

あの漆黒の魔人は、こちらの動きをすべて見透かしているかのようだった。もしかしたら、この大穴を開くための赤い石を俺に持たせていたのも、計算の内なのかもしれない。

となれば、地底世界で待ち受けているのは、さらなる悲劇。

結局のところ、俺たちは、奴の掌の上で踊らされているだけなのか。

カインは、静かに眼を閉じた。

それでも不思議なことに、カインはゴルベーザを憎んではいない。

奴は、俺をヤンやローザのように操ろうとはしなかった。俺の心の闇が、ゴルベーザと共鳴し、同調したに過ぎない。それを知っていてもなお、奴は――。

ゴルベーザの真意が知りたかった。

ふと、自分はどうしてここにいるのだろう。

そんなことを考えてしまう。

一度は仲間から離れ、世界を我が物にしようとする勢力に加担した。それなのに、なぜ恥をさらしてまでセシルたちのもとへ戻ってきてしまったのか。

わかっている。名誉や自尊心をかなぐり捨ててでも手に入れたいものがあるからだ。

カインは頭上を仰ぐ。

それでも涙は零れてきた。

視界いっぱいの闇が、生き物のように揺れている。

ここからは星々も、月も見ることはできない。

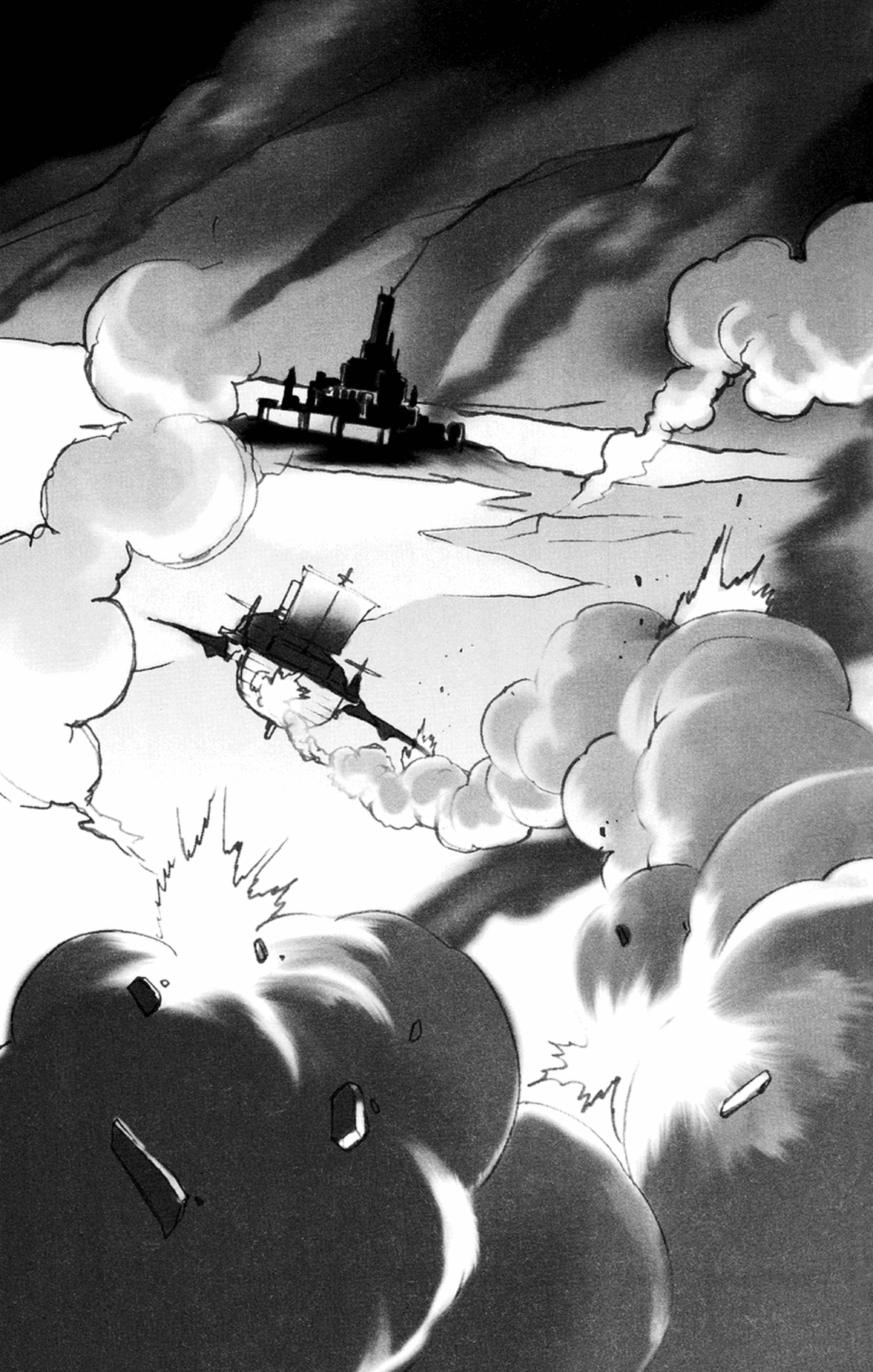
――月か。

ゴルベーザは、言っていた。

すべての光と闇のクリスタルがそろえば、月への道が開かれると。

月への憧れなどは、カインには一切ない。

しかし、犯した罪を一生背負いながら生きてゆくことを考えれば、この母なる大地を離れ、自分を知る者のいない世界で暮らすのも悪くない選択だと思えてくる。
ローザとふたりきりで月に降り立った自分の姿を想像した。
「あれは――！」
カインの夢想を断ち切ったのは、セシルの叫びだった。
前方へと視線を転じる。
二艇の《赤き翼》があった。
それは、すでにゴルベーザがこの地底世界へと潜入していることを物語っている。
カインは己の無力を悟り、奥歯を強く噛んだ。
「交戦中よ。でも、いったい誰と――」ローザが船首へと駆け寄ってくる。
「戦車部隊のようだな」言って、カインは舵を握るシドを振り返った。「シド、このエンタープライズには、何を積んでる」
「武器などあるわけがなかろうが」
カインの予想したとおりの答えだった。
シドは、自分の開発した飛空艇が戦に使われることを恐れていた。そのため、これまでずっと武器の搭載を頑なに拒んでいたのだった。
ゴルベーザによって破壊のための兵器へと生まれ変わった《赤き翼》を、彼がどういった気



持ちで見つめているのかは、想像するまでもなかった。
再び、カインは前方へと向き直る。
あの戦車隊への援護はできないということになると——
「危険だ」セシルが叫んだ。カインと同じことを考えていたようだ。
このまま飛行をつづければ、無数の砲弾の行き交う戦場へと、無防備なまま突っこむことになってしまう。それは避けなければならない。
しかしシドは、「駄目じゃ、ここでは旋回できんぞ」
「どうして——」
「このエンタープライズは装甲が薄い、溶岩の上は飛べぬのじゃ」
「つまり、このまま突っ切ると?」とヤン。
「それしか方法はないからの」
そう言って、シドが舵輪の右にあるレバーを引く。
エンタープライズ号の推進力が増した。
その瞬間、甲板が激しく揺れる。ローザが悲鳴を上げた。
エンタープライズ号が被弾したのだ。
恐らく《赤き翼》がこちらの存在に気づき、標的を変えてきたのだろう。
「ええい、強行突破する! しっかりつかまっとれい」

こうなっては、すべてを運に任せるしかなかった。
二度目の被弾。エンタープライズ号の速度が、がくりと落ちる。
機動力を活かすために、装甲を薄くしたのが裏目に出たようだった。
「痛いか、エンタープライズ！　辛抱してくれい！」
シドの祈りは、天に届かなかった。
「――落ちる」セシルが叫ぶと同時に、エンタープライズ号が失速。
大地へ吸い寄せられるかのように高度を落としていった。

2

「ご無事だったか」
そう気遣いの言葉をかけてきたのは、ドワーフの王ジオットだった。
《赤き翼》からの砲撃を受けて不時着したエンタープライズ号は、想像以上の損傷を被り、このまま飛行をすることは危険な状態にあった。
そこで一行は、飛空艇をあとにし、近くにそびえる城へ向かったのである。
城に住まうのは、ドワーフという種族。肌は黒く、背が低い。しかし、がっしりとした体格をしており、何よりも人間に対して非常に好意的だった。

そのドワーフたちをまとめ上げ、地底世界を治めている王ジオットも、不時着したエンタープライズ号を気にかけており、開口一番、一行の無事を確かめてきた。
そんなジオットに片膝をつき、礼を尽くしたあとで
「闇のクリスタルは――」とセシルが切り出す。
ドワーフの王は、小さく首を振った。「残念だが、すでにふたつのクリスタルが、奴らの手に渡ってしまっておる」
「――やはり間に合わなんだか」とヤン。
「ここまで、奴の動きが速いとはな」カインも拳を固める。
「いやいや、勝負がついたわけではないぞ」ジオットが、そんなふたりに微笑む。「残りのふたつは、まだ無事だ。そのうちのひとつは、この城にある」
なるほど、とヤンは思った。
《赤き翼》がドワーフたちと交戦していたのは、この城にあるクリスタルを奪うためだったのだ。となると、まだ安心はできない。相手はあのゴルベーザなのである。再び襲撃を仕掛けてくるのは火を見るより明らかだった。
それはジオットも理解しているようだ。だからこそ、
「とはいえ、クリスタルを奪われるのも、時間の問題かもしれぬがな」
と弱気な言葉を吐いたのであろう。

いかに屈強な種族ドワーフとはいえ、戦車だけでは城を守りきれるものではない。
ヤンは頷いた。「確かに飛空艇相手では分が悪いですな」
「ほう、あれは飛空艇と呼ばれておるのか。ここには空がないからのう。上の世界に、あのようなものがあるとは思わなんだ」
「何があっても、奴――ゴルベーザにクリスタルを渡してはなりません。それを阻止するためならば、ぼくたちも喜んで協力させていただきます」
立ち上がったセシルに、ジオットが頭を下げる。「それはありがたい。自慢の戦車隊も、上空からの攻撃にさらされては、ちと苦しい。そこで相談なのだが……そなたたちの飛空艇とやらで、我らの戦車隊を援護してもらえぬだろうか」
「それが――」
言葉に詰まったセシルのあとを、シドが引き受けた。「奴らからの砲撃を受けて不時着したことで、ちょいとばかりいかれちまったんですわい」
「そうか」とドワーフの王は嘆息し、頭上を仰ぎ見た。とはいえ、すべてをあきらめたという表情ではない。「修理には、どれぐらいの時間がかかりそうなのだ。必要なものがあれば、こちらで用意させてもらうが」
「ありがたいお言葉じゃが、応急処置ぐらいしかできそうにありませんな」
「ここでは設備が足りぬか」

「それもあるが、飛べるようになったところで、エンタープライズの装甲では溶岩の海を渡ることはできんのです」
「なるほど。では、どうすれば——？」
「一度、地上へ戻り、ミスリルで装甲を施さねばならんじゃろうな……」
そこでシドは考えこむようにうつむく。が、すぐに顔を上げた。「よっしゃ。ひと走り、行ってくることにするかのう」
ローザが目を丸くした。「行くって……どこへ」
「バロンに決まっておろう」
「——シド！」セシルも驚いたように声を上げる。
「何、すぐに戻るわい。よい子で待っとるんじゃぞ」
「シド……気をつけて」
不安そうなローザに、シドは、「ほっほ。ローザよ、わしに惚れるなよ！」と微笑んだあとで、玉座の間から出て行った。
その背中が見えなくなってから、セシルがジオットへと向き直る。
「ところで、この城のクリスタルは、いったいどこに？」
玉座に座るジオットが、肩越しに背後を見やった。
「じつはな、この玉座のうしろに隠し扉がある。わしの目の黒いうちは、何人たりともクリス

タルには近づけぬというわけじゃ」

自信たっぷりの王を尻目に、ヤンは、眉根を寄せた。

この気配は、いったい……。

神経を研ぎ澄ます。ヤンの目が鋭くなった。睨むときの視線が向けられているのは、ジオットの言う隠し扉の奥。そこにはクリスタルが置かれているという。

「どうした、ヤン」とセシル。

「——気配を感じる」カインも、それに気づいたようだった。

「間違いない。あの扉の奥に、何者かが潜んでいる」

ヤンの言葉に、ジオットが立ち上がる。そして、

「何をしとる。早く扉を開けい！」ドワーフの近衛兵に命じた。

セシルを先頭に、ヤン、カイン、そしてローザが開いた扉の奥へと飛びこむ。

小部屋の中央に台座があり、そこに闇のクリスタル——その名のとおり、黒い輝きをたたえた水晶が安置されていた。

クリスタルは、無事だった。

しかし、ヤンの顔に安堵の表情は浮かばない。見つめているのは、床に転がる六体の人形。親が幼い娘に買い与えるような、何の変哲もない人形である。

なぜ、このようなものが、ここに……。

と――。

人形が一体、また一体と起き上がる。

「こいつら……生きているのか」カインは身構えた。

一行の見つめる中、人形たちが、けたたましい声で嗤(わら)いはじめる。

「ぼくらは、陽気なカルコブリーナ」

「怖いけれど、じつは可愛い人形さ」

「まったく、馬鹿な人間たちだよね」

「こんな場所まで、やって来るとは」

「残念だけど、もうお別れの時間だ」

「その首を手土産にさせてもらうよ」

3

襲いかかってくる人形に、セシルたちは応戦。

魔物を相手にしたときと勝手は違うものの、容赦などできぬ。つぎつぎと人形たちを斬り捨ててゆく。最後の一体を両断したところで、一行は大きく息を吐いた。

しかしヤンは、緊張を解こうとはしなかった。

生命を宿した人形の話など、これまでに聞いたことはない。とすると、何者かに操られていたと考えるのが適切であろう。
そしてその者は、近くにいる可能性が高い。
人形の残骸が、小さく震えた。
「くそー。よくもやったな、人間め」
「痛いよー、痛いよ痛いよ痛いよー」
「でも、もうこの場所は報告済みさ」
「さあ、このあと何が起こるかな？」
「ぼくらの仇を討っていただこう！」
「ゴルベーザ様！　どうぞこちらへ」
言い残し、人形が跡形もなく消え失せた。
同時に、一行の前方に闇が生じる。それは次第に人型となり――
「ゴルベーザ！」ヤンが叫んだ。
漆黒の甲冑に身を固めた男が、そこに立っていた。
「先日の宴は気に入ってもらえなかったようで残念な限りだ」
ゴルベーザは、セシルを、ついでローザ、最後にカインを見つめた。「私なりに趣向を凝らしたつもりであったのだがな」

「黙れ！」セシルが剣を正眼に構える。「クリスタルは渡さない」
漆黒の甲冑が揺れた。嗤っているようだった。
「私が、なぜクリスタルを集めているのか――その理由も知らぬというのにか」
「――――」
「光と闇、合わせて八つのクリスタルは、月へとつづく封印されし道を指し示すための道標。すなわち、バブイルの塔を復活させる鍵となるのだ」
バブイルの塔――。
それはバロンより遥か南、エブラーナ領にそびえ立つ巨大な塔である。いつの時代に建てられたものなのかさえも定かではない。入り口には強固な封印が施されており、何者の侵入も拒みつづけていた。
そのバブイルの塔が、月への道だというのである。
ゴルベーザはつづける。「月には、我らの人知を超えた力が眠るという」
「その力を手に入れようというのか」とセシルは身構えた。
ヤンも浅く腰を落とす。「そのようなことを許すわけにはゆかぬ」
「このクリスタルで七つ。残すところは、あとひとつとなったわけだ」
ゴルベーザは、左手の台座で鈍く光る〝闇のクリスタル〟に目をやったあとで、一行へと向き直る。「これも、すべてお前たちのお陰だ。感謝している」

その言葉が合図となった。
カインが頭上高くへ跳躍した直後に、ヤンは拳、セシルが剣を立てつづけにゴルベーザの甲冑に叩きこむ。ついで落下の勢いを利用したカインの一撃。
ゴルベーザは動かなかった。
「この程度か」ただ甲冑をわずかに揺らし、嗤っただけ。「では、前祝いとゆこう。受け取れ、これが私からの最後の贈り物だ」
漆黒の面頬の奥から、鉛の呟きが漏れた。
ヤンは、それが呪文の詠唱だとすぐに思い当たる。「させるか！」
追撃のため、拳を固めた瞬間だった。
周囲の大気が急激に低下。肌に刺すような痛みを感じた直後、その異変に気づく。足が動かない。否、指先さえも動かすことができなくなっていた。
呪縛の冷気である。
「動かぬ体に残された瞳で、真の恐怖を味わうがよい」
ゴルベーザが右腕を掲げる。「参れ、黒竜！」
床から黒い霧が立ち昇ったかと思うと、ゴルベーザの前に巨大な影が出現した。
ヤンは、我が目を疑う。
ゴルベーザが召喚したのは、闇色をした竜。

その鋭い双眸が自分に向けられていることを、ヤンは理解していた。
ここで死ぬわけにはゆかない。
もちろん、死ぬのを恐れているわけでもない。
ヤンは全身に力をこめた。しかし指一本さえも動かすことができなかった。
ホブス山での出来事を思い出す。
そう、あのとき私は十七人もの掛け替えのない仲間を失ってしまった。
黒竜が喉を垂直に立て、咆哮を上げた。
ファブールから出航した船での悲劇が蘇る。
海に投げ出されたリディアを、私は救うことができなかった。
黒竜の吐き出した漆黒の霧が、ヤンを包みこむ。
体中の生命力が、根こそぎ失われた。
呪縛こそ解かれたものの、死の一歩手前にある肉体が床に崩れ落ちる。かろうじて許されているのは、呼吸をすることだけ。自分の意思では、目も閉じられない。ヤンは、目の前でくり広げられる、さらなる惨劇を見つめる他なかった。
カインが黒い霧に呑みこまれ、力尽きたように倒れる。
ヤンの脳裏を横切ったのは、賢者テラの最期。
ゾットの塔で彼を救えなかったことが、今でも心を締めつける。

つぎに黒い霧の餌食になったのは、ローザ。
悲鳴も上げずに、気を失ったかのように床に伏した。
——やめてくれ！
ヤンは声なき悲鳴を上げた。
もう、たくさんだ。これ以上、大切な仲間が倒れてゆくのは見たくない。
黒竜が最後に目をつけたのはセシルだった。やめろ。やめてくれ！
——と。
ヤンの祈りが天に届いたのか、周囲の闇が薄れる。
いつの間にか、大気に光の粒子が混じっていた。その白い粒子は、黒竜の前に立ちはだかるようにして収縮。つぎの瞬間、実体化し、美しい白い竜の姿となった。
純白の翼が開くと同時に、白き竜は〝息（ブレス）〟で闇を打ち払う。
黒竜が霧散し、呆然と立ち尽くすゴルベーザの姿が見えた。
「もう大丈夫よ」
白き竜が消えたと同時に、どこからか声が聞こえた。
姿を現したのは、緑の髪をした魔道士と思しき女性だった。
「君は——」とセシル。
ヤンも己の目を疑った。

しかし彼女は、あのとき確か七つか八つの少女だったはず。それなのに、今、目の前にいる彼女は、成人した女性にしか見えない。

いったい、どうして――?

疑問は尽きなかったが、それでもヤンは素直に望外の再会に涙した。

お帰り、リディア――。

## 4

自由を取り戻したセシルによって、生死の境を彷徨っていたローザ、カイン、そしてヤンが再び立ち上がる力を取り戻す。

セシルの心にも様々な疑問が渦巻いていた。だが、今はそのことを考えるような余裕などない。ゴルベーザを倒し、クリスタルを守ることだけに意識を集中させる。

幸いにして、リディアの登場と黒竜の消滅によって、ゴルベーザは動揺しているようにも見える。この機を逃すわけにはゆかなかった。

リディアの召喚した土の巨人タイタンが、大地を揺るがす。

一時的に平衡感覚を失ったゴルベーザに向けて、セシルとヤンは一気に間合いを詰める。

ふたりが注意を引きつけているところへ、頭上から槍によるカインの一撃。



息をつく暇を与えぬ波状攻撃で漆黒の魔人を追いつめてゆく。
——と。
追撃を試みたヤンに向けて、ゴルベーザが右の掌をかざす。
セシルは反射的に動いていた。振り上げた剣を一閃。
ゴルベーザの右腕が宙を舞った。激痛を意味する咆哮が大気を震わせる。
ヤンは勢いを落とすことなく、ゴルベーザの懐へと飛びこみ、腹部へ左の拳。
「我らが同士の無念を、ここに！」
さらに右の拳をめりこませる。「そしてテラ殿の仇を——！」
ゴルベーザは体をくの字に折り、そのまま床に両膝をついた。
とどめとばかりに、ヤンの爪先が漆黒の面頬を蹴り上げる。
それで勝負がついた。ゴルベーザは背後へと吹っ飛び、背中から落下。動かなくなった。
五人の顔に笑みが浮く。
自分たちは、あのゴルベーザを倒し、クリスタルを守ったのだ。
「あなたのお陰よ」
とローザが、自分たちの窮地に駆けつけてくれたリディアを抱きしめた。
召喚士は、ローザの腕の中で照れ臭そうに微笑む。
「しかし、その姿は、いったい——」とセシル。

それは、誰もが感じている疑問だった。
ようやくローザに解放されたリディアは、
「幻界へ行っていたの」遠くを見るような目つきで語りはじめた。

＊

ファブールからバロンへと向かう途中、幻獣リヴァイアサンに遭遇してしまった。
激しい波に船は翻弄され、風が吹き荒れる。
私は海へ投げ出され、大渦に巻きこまれて意識を失った。
そして――
気がつくと、私はひとり幻界にいた。
幻界――それは幻獣たちの住まう、ここことは別の世界。
私はこの地を治めている幻獣王様と王妃様のもとへ通され、そこでリヴァイアサンが現れたのが偶然ではなかったことを知った。
幻獣王様こそが、あのリヴァイアサンだったのだ。
「すまなかったな、リディア」と幻獣王様が頭を下げた。
幻獣が人間界へ姿を現すには召喚士を媒介とする必要がある。そうでなければ、人間界に現

出してもその強大な力を制御できなくなってしまうからだ。
それを理解していながらも、幻獣王様はリヴァイアサンへと姿を変え、人間界へと現れた。結果としてリヴァイアサンは風を乱し、海を荒らし、船を沈めるという大惨事を引き起こしてしまったが、そこには一切の悪意や敵意はなかった。
幻獣王様は、幻獣オーディンからの報告によって、《赤き翼》が出撃したことを知っていた。その襲撃から、何としても私たちを救おうとお考えになった。もしも幻獣王様が行動を起こさなかったら、私たちは海の藻屑となっていたでしょうね。
でも私は、行方の知れなくなったみんなのことが心配だった。
そうしたら今度は王妃様が、
「心配はいりませんよ、リディア。あの事故で命を落とした者はいません」
とやさしく教えてくれた。
ふたりは、私のことをとても気に入ってくださったようで、このままずっと幻界で暮らしてはどうか、と薦めてくる。
私は迷った。
人間界へ戻ったとしても、故郷の村はもうない。ここにいれば、幻獣のみんながやさしくしてくれ、争いや悲しみといったものと無縁に暮らすことができる。
でも――

人間界では、みんなが闘っている。
自分でない誰かのために、涙をこらえ、命を懸けて。
だから、私は言った。「幻獣王様、私は帰らなくてはなりません」
こうしている間にも、人々の間に悲しみの輪が広がっているだろう。
私はまだ幼い。でも、きっと私にしかできないことがあると思う。だから――。
「仲間を想うお前のその気持ちを尊重しよう。しかしな、リディア」
幻獣王様は、そこで難しそうな顔をした。「今すぐ仲間のためになりたいと考えているのならば、余計に帰ることを急いではならんぞ」
私には、その意味がまったく理解できなかった。
王妃様が微笑んだ。「幻界と人間界では、時間の流れ方が違うのです。ここでは一瞬が永遠となり、また永遠が一瞬となります」
さらに頭が混乱してくる。まるで謎かけをしているようだ。
「お前にも理解できるように話してやろう」困惑する私に、幻獣王様がようやく助け舟を出してくれた。「ここ幻界では、人間界のように時間の流れが一定ではないのだ。お前が望むのならば、お前の時間は永遠にも、あるいは一瞬にもなる」
つまり、こういうことだった。
幻界で暮らす者は、それぞれ自分の望む時間の早さの中で生きることができる。

人間界での一日が、ここでは一瞬にもなるし、十年にもなる。
明日、人間界へ戻ったときに数百年が経っていてほしいと願えば、そのとおりになる。また十年後に帰ったときに十日しか過ぎていないことを望むなら、そうなる。
急ぐ必要などない、幻界にいる限りは。
突拍子もない話だったが、なぜか私には信じられた。
だから、幻獣王様の薦めに従って、この幻界で暮らすことにした。
幻獣たちとの友情を深め、召喚魔法を学ぶ日々。
十数年にも及ぶ長い修行の中で、私は心身ともに成長していった。
ある日、私は幻獣王様に呼び出された。
「――お前の大切な仲間が窮地に陥っておる」
その言葉が、長かった修行の終わりを告げていた。
セシル――。
その名が心に浮かぶ。片時も忘れたことなどない。
今の私ならば、彼の力になれる。彼を支えることができる。
「リディア……私たちは、あなたの味方ですよ」名残惜しそうに、王妃様が私の手を握ってくれた。「帰りたくなったら、いつでも戻っていらっしゃい」
こうして私は、幻界をあとにする。

人間界では、あれから十日ほどしか経っていなかった。
幻獣王様の言葉に、嘘はなかったのだ。

＊

「この子が、あのミストの少女だとは――信じられん」
カインは、ただ呆然とリディアを見つめた。
うれしくないはずがない。
王の命だったとはいえ、自分とセシルがミストの村の壊滅に関わってしまったのは事実なのだ。その罪は決して消えることはない。しかし、こうして彼女が生きてくれていたことを知ると、背負っていた罪の重さが、少しだけ軽くなったような気がする。
「私のことは覚えているかしら」とローザ。
リディアは微笑んだ。「忘れるわけがないわ」と、そこで何かに気づいたように、周囲を見まわした。「テラのお爺ちゃんとギルバートは――」
沈黙。
戸惑うリディアに、セシルが言った。「テラは、ゴルベーザとの闘いで命を落としてしまった。ギルバートは、深い傷を負い、トロイアで療養している」

「そうだったの」リディアは顔を伏せた。「もっと早く、こちらへ戻ってきていたら——」
「違うぞ、リディア」ヤンが彼女に肩に触れる。「すべての元凶は、このゴルベーザだ」
一行が、床に倒れたままのゴルベーザの遺体を見つめる。
そのときだった。
少し離れたところに落ちている、セシルによって断ち斬られた右腕が動いた。
指が床をかき、わずかずつではあるが前進をつづける。
その目指す先には〝闇のクリスタル〟があった。
一行は驚きの余りに、その奇妙な光景を凝視するだけだった。
主なき腕が、ついにクリスタルへと到達し、それをしっかりと握る。
「私は——死なぬ」
どこからか、鉛の声がした。
呪縛が解かれたかのように、カインがクリスタルへと駆け寄る。
しかし間に合わなかった。寸前で腕はクリスタルとともに消滅してしまう。
振り返ったカインは、ゴルベーザの遺体も消え失せていることに気づき、戦慄した。

5

残る〝闇のクリスタル〟は、ひとつだけ。
ドワーフ城より南西、溶岩の海に隔てられた辺境に、封印の洞窟と呼ばれる場所があり、その奥深くに隠されているという。
まっとうに考えるならば、最後のクリスタルを死守するため、封印の洞窟へ向かうべきなのだろう。だが、あえてそうしなかったのは、
「ゴルベーザが封印の洞窟に向かったのは明らか。しかし、案ずることはない。かの地には、その名のとおり強固な封印が施されておる。それを解かぬ限りは、いかにゴルベーザとはいえ〝闇のクリスタル〟を手にすることはできぬであろう」
ジオット王が自信たっぷりに言い放ったからだった。
とはいえ、ここで待っているだけでは事態が好転するわけもない。
「この城のクリスタルが奪われたのは、ぼくたちに責任があります」セシルはドワーフの王の前へ進み出る。「何か力になれることはないでしょうか」
ジオット王は、しばらく思案したあとで口を開いた。
「奴の目が封印の洞窟へ向けられている今こそ、好機かもしれぬな」
「――と言いますと？」

「バブイルの塔へと潜入し、七つのクリスタルを奪還してもらいたいのだ」

ジオットの大胆な提案に、一行は言葉を失った。

ややあってから、ようやくカインが言った。「確かにバブイルの塔は大地を貫き、ここ地底世界にもつづいている。しかし、あそこは――」

ヤンがそのあとをつづけた。「敵の本拠地ではござらぬか」

「いかにも」とドワーフの王は頷いた。「何、心配はいらぬぞ。我ら戦車隊が、奴らの軍勢を引きつける。その隙にそなたらがクリスタルを奪還するだけだ」

セシルは、仲間たちを振り返った。「――どうする?」

「クリスタルを奪還するだけだ、とは……簡単に言ってくれる」とカイン。

リディアがそれに頷く。「敵の本拠地へ潜入するなんて」

「確かに危険ね。でも――」

ローザのあとをヤンが引き継いだ。「ゴルベーザからクリスタルを奪い返さねば、この状況を変えられぬか」

カインが大きく息を吐いた。「シドが戻らぬ限り、溶岩の海を渡る術はない。つまり封印の洞窟へ向かうことができない今、俺たちにできるのは――」

「バブイルの塔へ行くしかないわけか」

言ってから、セシルは四人の仲間たちの顔をゆっくりと見まわす。

彼らがつぎつぎと頷くのを見てから、ジオットへと向き直った。
「わかりました。やってみましょう」
こうして一行は、ドワーフ城をあとにし、バブイルの塔へと旅立ったのである。

＊

左右を溶岩の海に挟まれた細い陸地を、北西へと向かう。
やがて赤く染まる彼方の闇に、巨大な塔の威容が浮かび上がった。
そして靴底をとおして感じられる、かすかな地響き。
先行していたドワーフの戦車隊が見えてきた。砲塔を高く掲げ、轟音とともに弾を射出。ふた呼吸ほどののちに着弾し、塔の外壁を浅く削り取る。
塔を破壊するほどの破壊力はないものの、この派手な攻撃で敵の目を引きつけていれば、確かに容易く内部へ潜入することはできそうだった。
戦車隊を陣頭指揮しているドワーフが、一行に気づき、やって来た。
「あなたは――」
リディアは、目を丸くして相手を見つめた。
小柄なドワーフの中にあっても、さらにいくばかりか背が低い。体も細い部類に入るのだろ

う。浅黒い肌には、つやと張りがあり、赤みを帯びた髪を無造作にうしろで束ねている。年のころ、八つか九つといったところか。まだ少女とも呼べる歳のドワーフだった。

「あたしはルカ。よろしくね」

リディアは差し出された手を握り返し、「リディアよ」と名乗った。

ルカに仲間を紹介したあとで、リディアは彼女とともに眼前にそびえ立つバブイルの塔を見上げる。「――ここに七つのクリスタルがあるのね」

「うん、そうみたい」言ったあとで、ルカはかたわらのリディアへ視線を転じた。「ごめんね、こんな役まわりを押しつけちゃって」

「ううん、気にしないで。これは私たちの闘いでもあるから」

「そうかもしれないけど」そこでルカはため息をついた。「客人をもてなすのがドワーフの礼儀だ、なーんて日ごろから言ってるくせにね……。まあ、父上もそれほどまでに危機感を抱いているってことなのかなぁ」

「父上？　まさか、あなたはジオット王の――」再びリディアは目を丸くする。

「そうだけど、それがどうかしたの？」

「お姫様が、陣頭指揮を執っているなんて思わなかったから。でも、どうして――」

ルカは、それには答えず、再びバブイルの塔を見やる。

「許されるなら、あたしもゴルベーザと闘いたい」

「地底世界のために？」
「それもあるけど、あいつはあたしの人形たちにひどいことをしたから」
言われて、リディアは気づいた。ドワーフ城で襲いかかってきた六体の人形は、きっとルカが大切にしていたものだったのだろう。そう思うと心が痛んだ。
だからリディアは、「私たちに任せて」ルカの手を強く握った。「必ず、あなたのお友達の仇を討つから。——約束する」
ルカの驚いたような表情が、微笑みに変わった。「ありがとう」
そこへセシルの声がかかった。「リディア、そろそろ出発しよう」
「行ってくるね」
そう言い残して、リディアは仲間たちのもとへと向かう。
背後でルカの声がした。「必ず帰ってきて」
振り返ると、ドワーフの少女が手を振っている。
「——ルカ」
「リディアとは、いい友達になれそうな気がする。だから——」
「大丈夫よ。心配しないで」不安そうなルカにリディアは微笑を返した。

## 6

戦車隊による陽動作戦が功を奏し、一行は塔への潜入に成功した。

そこでヤンが違和感を覚えたのは、内部の構造を目の当たりにしたからだった。太古の昔から存在するバブイルの塔が、なぜこのような機械仕掛けなのか。

ふと、ゴルベーザの言葉が思い出される。

八つのクリスタルは、月へとつづく道を指し示すための道標。

月には人知を超えた力が眠るという――。

こうして塔の内部を眺めていると、ゴルベーザの言っていることは真実なのだと、ヤンは改めて思った。そして、奴がその眠れる力を手にしたときに、どれほど恐ろしいことになるのかも想像できるような気がした。

ゴルベーザを止めなくてはならない。

そのためには、この塔のどこかにある七つのクリスタルを取り戻す必要がある。

先頭を行くのはセシル。そのあとにカインがつづき、三番手のヤンは、自分の背後のローザとリディアを守るようにして歩を進めていた。

「――ヤンは、いつも私を守ってくれる」

ふいにリディアが言った。

いつの間にか隣へやってきていた彼女をちらりと見たあとで、ヤンはすぐに前方へと視線を戻した。「そうだったか」

「私は幻界で暮らしていたから、もう十年以上も昔のことになる。でも、片時も忘れたことはなかったわ。荒れ狂う海に投げ出された私を助けようと、真っ先に飛びこんでくれた」

「仲間を助けるのは、当然のことだ」

「ヤンにとっては、当たり前のことなのかもしれないけど、それがとてもうれしかった。私も誰かのために自分の命を投げ出すことのできる勇気がほしかった」

「それで、幻界での修行を決意したわけか」

「ええ」

リディアに微笑みかけられ、ヤンは困ったように頭をかいた。

「幻獣のみんなも、ヤンに感謝していたわ」

「――ほう。幻獣が私に？」

「幻獣王様や王妃様、それに――特にシルフたちが」

「シルフが――なぜ？」

「きっと勇敢な人が好きなのね」

「静かに」

セシルの小さい、しかし鋭い声が飛んだ。

ヤンはそれに瞬時に反応。無意識のうちにリディアを庇うようにして腰を浅く落とす。
前方にふたつの人影があった。
一行は物陰に身を隠すと、息を潜めてその様子を窺う。
ひとりは腰の曲がった老人。「ルビカンテ様、どうかお気をつけて」
その老人の前。光り輝く床の上に、真紅の外套で全身を覆った男が立っていた。ルビカンテと呼ばれたその男は、「案ずるな。忍術とやらを使うエブラーナの城は、すでに落ちた。もはや、このバブイルの塔の起動を阻止しようと画策する者はおらぬ」
老人がうやうやしく頭を垂れる。
と——ルビカンテの姿が眩い光に包まれる。
「留守は預けたぞ」その言葉を残し、姿を消した。
床から発せられていた光は消え失せ、周囲に薄い闇が戻ってきた。
老人は、顔を上げると突然、大きな声で嗤いはじめる。
「ゴルベーザ様も、そしてルビカンテも、これでいなくなった。そう、このルゲイエこそが、バブイルの塔の最高責任者となったのだ」うれしくてたまらないといった様子で、くるくるとまわる。踊っているつもりなのだろう。
「変なお爺さん……」
リディアが、ぼそりと呟いた。

しかし、それがルゲイエを名乗る老人の耳に届いてしまったようだった。
「そこにおるのは誰だ！」
見つかってしまっては仕方がない。
一行は物陰から出て、老人の前に立つ。
「貴様ら……エブラーナの残党か」ルゲイエのしわだらけの顔が歪んだ。「違う。貴様はセシルか！　いったい、いつの間に――」
カインが、一歩前に出た。手にしていた槍の切っ先を、老人に向ける。「お前が、ここの最高責任者だそうだな。ならば訊こう。クリスタルは、どこにある」
「答えるとでも思っておるのか」
「ならば答えたくなるようにするまでだ」
「忠告してやろう。――爺だと思って、わしを甘くみぬほうがよいぞ」
ルゲイエの顔に、ぞっとする笑みが浮いた。「なぜ、このような年寄りが、バブイルの塔の管理を任されておるのか。それは、わしがゴルベーザ様の有能な頭脳だからだ。どれ、貴様らも、わしの研究材料としてやろう」
言い放つと、老人は大きく体を震わせた。
いかなる力が作用しているのか、その骨格が変化してゆく。
足が伸び、体が縮み、肩がはずれたように腕がだらりと垂れ下がる。筋肉が引きちぎられて、

皮膚が裂け、内部から金属と思しき質感が現れる。やがて、その姿は二足歩行する機械兵器となった。両肩から突き出した銃口が、セシルに狙いを定めている。
「本物の恐怖というものを、貴様らに見せてやる」剥き出しになった眼球が、獲物を求めてせわしなく動く。「——存分にな!」
その言葉に一切の誇張はなかった。
ルゲイエの分厚い装甲に、あらゆる攻撃が効果をなさない。
セシルの剣は弾かれ、カインの槍は跳ねのけられ、ヤンの拳が血に染まる。
さらにまき散らされる炎、そして肩口の銃口から発せられた光の束が、五人の人間たちの生命力をじわじわと奪い去ってゆく。
一方的に蹂躙されるセシルたち。
それでも彼らの心が折れるようなことはなかった。自分たちの肩に、人間だけでなく、ドワーフたちの未来もかかっていることを自覚している。
たとえ渾身の一撃が、相手にかすり傷程度の痛手でしかないとしても、それは決して無意味なことだとは思わなかった。蓄積された傷が、やがて大きな損傷となることを信じ、一行は祈るような気持ちを胸にひたすら闘うだけだった。
やがて、探し求めていた勝利への糸口が見つかる。
相手の消耗を肌で感じ取ったヤンは、みずからを鼓舞するかのように吠えた。

それが味方の士気を上げ、劣勢だった戦況を引っくり返す。
勝利の二文字が視界をちらつきはじめたときだった。
ルゲイエの口から霧が噴出された。
それを全身に浴びた一行に、奇妙な現象が起こる。
味方の傷を癒すはずのローザの〝療光（ケアルラ）〟が、殺意を伴ってセシルらに襲いかかった。疲弊した体を鉛のように重くし、裂けた肌を鋭くえぐる。
痛みに歪む顔。セシルとカイン、そしてヤンの動きが鈍っていった。
「どうして――」狼狽するローザ。
セシルの一撃が、ルゲイエに打ちこまれる。
しかし機械兵器は喜悦の笑みを浮かべるばかり。
その光景に、ヤンは違和感を覚えた。
――何かがおかしい。
先刻、あの霧を浴びてからというもの、自然の法則を捻じ曲げたかのように奇妙なことばかりが起こる。ローザの〝療光（ケアルラ）〟は傷を悪化させ、またセシルの一撃はルゲイエから奪い去ったはずの生命力を回復していた。
そこでヤンは気づいた。これは――罠なのかもしれない、と。
考えてみれば、あの霧による攻撃以来、ルゲイエはただ立ち尽くしているだけだ。我らの動

きを見れば、とどめを刺すのは今だと考えるはず。それなのに、奴は何もしようとしてこない。まるでこちらの攻撃を待っているかのように……。

確かめなくてはなるまい。

ヤンは背後の召喚士を振り返ると、

「私に〝炎撃(ファイア)〟を」と叫んだ。

リディアが驚いたのも無理のない話だった。この状況下で、自分を攻撃してくれと言われれば、誰でも彼女のような反応を示すだろう。乱心したと思われたのかもしれない。

ヤンは真っ直ぐな視線でリディアを見つめることで、その誤解を解いた。

リディアの現出させた火球が、ヤンを直撃する。

しかしそこに焼けつくような炎の熱さはなかった。代わりに傷ついた体が癒されてゆく。

リディアが目を丸くした。「どうして――」

「彼奴の霧の仕業だ！」

ヤンの言葉ですべてを理解したのか、セシルとローザが同時に呪文の詠唱を開始。ふたりの〝療光(ケアルラ)〟は仲間にではなく、ルゲイエに向けられたものだった。

癒しの光を浴びたルゲイエが、苦悶の声を発する。

それでヤンは確信した。どのような仕組みなのかはわからなかったが、あの霧には損傷と回復の効果を逆転させせる力があるのだ。

――ならば、それを利用しない手はない。
ヤンは、懐から小瓶に入った水薬を取り出した。
疲弊した生命力と枯渇した精神力を潤す〝霊薬(エリクサー)〟である。
それを恐怖におののくルゲイエへと投げつけた。
小瓶が割れ、霊力に満ちた液体が鋼の体躯を濡らす。
「クリスタルを探していると言っておったな。だが、ひと足遅かったようだな」崩れゆく己の肉体を見つめたあとで、突然ルゲイエが嗤いはじめた。「このバブイルの塔は大地を貫き、地上と地底を結んでおる。七つのクリスタルは、すでにルビカンテが地上へ移したのだ」
「何――」
「残るひとつも、時間の問題であろう。おお、そろそろ時間だな。ドワーフどもの城は、わしの造った巨大砲で瓦礫の山と化す。この地底世界でゴルベーザ様に歯向かう者はいなくなるのだ。そして、ついに月への道が開かれる――！」そしてルゲイエは絶命した。

＊

ルカが、ドワーフのみんなが――。
リディアは、溢れてくる涙を拭うことなく、走りつづける。

ルゲイエの言葉が真実ならば、もう時間はほとんど残されていないことになる。
それでも一行は、わずかな望みを捨てようとしなかった。
だから走る。走りつづける。
——と。
どこからか聞こえてくる電子音。
先頭を行くセシルが足を止めた。見る者を威圧するかのような巨大な——門と呼ぶのが適切であろう扉が、一行の前に現れた。
「ここだ」と誰かが呟いた。
リディアは、その言葉に頷く。根拠などない。ただ己の本能を信じるだけだった。
ヤンが跳躍した。強烈な足技を受け、扉がゆっくりと開いてゆく。
電子音が大きくなる。
殺風景な通路とは異なり、内部には様々な機器が立ち並んでいた。それを操作していた三体の魔物が、一行の存在に気づいたのか振り返る。
カインは、室内を見まわした。「巨大砲とやらの制御室のようだな」
図星だったのか、魔物が剣を手に取る。「貴様ら、どうしてここに——」
「ルゲイエは、もういない」
セシルは、魔物を威圧するかのように進み出た。「ドワーフ城への攻撃を中止しろ」

しかし魔物はその言葉に耳を貸そうとしなかった。
奇声を上げ、侵入者へと襲いかかる。
セシルとカインは容赦しなかった。瞬きする間もなく、魔物たちを斬り捨てた。
そのうちの一体が、よろけながらも立ち上がり、制御盤に剣を振り下ろす。
「これで巨大砲は止められぬ」言い残し、その場に崩れ落ちた。
制御盤から火花と黒煙が上がりはじめる。
「しまった。何ということを――」セシルは言葉を失った。
一行は制御盤へと駆け寄る。が、どうすればいいのか見当もつかない。
照準がドワーフたちの城へ固定されていることだけはわかった。
「ドワーフのみんなが……」リディアは己の無力を嘆き、涙を流す。
「くそ。どうにかならんのか」とカインが手にしていた槍を床に叩きつけた。
しばらくの沈黙のあと、
「爆破するしかなさそうだな」とヤンが顔を伏せ、呟いた。
四人の視線が、ヤンに集中する。
弁髪の男は、顔を上げると「それ以外に、ドワーフたちを救う術はない」断言した。
「しかし、どうやって――」セシルは、最後まで言うことができなかった。
「――ごめん」

ヤンが雷光の疾さで、仲間たちへつぎつぎと蹴りを放つ。
四人は、それに反応できず、体をくの字に折り、制御室の外へと吹き飛ばされた。
真っ先にセシルが立ち上がり、ヤンのもとへ走る。
その鼻先で扉が閉じられた。
「——開けろ！　ヤン、ここを開けるんだ」カインが叫ぶ。
ヤンが鍵をかけてしまったようだった。扉は、びくとも動かない。
「妻に伝えてくれ。私の分も生きろと」
扉の向こうから声がした。「——楽しい旅であった」
つぎの瞬間。
凄まじい轟音が扉を、大気を、そして四人の体を震わせた。
電子音は聞こえなくなっていた。
「ヤン、どうして——」リディアはその場に泣き崩れた。

7

バブイルの塔は大地を貫き、地上と地底とを結ぶようにして建造されていた。
だが、どうやら地上部と地底部は分断されており、何らかの特殊な手段を使わぬ限り、双方

を行き来することはできないようだった。

一行は、これ以上の探索はあきらめ、ドワーフ城へ帰還することにした。

その道中。

塔内部の無機質な通路を、重い足取りで歩く。誰もが無言だった。

――なぜ、みずから死を選んだのだ。

カインには、ヤンの行ないが理解できなかった。

ドワーフたちを救うために？

俺たちが彼らと出会ってから、どれだけの時間が経った。

どれほどの言葉を交わし、心を通い合わせたというのだ。

義理や友情は、確かに存在したかもしれない。

しかし、それは命を懸けるほどのものだったのだろうか。

しかもヤンには、妻がいたという。我が子を身ごもった最愛の妻が――。

彼女を残して、どうして死を選ぶ必要がある。

今という瞬間のために未来を捨てるなど、何と愚かな行為であろう。

カインの意識は、ヤンを完全に否定していた。

だが、無意識は違う。

彼を尊敬し、その英雄的な生き様を羨んでいた。

やりきれない思いを必死で鎮めようと、カインは拳を強く握りしめる。心を塗り潰しているのは、ゴルベーザへの怒り。体中を流れる血が、ぐつぐつと沸騰している。
そのときだった。
カインの抱く憎悪の感情に呼応するかのように、どこからか鉛の声が響き渡る。
「小賢しい真似をしてくれたようだな」
「ゴルベーザ！」カインが吠えた。
しかし鉛の声に感情の起伏は感じられない。
ただ、ひと言——「さらばだ」
つぎの瞬間、塔が激しく揺れる。床が崩れはじめた。
「きゃあぁぁぁぁぁっ！」リディアの悲鳴。
足場を失った一行は、足下に広がる闇へ吸いこまれるようにして落ちてゆく。
頭上の光が急激に小さくなる。
死を覚悟した瞬間、背中に衝撃を感じ、落下が止まった。
暗闇の中から、懐かしい声が聞こえた。
「危ないところじゃったな」
「——シド！」ローザが声を上げた。
一行を受け止めたのは、シドが操船するエンタープライズ号の甲板だった。

しばらく闇の中を航行していたが、やがて前方に小さな赤い光が見えてくる。
「つかまっとれ。飛ばすぞ」
シドが言った直後に、エンタープライズ号が加速した。
闇を背後に置き去りにし、塔から脱出。同時に甲板に熱気が溢れた。
「シド、どうして――」とセシル。
「地底世界へ戻ってきてみれば、すでにお前たちは塔へ潜入したあとじゃった。まったく、このわしを置いてゆくとはな……」シドは軽やかに舵輪を操りながら、笑った。「そこで、仕方なく塔の周囲を調査しておったところ、地下へつづく怪しげな穴を発見した」
「それが、ぼくたちの落ちた――」
「うむ。どうやら《赤き翼》の格納庫のようじゃった。飛空艇をすべて取り戻せば、ゴルベーザの戦力も機動力もがた落ちになるじゃろう？　それで策を練っていたところに、お前さんたちが上から落っこちてきこったというわけじゃ」
「ありがとう、シド。助かったわ」とローザ。
「――ところで、ヤンが見当たらぬようだが」
甲板に沈黙が流れた。エンタープライズ号のエンジン音だけが大気を震わせている。
口を開いたのは、セシルだった。「巨大砲を破壊するために、自分の身を犠牲して」言いたくないことを言わねばならないときの口調である。

「ドワーフのみんなを守るために――」リディアが涙ぐんだ。
その召喚士に気づいたシドは、「そこのお嬢ちゃんは？」
「リディアだ、ミストの生き残りの――」
セシルの言葉をシドが遮った。「追ってきおったか」
背後へと視線を転じた一行が目にしたのは、一艇の《赤き翼》。
両者の距離が、急激に縮まってゆく。
《赤き翼》の船首が光った。その直後、エンタープライズ号の甲板が激しく揺れる。
「撃ち落そうというのか」とカインは奥歯を噛んだ。
セシルが舵輪を握るシドに駆け寄る。「振り切れないか」
「うーむ。こちらのほうが性能が上のはずなんじゃがな。恐らく奴らも、《赤き翼》を改造しおったんじゃろう」
エンタープライズ号は、ドワーフ城の尖塔をかすめ、飛行をつづける。
「ドワーフたちのところへ逃げこむわけにはゆかん……」
「追いつかれちゃうわ」リディアの声が飛ぶ。
「残念じゃが、地底での闘いは向こうに分がある。ここは一度、地上へ戻り、態勢を整えるのが懸命じゃろうな」
しかし《赤き翼》との距離は、さらに縮まる。

「エンジンが持たぬか。セシル、舵を頼む」
舵輪を聖騎士に譲ったシドは、甲板中央の船室へ姿を消す。
戻ってきた老技師は、ひと抱えもある見慣れぬ物体を手にしていた。
「エンタープライズが地上へ出たところで、この爆弾を使い、穴を塞ぐ」
カインは眉根を寄せた。「爆弾を――？」
「こんなもんは……できれば使いたくないんじゃがな。こうでもしないことには、《赤き翼》を振り切れそうにもないからのう」
言ってからシドは、ひとり船尾へと向かう。
そんな彼のもとへローザが駆け寄る。「シド、まさか、あなた――」
「お前とセシルの子の顔が見たかったが……」シドは一行に背を向けたままで言った。「これも運命というやつじゃろう。ヤンが寂しがるといかんしな」
「――お爺ちゃん！」
悲鳴にも似たリディアの叫びに、シドが振り返った。
「こら。せめて、おじちゃんと呼ばんかい」
にやりと笑った。が、すぐに真顔に戻る。
地上へと抜ける大穴が見えてきた。
視界が闇に染まった。そう思った瞬間に、目の前が光に満たされる。

「飛空艇技師シド、一世一代の見せ場じゃあ！」
シドの姿が甲板から消えていた。
「――シド！」カインが叫ぶ。
瞬きするほどの短い間のあと、轟音が響き渡った。

*

噴煙を上げるアガルト鉱山があった。
セシル、ローザ、そしてリディアは、右舷からその光景を見下ろしている。
カインだけが三人から離れたところに立ち尽くしていた。
竜を模した兜の面頬を下げ、泣いた。
幼いころに父親を亡くしたカインは、同じように孤児だったセシルとともにバロン王に引き取られ、育てられた。様々な試練に耐え、修練を積み、ふたりは栄達を重ねて今の地位を築いた。その陰には、いつもシドの姿があった。
あるときは父親のように厳しく、またあるときは祖父のようにやさしく、ときには古くからの友人のように接してくれたシド。その明るい人柄と思いやりに満ちた言葉に救われたことは、一度や二度ではない。だが、そのシドは、もういない。

「どいつも、死に急ぎやがって！」
カインは吐き捨てるように叫んだが、それは同時に自分を置いていかないでほしいとの懇願でもあった。俺を、ひとりにしないでくれ。
ゴルベーザへの憎しみは、依然として心に焼きついている。
しかし——
それとは異なる感情が、少しずつ大きくなってきているのをカインは実感していた。
恐怖。
ゴルベーザを恐れる気持ちが、憎悪を呑みこみ、肉体と精神を支配しはじめていた。
仲間たちが——自分を知る者たちが、つぎつぎと命を落としてゆく。
——つぎは誰だ？
リディアか？　セシルか？　それともローザ？
やがて俺を知る者は、誰ひとりとしていなくなるのかもしれない。
他者とのつながりが一切断たれた世界で、俺は何のために生きる？　笑顔を忘れ、言葉を発することもなく、孤独に打ちひしがれ、涙に溺れ、死んでゆく。
それが心底、恐ろしい。
ゴルベーザを倒さねば、その想像は現実のものとなろう。
しかしそのために、これから先、どれほどの犠牲を払うことになるのか。

想像するほどに怖くなってゆく。
俺はいったい、どうしたらいいのだろう。だが、シドはもう何も答えてくれない。

8

見慣れた室内、まくし立てる母親の声を聞き流し、お気に入りの椅子に腰掛けている。
それは、ローザにとってのありふれた日常。
しかし、ようやくそこへ戻ってこられたというのに、心が鉛のように重い。
地底世界を脱出しバロン城へ帰還したローザは、セシルたちに何も告げることなく、バロンの城下町にある自分の生家へ戻ってきていた。
母親は、久しぶりに帰ってきた娘の顔を見るや泣き出し、それが収まってからようやく彼女を家の中へ入れると、今度は延々と説教をはじめたのだった。
娘が自分の話を聞いていないことに気づいたのだろう、
「もう二度と、どこにも行かないでおくれよ」
ローザの顔を覗きこむようにして懇願した。
それにローザは応えず、ただ顔を伏せた。
「やっぱり、お前を白魔道士なんかにするべきじゃなかった」

母親が、再び泣きはじめた。
ローザは、小さくため息をついた。
――お母さんは、何もわかってくれていない。
もしも私が白魔道士でなかったら、こうやって生きて戻ってくることはできなかったかもしれないのに。きっと、この世界で何が起こっているのかも知らないのだろう。
「お前も、そろそろどこかへ嫁いでもいいんじゃないかい」泣き止んだ母が唐突に言った。
ローザは、弾かれたように顔を上げた。「お母さん――」
「私は、カインがいいと思うんだけど……」
「――やめて」ローザは立ち上がった。
「やはりセシルがいいのかい？」
「――――」
答えない娘に、母親は小さく首を振った。「わかってるよ。お前がセシルを好いていることぐらい。でも、セシルは《赤き翼》の任を解かれたって噂じゃないか」
「私を厄介払いしたいの？　白魔道士を辞めさせたいだけなの？　それとも単にファレル家の血筋が絶えてしまうことだけが心配なの？」
「そんな……私はただ、お前に幸せになってほしいだけで」
叱られた子供のように小さくなる母親を見て、ローザは罪悪感を覚えた。「ごめんなさい、

お母さん」それから自分を産み、育ててくれた女性に微笑みかけた。「でも大丈夫よ。私は、自分の手で幸せをつかみ取るから」
おずおずと顔を上げた母親だが、口を開こうとはしなかった。
「お母さんだって、昔は白魔道士だったんでしょう。それで騎士のお父さんと出会い、結ばれて、幸せになった。私も、きっとそうなるわ。だってお母さんの子供だもの」
「ローザ……」
「私、白魔道士になって本当によかったわ」
言ってから、ローザは母親に背を向けた。
その言葉に含まれた半分の嘘を隠そうとするかのように。
そして、溢れてくる涙を見せまいとして。
戸口へと歩くローザに、慌てたように母親が声をかけた。「どこへ行くんだい」
「行かなくてはならないの」
引きとめようとする母親を振り切り、あてもなく歩きつづけた。
町は活気を取り戻しつつある。行き交う人々の顔には笑顔が浮かんでいた。しかしローザは知っている、その平穏が虚飾に過ぎないことを。彼らは闇の台頭に感づきながらも、素知らぬ振りをし、幸せな自分を演じているだけなのだ。
ローザはそれを理解しながらも、そんな彼らを羨ましく思った。

——白魔道士を志すことがなければ、私も彼らと同じように生きられたのだろう。
気がつくと、町の北西にある高台の前で足を止めていた。
その上には、シドの家が建っていた。
老技師の帰りを待つ娘が住んでいる。
シドの死を、彼女に伝えなくてはならない。
それは、幼いころから可愛がってもらった自分の役目だと思っている。
とはいえ、やはり気が重い。
まるで金縛りに遭ってしまったかのように、つぎの一歩が踏み出せない。
白魔道士は傷を癒す、言うなれば生を支える存在。高位の魔法を修得すれば、死の一歩手前にある魂さえも呼び戻すことができる。それなのに今の私は、白魔法にも限界があることを、万能ではないことを告げにゆかねばならない。
肉親の死を知った彼女の、泣き崩れる姿が目に浮かぶようだった。
そして自分には、何もしてあげられることはない。
——できない。
そんな残酷なことは、自分にはできない。現実から逃げていると後ろ指を差されても構わなかった。溢れる涙を拭おうともせず、ローザは城へ走った。
無性にセシルに会いたかった。

＊

寝台に腰掛けて泣きじゃくるローザを、セシルは見つめていた。
バロン城の左の塔、最上階にあるセシルの私室。
突然、ローザが部屋へ駆けこんで来て、何も言わずに泣きはじめたのだ。
それでもセシルは、彼女にその理由を訊こうとはしなかった。
ただやさしく見つめ、ローザが落ち着くのを待ちつづけた。
しばらくしてから、ようやくローザが顔を上げた。泣き腫らした目が赤い。
「――シドのことかい？」
セシルの問いに、ローザが頷く。「亡くなったのを知らせることができなかった」
「すまない。本当ならばバロンへ戻ってから、ぼくが真っ先にしなくてはならないことだったのに」セシルは、頭を下げた。「何を言っても言い訳になってしまうだろう。でも気が動転していて、何から手をつけたらいいのかわからない状態なんだ」
「セシル――」
「それだけじゃない。ファブールにヤンが亡くなったことも伝えなければ」
「そうね」とローザが呟いた。
ふたりは、言葉を忘れてしまったかのように沈黙した。

その静寂を破ったのは、
「もう一度、バブイルの塔へ行きましょう」という女性の声だった。
「リディア——」
彼女は、ふたりの前までやってくると、「せめてシドとヤンの亡くなった場所で手を合わせ、遺品のひとつでも発見してから家族に報告したいの」と言った。
セシルとローザは、それに頷く。
が、その表情には影が落ちたままだった。「ぼくも、できればそうしたいと思っている。しかし、地底世界へとつづく穴は崩れ、塞がってしまっている」
——と。
「道はある」今度は、男の声がした。
「カイン！」部屋へ入ってくる竜騎士の姿を認め、セシルは叫んだ。
「ルゲイエの言葉を覚えているだろう。バブイルの塔は、地上と地下を貫くようにして造られている。必ず、どこかに入り口はあるはずだ」
「そうね」とローザ。「私たちがアガルト鉱山の山頂から地底世界へ入ったときには、すでにゴルベーザは、ふたつの〝闇のクリスタル〟を手に入れていたはずよ」
そのとおりだ、とセシルは思った。
ここで失意に暮れ、時間を浪費しているだけでは何の解決にもならない。

——考えるよりも、まず動け！
それは、子供のころからシドに何度も言われてきた言葉だった。
まず、バブイルの塔へと侵入し、地底世界を目指す。
そこから先のことを、今から思い悩んだところでどうなるというのだ。
ふと、真紅の外套を身にまとった男がルゲイエに言っていた言葉が思い出される。
——忍術とやらを使うエブラーナの城は、すでに落ちた。もはや、このバブイルの塔の起動を阻止しようと画策する者はおらぬ。
「エブラーナか」セシルの目に光が戻る。
バブイルの塔が地上に突き出しているのは、エブラーナ領。
そこへ向かえば、道が開かれるとの確信があった。

9

エブラーナ城は、廃墟と化していた。
人間はもちろんのこと、魔物の気配さえも感じられない。
ときおり吹く風が、調子はずれの笛の音のように寂しげに聞こえてくるだけだった。
——忍術とやらを使うエブラーナの城は、すでに落ちた。もはや、このバブイルの塔の起動

を阻止しようと画策する者はおらぬ。
ルビカンテのその言葉は真実だった。
リディアは、エブラーナの民と会ったことは一度もなかったが、悲しみに胸が張り裂けそうだった。そう、闘っていたのは、私たちだけじゃなかった。この城で暮らしていた彼らも、自分たちの故郷を、そして世界を守るために命を懸けていたのだ。
これ以上の捜索は無意味と判断した一行は、城をあとにする。
北を見やると、不気味に輝くバブイルの塔の威容が目に飛びこんで来た。
リディアたちは、エブラーナ城を訪れる前に、一度、塔への侵入を試みている。しかしその周囲は切り立った山々に囲まれており、近づくことさえもできずにいた。
「打つ手なしか」とカインが呟いた。
リディアは反論しようと口を開いたが、言葉が出てこなかった。
そんな自分が悔しくて、奥歯を強く噛む。
「いや、まだあきらめるわけにはいかない」とセシルが言った。
彼が見つめているのは、西の海岸線。
バブイルの塔を取り巻く険しい山脈は、そこで終わりを告げている。
「――エブラーナの生き残りか」カインが言った。
「どういうこと?」リディアには、その意味が理解できなかった。

「煮炊きの匂いが、かすかに風に混じっているんだ」セシルは歩きはじめた。
一行も、そのあとを追う。
あの山のどこかに、エブラーナの人たちが隠れ住んでいる――。
相変わらずリディアは、セシルたちの言う匂いを嗅ぐことができなかったが、それでも疑うようなことはなかった。廃墟と化したエブラーナ城には、ただのひとつも遺体は存在しなかった。連れ去られたわけでないのなら、どこかへ避難したと考えるべきだろう。
「エブラーナとバロンは、国交がなかったの」リディアの横にローザがやってきた。「こんなに遠くて、しかも海に隔てられた孤島にあるから仕方ないことかもしれないけど」
「それじゃ、エブラーナのことは何も――?」
「そうね。忍術と呼ばれる、不思議な技を使う一族だということぐらいかしら。魔法とは違った理論で、大自然の力を利用すると聞いたことがあるわ」
「そんな人たちでも――」
リディアは、そこで言葉を切った。
歯が立たなかった、という言葉を呑みこむ。それを口にしたら、自分たち四人では、ゴルベーザに太刀打ちできないことを認めてしまうと思えたからだ。
セシルが立ち止まった。
岩山に穿たれた穴があった。ゆうに大人が通れるほどの大きさである。

そこでようやくリディアにも煮炊きの匂いを嗅ぐことができた。どこか懐かしい気分になってくる。ふと亡くなった母親の顔を思い出し、目の奥が熱くなった。
セシルを先頭に、薄闇に支配された洞窟の中を進んでゆく。
「妙だな」言ったのはカインだった。
「ああ」とセシルがそれに同意する。「人の気配が感じられない」
リディアの心に渦巻く不安は、一歩進むごとに強くなる。
そのときだった。
セシルとカインが同時に足を止める。
小さな影が、ふたりの前に生じていた。その影の手に握られているのは刃。切っ先がセシルの喉元に突きつけられていた。
「君は――」
言いかけたセシルの言葉を、影が遮る。「ここを、どこだと心得る」
リディアは自分の目を疑った。
影の正体は、黒装束に身を包んだ少女だったのだ。
年のころ、九つか十といったところだろう。だが過酷な修行の影響なのか、その顔に幼さはない。凄みとともに、凛とした美しさを備えていた。
「エブラーナの民の協力を仰ぎたい」とセシル。

「本当なのよ」
ローザが少女の誤解を解こうと一歩、踏み出しかけたが、
「――動くな」
少女の鋭い声に気圧されたかのように足を止めた。
「ぼくたちは、バブイルの塔への道を探しているんだ」
セシルを見上げる少女の目が、鋭さを増した。「その言葉に偽りはないのだろう。しかし、それでもここを通すわけにはゆかぬ」
「どうして――」
「お前たちが敵の手に落ちたときに、この場所を漏らさないとも限らない」
カインの周囲に殺気が満ちた。「俺たちが、エブラーナを売るとでも言うのか」
「あり得ない話ではないだろう」
「ふざけやがって――」カインが手にしていた槍を握り直す。
「動くなと言ったはずだ」
「子供にできるか」
カインと少女の視線が、火花を散らす。
――と。
「何事だ」闇の奥から男の声がした。

その瞬間、少女はセシルの喉元から短剣を引き、後方へと跳躍した。
少女のかたわらに現れたのは、ひとりの老人だった。
「侵入者です」
「——ほう」言って老人は、セシルを値踏みするときの目で見つめた。
「ぼくたちは、何としてもバブイルの塔の内部へ潜入したいのです。そのための力添えをいただきたいと思い、ここへやってきました」
「バブイルの塔へ？　いったい、何のために」
「仲間を助け、クリスタルを取り戻すためです」
「つまり——」老人が目を細めた。「そなたがバロンのセシル殿というわけですな」
「なぜ、それを」
老人は笑った。「我らエブラーナは、各地に密偵を放っておりますゆえ」そこで少女に視線を転じた。「お前は下がっていなさい」
少女は何かを言いかけたが、小さく頭を下げると、現れたときと同様に音もなく気配を消し、闇の中へと溶けてしまった。
「案内いたしましょう」老人が一行に背を向けて歩きはじめた。

# 10

洞窟の内部は、進むに従って広くなっていった。目が慣れてくると、そこにいくつもの人影があることに気づく。誰もがセシルらに好奇の目を向けてくる。
「ずいぶんと修練を積まれた方々だとお見受けします」
セシルは、闇の中でうずくまる人々の力量を感じ取り、そのまま正直に口にした。
「ほう、わかりますか」
「ええ。先ほどの少女も――」
「あやつは、まだまだですな」老人は鼻で笑った。
「そんな……バロンでも、あれほどの腕を持った子供は――」
「しかし、そんな我らもルビカンテの軍勢に敗れ、この有り様。所詮は、修行が足りなかったということでありましょうな」
「そんな――」
「とはいえ、あきらめたわけではありませんぞ。王と王妃の仇を討つべく、若様の指揮のもと、この洞窟をバブイルの塔へと掘り進めている最中ですからな」
「――若様?」
「エブラーナの王子、エドワード様――みなにはエッジ様と呼ばれております」

「会わせてもらえないでしょうか」
「もちろん、そのつもりでおります。しかし──」
老人はセシルらを振り返り、心底困ったような表情を浮かべた。「まさか、まだおひとりで掘削の作業をつづけておいでなのかもしれませんな」
「ぼくたちで捜してみることにします」
「そう言っていただけると助かりますな。多くの民は、まだルビカンテの軍勢との戦で負った傷が癒えておりませぬ。わしらが見ていてやらねばならんのです」
老人は、セシルらに頭を下げると、去っていった。
その背中が闇の中へと消えてから
「では、その王子様とやらを捜しに行くか」とカインが言った。
一行は深部を目指し、さらに進んでゆく。
洞窟の様相が変わりはじめた。
これまでの自然によって作り出された岩壁ではなく、そこに明らかに人の手が加わっていることが見て取れた。エブラーナの民の執念なのだろう。
カインが足を止めた。
それに気づき、セシルは振り返る。「──どうした」
「洞窟を掘り進めているのならば、その音が聞こえてきてもいいはずだろう」

「そうね」とローザ。
リディアが目を閉じる。「——何も聞こえないわ」
「疲れて休んでいるとも考えられるだろう」セシルは前方の闇へと向き直った。「あの老人の話では、エッジは、たったひとりで作業をつづけているそうじゃないか。王子という身分にありながら、見上げたものだ」
「本当に、そうだとしたらな」言って、カインはセシルの隣に立つ。
「——何が言いたい」
「セシルよ、鈍ったものだな。感じられないか、この殺気を」
言われて、セシルは前方の闇へと意識を集中した。
静寂——。
だが、その中に確かに微量ながら何者かの思念が溶けていた。
悲哀。憎悪。そして殺意。
「行こう」と叫ぶと、セシルは走りはじめた。
歩を進めるたびに、大気中に漂う負の感情が強くなってゆく。
この殺気は、エブラーナの王子エッジのものなのだろうか。
もしも、そうだとしたら——
セシルの背中を冷たいものが滑り落ちた。

　ここまで強烈な感情を周囲にまき散らすほど、エッジは追いこまれていることになる。相手はゴルベーザか、それとも――。
　前方の闇が、赤く染まっている。
その熱気に気圧されるようにして、一行は足を止めた。
　ふたりの男が対峙していた。
　一方は、真紅の外套をまとっており、もう一方は黒装束に身を包んでいる。
「――ルビカンテか」カインが低く唸った。
もうひとりの人物は、エッジということになる。
　加勢すべきだとセシルは思った。エブラーナのエッジということになる。それは、カインたちも同様だろう。しかし、一行は魅入られたかのようにふたりを見つめるだけで、まったく動こうとしなかった。そこには、他者の介入を許さない空気ができあがっていたのだ。
「やっと見つけたぜ、ルビカンテ」
　エッジと思しき黒装束の男が言った。「この瞬間を、どれほど待ちわびたことか」
　体中から発散される殺気を隠そうともしない。
　動けば皮膚が裂けそうなほど大気が張り詰めていた。
　しかしルビカンテは、自分に向けて放たれるその濃密な感情にも、まったく動じた素振りを見せなかった。「ほう、どこかで会ったかな？」

「忘れたのなら、思い出させてやるまでだ。エブラーナの無念、今こそ晴らす」
「なるほど。そなたは、かの国の残党か」
「エブラーナの王子、エッジ様よ！」
「そのエッジが、私にいったい何の用だ。エブラーナとの戦は、すでに決着がついた。無駄に命を捨てることはあるまい」
「無駄だと——？」
エッジの口調から、一切の抑揚が消えた。「なら、試してやるよ」
言い終わった瞬間に、動いた。
一気に間合いを詰めるエッジの両の手に、鈍い光が生まれた。短刀よりも小さい、苦無(くない)と呼ばれる武具である。浅く腰を落としたまま、風の疾さで相手の脇をかすめるようにして駆け抜けた。一瞬遅れて、血の赤が飛沫となって散る。
互いの間合いを出たところでエッジは足を止め、真紅の魔人へと向き直った。その顔に笑みが浮いている。「どうした、反応できねえのかよ」
対するルビカンテは、その挑発にも動じた様子はなかった。まるで、冷静に相手の力を推し量っているようにも見える。
それがエッジの心に火をつけた。右手を懐へ忍ばせると素早く引き抜く。「舐めるな！」その手に握ったものを相手の足元へと叩きつけた。

突然、巨大な炎が立ち昇る。
「――エブラーナ忍術、火遁だ」
炎が、真紅の外套を呑みこまんとして激しく燃え上がる。
その熱気は、大気さえも焦がす勢いだった。
しかし――
ルビカンテは嗤っていた。「所詮は人間の技に過ぎぬ。哀れなものだ」
「何だと――！」
「覚えておくがよい。炎とは、こうやって使うものだ」
真紅の外套をひるがえし、ルビカンテが詠唱を開始する。
周囲の大気が揺らめいた。つぎの瞬間、エッジの火遁とは比べものにならないほどの業火が吹き荒れる。目を閉じても、まぶたをとおして視界が真紅に塗り潰された。
視力を取り戻したセシルたちが見たのは、崩れ落ちたエッジの姿。
全身を走る激痛に耐えているのか、その背中が震えている。
ルビカンテは、そんなエッジにとどめを刺すつもりはなかったようだ。
「エッジといったか。かなりの使い手だ……人間にしてはな」言って、エブラーナの王子に背を向ける。「しかし、まだまだ私には及ばぬ。さらなる修練を積むことだ」
「待ちやがれ――」

懸命に起き上がろうとするエッジ。
ビカンテが外套をひるがえすと、その体は炎に包まれ——
そして跡形もなく消え失せた。
「大丈夫か」
倒れたままのエッジの元へ、セシルたちが駆け寄る。
差し出された手を跳ねのけ、黒装束の男は立ち上がった。
「くそ、信じられねえ。この俺が負けるなんざ……」
「あなたがエブラーナのエッジね」とローザ。
「あんたたちは——？」
「私たちもルビカンテを追ってるの」リディアは、セシル、カイン、ローザと順に紹介し、最後に自分の名を名乗った。「クリスタルを取り戻すために」
「知ったことか」エッジは足元に唾を吐いた。「奴は俺の獲物だ。手を出すな」
カインが、そんなエッジの胸倉をつかむ。
「これだけの目に遭ったというのにな。やはり王子様だ」
「俺は、エブラーナ王族に代々伝わる忍者の奥義を受け継いでるんだ。——お前らより一枚も二枚も上手だぜ」
「——試してみるか」

「やめろ」殺気をみなぎらせる両者の間に割って入ったのはセシルだった。「ぼくたちは、君と争うために、ここへやって来たわけじゃない」
「――――」
「力を貸してほしい」
「断る、と言ったら？」
「君にとっても悪い話ではない」
「そいつは聞き捨てならねえな。ルビカンテの野郎なんざ、俺ひとりで――――」
「倒せたのか」カインが遮った。
エッジは目を細めた。「何だと？」
「やめるんだ」とセシルはカインをたしなめたあとで、エッジに向き直る。「ぼくたちは、何としてもクリスタルを取り戻さなくてはならない」
「それは、あんたらの理屈だ」
「君は、この世界がどうなっても構わないというのか」
セシルの問いにエッジは答えず、洞窟のさらに奥へと歩きはじめる。
「どこへ行くんだ」
「あの野郎をぶちのめしにな。邪魔しやがったら――――」
「――――いい加減にしてよ！」突然、リディアが叫んだ。「もう嫌。絶対に嫌よ。これ以上、誰

かが犠牲になるのなんて――」

「お、おい……」

「テラのお爺ちゃんも、ヤンも、シドのおじちゃんも……」

リディアは両手で顔を覆い、泣きはじめた。

その涙が、エッジの態度を一変させた。「泣くなよ、おい」

「当面の目的は同じだ。ぼくたちもともに行かせてくれないか」

頭を下げるセシルに、エッジは大きく息を吐いたあとで、「――まあ、こんな綺麗な姉ちゃんに泣かれたんじゃあ仕方ねえな。ここは一発、手を組んでやるか」

ローザが〝療光（ケアルラ）〟を詠唱。

瞬時に、エッジの負った傷が塞がってゆく。

「ありがとよ」エッジはローザに片目をつぶった。「あんたも美人だぜ」



# 第9章

FINAL FANTASY. IV

ファイナルファンタジーIV

1

「――どうして知らせなかったの」
白魔道士のローザに問われ、エッジは内心、舌打ちした。
バブイルの塔へとつづく道を発見したのに、なぜそのことをエブラーナの民に伝えようとしなかったのか、と彼女は訊いてきているのだ。
「あいつらは、まだまだ未熟だ。足手まといは、ごめんだからな」
と適当に返事を返すが、ローザには通用しなかったようだ。
「嘘よ。仲間を巻き添えにしたくなかったからなのね」
エッジはため息をついた。
なら、わざわざ訊くなっての――。
ルビカンテの軍勢との戦の傷跡は、今なお色濃く残されている。
疲弊した彼らを、さらなる闘いへ駆り立てることなど、誰ができようか。
これ以上の犠牲を出すことは、絶対にしたくない。
だが、復讐をあきらめられるわけもない。となれば、自分ひとりで行動するしかない、との考えに至り、エッジは単独行動に出たのだった。
それが何の因果か、こいつらと行動をともにする羽目になるとは。

まったく運命というのは、わからないものだ。
エッジは、前方を行く純白の甲冑の背中を見つめた。
不思議な野郎だぜ、とつくづく思う。結果的に、セシルの思惑どおりに事が運ぶことになったのだが、それに気づいても嫌な気分にはならない。ここまでの道中、彼がバロンの飛空艇団《赤き翼》をまとめ上げていた男だと聞いたが、納得できる話だった。
いいだろう。今は、この命、お前に預けてやる。
一行は、バブイルの塔の内部を慎重に進んでゆく。
上層へとつづく階段が見当たらなかったため、下層に向かっていた。
地熱によるものなのか、進むたびに大気の温度が上昇してゆくようだった。
そのぬるい風の中に、かすかな気配が沸いた。
三体の朧な影が、悪鬼の如き形相で一行へ襲いかかってくる。
「へっ。さっそく来やがったな」
エッジは不敵な笑みを浮かべ、腰を浅く落とす。
しかし――
そこでエブラーナの王子は、動きを止めた。
「――エッジ?」それに気づいたのか、リディアが声をかける。
セシルとカインが、剣を手にした霊体を退けた。

それでもなお、エッジは呆けたように立ち尽くすだけ。
「王子様」カインが振り返る。「さっきまでの威勢のよさはどうした」
「やめて」
リディアの言葉に、竜騎士は肩をすくめた。
「行こう」というセシルの言葉を合図に、一行は再び進みはじめる。
エッジは顔を伏せ、そのあとについていった。
——こいつは、どういうこった？
血の気が引くほど強く拳を固めている。噛みしめた奥歯が砕けそうだ。
今しがた目にしたばかりの霊体の姿が、エッジの心を凍えさせていた。
霊体の存在に怯えているわけではない。
肝を冷やしたのは、彼らの顔だった。
エッジは、彼らの顔を知っていた。ルビカンテの軍勢とともに闘い、志半ばにして倒れてしまった仲間たちである。成仏できないというだけならわかる。だが、あれほどまでに憎悪の感情を剥き出しして襲いかかって来るのは解せなかった。
鉛のように重い足を引きずりながら、迷宮のような塔の内部を徘徊する。
大気の孕む熱が、さらに上昇していた。
「今度のは大物のようだ」ふいにカインが言った。「恐ろしいなら下がってるんだな」

その言葉に、のろのろとエッジは顔を上げた。
強烈な電撃を受けたかのように体が痺れた。「親父……お袋！」
「何――」とカイン。「どういうことだ」
エッジはそれには答えず、カインの横を駆け抜けて両親の前へ。
ふたり――エブラーナの王と王妃は、頭に宝冠を戴き、王族のみが着ることを許された紫を基調とした式典用の礼服に身を包んでいた。
その顔に生気が感じられなかった。
だが、エッジは気にもしない。
その衣装が多量の血に濡れていた。
だが、エッジはそれも無視した。
最愛の両親と再会できた喜びが、正常な判断を狂わせる。
ルビカンテの軍勢の襲撃を受け、エブラーナ城は陥落した。その直前にふたりは、民衆を逃がす時間を稼ぐため、魔物の群れの前に立ちはだかり、最後まで抵抗した。
エッジがそのことを知ったのは、父王に命じられるままに民を率いて西の洞窟へ逃げこんだあとだった。慌てて城へ引き返したものの、そこにふたりの姿はなかった。
ただ、王族の持ち物である宝剣が血にまみれ、玉座の前に転がっていただけだった。
それを拾い上げ、エッジはルビカンテへの復讐を誓った。

——死んだとばかり思っていた両親が生きていた。
エッジの中で、事実が捻じ曲げられてゆく。
「よかった。お前も無事だったのだな」
王が微笑んだ。一切の温もりを感じさせぬ表情で。
「エッジ、お前もいらっしゃい。私たちと一緒に」
王妃も微笑んだ。血走った目で、悪鬼のようにくちびるを吊り上げて。
「行くって——いったい、どこへ」
不思議そうに問う息子に浴びせかけられたのは、ふたりの哄笑。「地獄にさ！」
「危ない」
セシルが呆然と立ち尽くすエッジの腕を取り、引き寄せる。
豪奢な衣装を引き裂き、王と王妃の体が変容した。
王の肉体は膨張し、その背から蝙蝠の如き翼が生えた。
王妃は四肢が消失、下半身が大蛇と化している。
悪夢をそのまま現実に引きずりだしたかのような姿であった。
尻餅をついたままのエッジの前に、セシルとカインが立ちはだかった。
「何だお前たちは——」エブラーナ王だった魔物は顔を歪める。「それほどまでに命が惜しくないのならば、地獄の砂としてやろう」

かくして闘いの火蓋は切って落とされた。
割り切れぬエッジだけが、傍観者となっていた。
魔物と化してしまったとはいえ、じつの親に刃を向けられようはずもなかった。
かといって、世界のために闘うセシルたちに何の非もないのだ。
どうすればいいのかわからず、エッジはその光景を見つめるだけ。
涙が溢れてきた。
「どうしちまったんだよ、親父、お袋――」
両者の闘いに決着がつかないことだけを、ひたすらに祈る。
だが、現実は無慈悲だった。生き残るためには闘わなければならない。生か死か、どちらかを手に入れるまで、この死闘はつづくのだ。
セシルとカインの一撃が魔物の体をえぐるたびに、自分の体が傷つけられているような錯覚に陥り、胸が痛んだ。このような姿になったとはいえ、彼らが親であることに変わりはない。
見た目などは、どうでもいい。大切なのは、心。
せめて、人間として成仏してくれることだけを祈った。
――と。
その必死の願いが天に届いたのだろうか。
依然として魔物の姿をしていたが、王と王妃の発していた殺気が消えた。

それにセシルたちも気づいたのか、後方へ跳躍し、間合いを広げる。
魔物たちの濁った双眸に、温かみのある光が宿っていた。
間違いない。親父とお袋の目だ。
エッジは、よろよろと立ち上がった。
「エッジよ……わしの話を聞くのだ」エブラーナ王の両手が、だらりと垂れ下がった。闘う意思は、もはやないようだ。「我らは、すでに人ではない」
「親父——」
「そう、生きていることが許されない存在なのだ」
王妃だった魔物の目に涙が浮かぶ。「ごめんなさいね、エッジ。あなたに遺してあげられるものが何もなくて……」
「何を言うんだ、お袋。俺には、エブラーナの民がいる」
王が頷いた。
「この意識のあるうちに、我らはここを去らねばならない。あとを頼んだぞ」
エッジの思考が空転した。
それが別れの言葉だと理解するのに、短くない時間が必要だった。
「嫌だ、行っちゃ嫌だ！　お願いだ」
エッジは叫んだが、心のどこかではそれが叶わぬ願いだと理解していた。

王の姿が少しずつ薄れてゆく。
「さよなら、エッジ」
つぎは王妃の輪郭が霞みはじめた。
「待って――！」
ふたりの気配が消えると、エッジは床に両膝をつき、天を仰いだ。
それでも涙は、つぎからつぎへと溢れてきた。
垂直に立てた喉から、悲痛な咆哮が上がる。
――そのときだった。
「……またお前か」どこからともなく声が聞こえてきた。
強烈な気配が沸く。
一行の前に、真紅の炎が渦巻いた。

2

熱を帯びた大気は、吸いこむと肺が焼けつきそうなほど。
やがてその炎が人型の輪郭を持つ。
それを見てエッジは弾かれたように立ち上がった。涙が、一瞬にして乾く。

「ルビカンテ――てめえだけは絶対に許さねえ」
「許さぬだと？　いったい、何のことだ」
「とぼけるな。安らかに眠るはずだった親父とお袋を蘇らせ、辱めた。それだけじゃねえ。戦で死んだ仲間たちも、てめえが――」
「私ではない」
「へっ。この期に及んで言い逃れかよ」
「部下のルゲイエが独断でやったことであろう。その非道な行ないは、ここに詫びよう」
「言いたいことは、それだけか」
「私は、お前のように勇気ある者が好きだ。しかしあの敗戦から、どれほどの時間が経った。どれほどの修練を積んだというのだ」ルビカンテは、駄々をこねる我が子を諭すときの口調になっていた。「勇気と無謀は違う。その場の感情に振りまわされているようでは、真の強さを手に入れることはできぬぞ」
言われてエッジは、静かに目を閉じた。
精神を落ち着かせるためではない。
思い浮かべたのは、大切な人たちの悲痛な表情。それが全身の血を沸騰させた。
「見せてやるぜ」かっと目を見開く。「人間の怒りってもんをな！」
「――いいだろう」ルビカンテが、〝療光（ケアルラ）〟を詠唱。一行の傷ついた体を癒してくる。「怒りが、



どこまで人間を強くするのか。それを私が見極めてやる」
エッジ、セシル、カインが動いた。
対するルビカンテは、身を守るかのように全身を外套で覆う。
雷光の如きエッジの一撃が、すれ違いざまに炎を操る魔人へと叩きこまれる。つぎの瞬間、真紅の飛沫が散った。が、それは血の赤ではなく、炎の紅蓮だった。飛散したその炎が、すでにルビカンテの間合いから離脱していたエッジへ襲いかかる。
——くそっ！
意思を持ったかのような炎撃を喰らい、エブラーナの王子は眉根を寄せた。
つづいて跳躍したカインが、ルビカンテを頭上から急襲。
しかし、その切っ先も外套に阻まれ、炎による反撃を誘発したに過ぎない。
最後にセシル。
掲げた剣を振り下ろそうとしたとき、エッジが叫んだ。「やめろ！」
それに反応し、セシルは後方へと跳躍した。「どうして——」
エッジは声を落とした。「あの外套が、俺たちの攻撃を跳ね返す」
「やはり、そうか」とカイン。
セシルは奥歯を噛んだ。「では、どうすれば——」
「反撃の機会は必ず来る。それまでは耐えるんだ」

そんなエッジの言葉に、カインが微笑んだ。「熱くなっていると見えたが、冷静だな」
「言っただろう。お前らよりも上手だってな」
憎まれ口を叩くが、そんなエッジの顔にも笑みが浮かんでいた。
ルビカンテが動いた。
「――どうした、臆したか。ならば、こちらからゆくぞ」
詠唱がはじまると同時に、外套をひるがえる。
周囲の大気が揺らめいたかと思うと、周囲に業火が吹き荒れた。
あのときの――俺がこいつの前に屈した術だ。
それでも、なぜかエッジの心に恐怖や焦りはなかった。
視界が真紅に染まった瞬間、全身を激痛が駆け抜けた。
が、それは一瞬のこと。
すぐにローザの〝療光（ケアルガ）〟が痛みを和らげてくれた。
そうさ。今、俺はひとりじゃねえんだ。
悲鳴を上げる代わりに、エッジは叫んだ。「――今だ！」
片膝をついていたセシルとカインが立ち上がる。
狙うは、ひるがえされた外套からのぞくルビカンテの生身の肉体だった。吹き荒れていた魔法風が収まり、舞い上がっていた外套が再び全身を覆おうとしている。

この機会を逃すわけにはゆかなかった。エッジは加速。ともに疾るふたりを置き去りにして、リディアの〝呪毒(バイオ)〟がルビカンテを仰け反らせた。一瞬だけ遅れて、エッジが両手の苦無を一閃。

間に合ってくれ！

その祈りに呼応するかのように、リディアの〝呪毒(バイオ)〟がルビカンテを仰け反らせた。一瞬だけ遅れて、エッジが両手の苦無を一閃。

つづけてカイン、そしてセシルが鋭い刃を突き立てた。

「――なるほどな」

ルビカンテの口から、大量の血とともに言葉が吐き出された。「力を合わせれば、強大な相手とて打ち倒すことができる。見事だ」

セシルとカインが切っ先を引き抜き、間合いをはずす。

「敗北を認めよう」ルビカンテは、片膝をついた。「だが、私は必ず蘇る。エッジといったな。そのときにこそ、再び合間見えようぞ」

ルビカンテが、どこからともなく現れた青白い炎に呑みこまれ、そして燃え尽きたかのようにして消えた。熱源を失った大気も、次第にもとの冷たさを取り戻してゆく。

「親父、お袋……仇は討ったぜ」

エッジは小さく呟いた。そこへ

「若――！」

聞き慣れた老人の声が響き渡った。
見れば、家臣の爺がふたりの部下を引き連れ、走ってくる姿があった。
「わしらも、ともに闘いまする」ようやくエッジの前までやってきた爺は、肩で息をしながらも鋭い眼光で周囲を見まわす。「して、彼奴は――ルビカンテは、いずこに?」
「もう、すんだぜ」
「おお、さすがは若でございますな」
「まあな――と言いたいところだが」エッジは、背後のセシルたちを振り返った。「俺だけじゃねえ。こいつらのお陰さ」
聞いて爺は驚いたように目を丸くし、深々と頭を垂れた。
「で、セシルよ。クリスタルとやらは、どこにあるんだ」とエッジ。
「恐らくは、この奥だろう」
セシルが見やったのは、ルビカンテが現れ、そして消えていった場所にある大きな扉。
「なら、これで一件落着ってわけか」
「いや、そうはいかないだろう」セシルの表情が曇った。「あのゴルベーザが、これしきのことであきらめるとは思えない」
「ゴルベーザ――何者だ、そいつは」
「クリスタルを集め、大いなる力を手にしようと画策する黒幕だ。先刻のルビカンテも、奴の

配下のひとりでしかない」
「なるほどな。すべてはそいつの……見過ごすわけにはいかねえな」
そこに爺が割って入った。「しかし若、城の再建が――」
「俺は、こいつらに借りがある。何より、こんな綺麗な姉ちゃんが歯を食いしばって頑張ってんだ。放っておくわけにはいかねえだろ」リディアに片目をつぶって見せる。
「わ、若――」
「冗談だよ」エッジは爺に向き直り、表情を引きしめた。「エブラーナも大切だが、今はそうも言ってられねえ。わかるか、世界が危ねえんだよ。ゴルベーザを倒さない限りな」
「わかりました。しかし、くれぐれも――」
「心配すんなって。留守は頼んだぜ」
爺がふたりの部下を連れ、引き上げていくのを見送ったあとで、
「さてと。それじゃあ、まずはクリスタルを取り戻すことにするか」
エッジの言葉を合図に、一行は扉を開け、その内部へと足を踏み入れた。
ローザが息を呑んだ。
そこには、七つのクリスタルが安置されていたのだ。
一行が台座へと近づいた瞬間だった。
突然、足元の床が消失した。

「くそ――罠か」カインが叫んだが、もはやどうしようもなかった。
闇の中へ落ちてゆく。

3

「――なるほど」
と、一行からの報告を受けてドワーフの王ジオットは、嘆息した。
ドワーフ城は玉座の間。
辛くもバブイルの塔から脱出した一行は、クリスタルの奪還をあきらめ、失意のうちにこの城へと帰還したのであった。
頭を抱えるジオットを目にしてローザは、
でも――と、声の限りに訴えかけたかった。
確かに七つのクリスタルを取り戻すことはできなかった。しかしこの決死の探索行が、まったく無意味だったというわけではないのだから。
私たちは、エッジという心強い味方を得た。
四天王の最後のひとりであるルビカンテを倒した。
そして、バブイルの塔を脱出する際に敵の新型飛空艇――エッジが〝ファルコン〟と名づけ

た――を奪い、相手に打撃を与えると同時に、この地底世界での移動手段を得たのだ。
ローザは口を開いたが、言いかけた言葉を寸前で呑みこんだ。
今は何を言っても言い訳にしかならないと思ったからだ。
「ところで――」
と切り出したのは、セシルである。「封印の洞窟の状況は」
最後のクリスタルは、封印の洞窟に隠されているという。
一行がバブイルの塔へ行っている間に、ゴルベーザがどのように動いていたのかは、確かに把握しておくべき事柄だった。
「時間の問題であろうな」
「しかし、あの洞窟には強固な封印が施してあると言っていたはずだ」とカイン。
「いかにも」
ジオットは頷いた。「だが、それ以外にも洞窟へ入る手段があったとしたら――」
「まさか――」セシルには思い当たる節があったようだ。
「そう、ゴルベーザは飛空艇からの砲撃で、封印の洞窟のある山を崩してきおった」
封印は、洞窟の入り口にのみ施されているのだろう。山肌に穴を開けられては、封印など何の役にも立たない。確かにジオット王の言うように、最後の〝闇のクリスタル〟がゴルベーザの手に渡るのは時間の問題だと思われた。

「ゴルベーザよりも先に、私たちがクリスタルを手に入れれば……」
リディアの言葉に、ジオット王が同意する。
「うむ。それしか打つ手はないであろうな」
しかしセシルは、小さく首を振った。
「残念だが、ファルコンでは溶岩の海を渡れない」
このドワーフ城から封印の洞窟へ行く術はないということだった。
突きつけられた厳しい現実に、そこに居合わせたすべての者が声を失った。
何かにつけて軽口を叩くあのエッジでさえ、今は腕組みし、押し黙っている。
このままでは、最後のクリスタルがゴルベーザに奪われるのを、ここでただ指をくわえて見ていることしかできない。
そのときだった。
「何を辛気臭い顔をしとるんじゃ」
聞き慣れた声が、玉座の間に響き渡った。
「――シド！」
振り返ったローザは、我が目を疑った。「無事だったのね」
リディアがシドに駆け寄ったかと思うと、その胸で号泣した。
「おじちゃん……よかった」

それが気に食わなかったのか、エッジは
「何だ、この爺は……」不満そうな顔だった。
「爺だと？　何じゃ、この無礼者は」
「よく覚えときな。俺はエブラーナの王子、エッジ様だ！」
「止めて」涙を拭ったリディアが、エッジを睨む。「おじちゃんは怪我が治っていないんだから、怒らせるようなことは言わないで」
「何じゃ、リディアの尻に敷かれとるのか」
「う、うるせえな……」
エッジが顔を赤らめて、老技師に背を向ける。
そこでシドが真顔に戻った。「話は戻るが――セシルよ。あの新型飛空艇ならば、少々の改造で溶岩の海の上を飛ぶことができそうじゃぞ」
「どうして、ファルコンのことを……」
「看護室で寝ておったんじゃが、聞き慣れぬエンジン音を耳にしてな、それでベッドから抜け出して様子を見てきたというわけじゃ」
セシルとカインは、顔を見合わせ、肩をすくめた。
「どれ、さっそく改造に取りかかるとするかな」
「待って、シド。まだ怪我が治っていないのでしょう」

「ローザよ、心配してくれるのはありがたいがな、今はそんなことを言ってる場合じゃなかろう。事態は一刻を争うんじゃから」それから、シドは黒装束の男へと視線を転じた。「おい、エッジといったな。ちと手伝ってくれんかの」
「な、何で俺が――」
そんなエッジに、シドは耳打ちする。
「リディアはな、機械いじりや力仕事のできる男が好みらしいぞ。いいところを見せる絶好の機会だとは思わんか」
「……し、仕方ねえな」
ふたりが玉座の間から出て行ったあとで、セシルはジオットを振り返った。
「どうやら道が開けたようです。封印の洞窟へ向かおうと思います」
ジオットは頷いた。そのあとでセシルから視線をはずし、かたわらの柱を見つめた。「そこにいるのはわかっておる。出てきなさい」
ふた呼吸ほどの間を置いてから、柱の陰からひとりの小柄なドワーフが現れた。
「――ルカ」リディアが声を上げた。
ルカは、そんな彼女に「お帰り」と微笑んだあとで、父であるジオット王のもとへと駆け寄った。首飾りを差し出す。
「これこそが、洞窟の封印を解く鍵なのだ」ジオットは、娘から受け取った首飾りを、セシル

へと手渡した。「どうか、最後のクリスタルを守ってほしい」

4

シドによって改造された飛空艇ファルコンに乗りこんだ一行は、広大な溶岩の海を渡り、一路、封印の洞窟へと向かった。

洞窟のある山は、あちらこちらが無残にも削り取られていた。ジオットの言うように、ゴルベーザは《赤き翼》を使い、新たな侵入経路を力ずくで作り出そうとしていたのだろう。

しかし今は、その《赤き翼》の影は見えない。

何事もなく封印を解いた一行は、その内部を足早に進んでゆく。

不気味な静けさに気圧されたのか、誰も口を開こうとしなかった。

ルカの首飾りによって、この最後の聖域は封印の加護を離れていた。つまり無防備な状態でゴルベーザの魔手にさらされていることになる。

ゴルベーザに感づかれる前に、最奥部にあるとされているクリスタルを手に入れ、すみやかにドワーフ城へ帰還しなければならなかった。

もしもその前に闇の軍勢が、ここへ押し寄せたら――。

もう何度目になるのだろうか、カインの心を再び不安が蝕みはじめる。

相手は、策士であるあのゴルベーザなのだ。
命懸けで抵抗しても、結局のところ、奴にクリスタルを奪われてしまうような気がした。
そして、つぎは誰が命を落とすことになるのか。
カインは、自分が無意識のうちにセシルの死を望んでいることに気づき、身震いする。
己の心に闇が巣食っているのは否定しない。しかし、これまで親友へと向けられていた負の感情は、ゾットの塔での一件以来、鳴りを潜めている。そしてこの精神の平穏は、永遠の眠りにつくその日まで、決して乱されることはないと信じていた。
そう――俺は正気に戻ったのだ。
探索をつづける一行は、やがて大きな扉の前へと至る。
セシルがその扉を押し開けた。
「こいつか」とエッジが声を上げる。
そこには台座に安置された漆黒の水晶――〝闇のクリスタル〟があった。
セシルは、それをつかむと仲間たちを振り返る。「戻ろう」
クリスタルの置かれていた小部屋をあとにした一行は、ファルコンへと急いだ。
ドワーフ城へ帰還すれば、目標は達せられたことになる。
しかし、誰の顔にも安堵の表情はなかった。本当の闘いは、ここからはじまるのだ。
封印の洞窟からクリスタルが消えたことに、ゴルベーザはすぐに気づくだろう。

そうなれば、ドワーフたちの城が戦場と化すのは避けられない。
敵味方を問わず、多くの血と涙が流される。
最悪の場合、この地底世界からあらゆる生命が失われ、すべてが溶岩の海へと没し、死の王国となることも考えられた。そして戦火は地上世界にも拡大するのだろう。
いったい、ゴルベーザは何を望んでいるのか。
カインには、それがわからなかった。
月に眠るという強大な力を手に入れると言うが、ならば、その先に何があるというのだ。世界を統べる王として君臨し、虚飾と飽食とにまみれた生活を送るため？　あるいは己の破壊衝動を満たし、死せる大地を作り出すことだけが目的なのか？
どちらも違う、とカインの直感は告げている。これまで接してきた限りでは、ゴルベーザはそういった欲望とは縁遠い存在のように思えた。奴の心が読めない。あの漆黒の面頬の奥に、どのような素顔が隠されているのだろうか。
やがて一行の前に、見たことのある扉が現れた。
先刻まで強固な封印の施されていた、あの扉である。
「何だよ、あっさりと戻って来られちまったな」
扉を抜けるときに、物足りないという口調でエッジが呟いた。
そのとおりだった。

洞窟の出口は、すぐ目の前だ。そこまでの距離は十歩にも満たない。
しかしカインには、それが遥か彼方にあるかのように感じられた。
何かが起こる。必ず。
これまで様々な策を弄してきたゴルベーザが、クリスタルを奪うこの好機を見逃すとは思えなかった。奴の邪悪な気配の足音が、聞こえてくるようだ。
周囲の闇が、次第に濃くなってゆく。
足を止めた一行の耳に、鉛の声が届いた。
「……帰って来るのだ。そのクリスタルを持ち、私のもとへ」
それが自分に向けられた言葉だと知り、カインは締めつけられるような胸の痛みを覚えた。
苦しみのあまり、地面に片膝をつく。
「カイン――」セシルらが駆け寄ってくる。
「大丈夫だ。俺は……正気に戻った」
震える声で応える。その言葉に嘘や偽りなどない。
ゴルベーザの送りこんでくる邪悪な波動に共鳴し、カインの心に眠る闇が、ゆっくりと鎌首をもたげる。大丈夫だ。今の俺ならば、この感情を抑えることができる。
しかし――
この場を凌ぐことができたとしても、根本的な解決にはならない。この先もゴルベーザは、

事あるごとに俺の心に囁きかけ、クリスタルを奪おうとしてくるだろう。昼夜を問わずに責め苦を受ければ、やがて精神は疲弊し、正常な判断が下せなくなる可能性もある。

もはやクリスタルは、ゴルベーザの手の内にあるも同然なのだ。

カインは、覚悟を固め、立ち上がった。

訪れる結果は、いずれの道を選ぼうと変わりはしない。それならば——

「しっかりして」ローザが気遣うようにカインの肩に触れた。

そんな彼女に、竜騎士は微笑みかけた。「俺は正気に戻っている」

「わかってるわ。私たちは、あなたを信じて——」

カインの動きが、ローザの言葉を断ち切った。

セシルの鳩尾へ拳を叩きこむ。体をくの字に折ったところへ、その後頭部に手刀を落とした。

崩れ落ちた聖騎士の手からクリスタルを奪うと、カインは出口へ急ぐ。

すまんな、セシル。だが、俺にできることは、これしかないのだ。

＊

地面に伏したセシルを見やったのは、一瞬だけだった。

すぐに洞窟から姿を消したカインの背中を追い、ローザは走りはじめる。

――信じていたのに、心からあなたを。
ローザの目に涙が溢れた。
もちろん、裏切られたとは思っていない。
彼は、ただゴルベーザに意のままに操られ、悪事を重ねただけに過ぎない。
けれども、心のどこかでは期待していた。
闇の誘惑を退け、自分たちとともに闘ってくれることを――。
ローザにしてみれば、それはささやかな望みのつもりだったが、どうやら見るのも許されぬ夢だったようだ。だから泣く。幼いころから育んできた友情を踏みにじり、深めてきた絆を利用するゴルベーザに、自分たちは屈してしまったのだ。
封印の洞窟から飛び出したローザの目の前で、《赤き翼》が浮上する。
どこからともなく、ゴルベーザの哄笑が聞こえてきた。
「これですべてのクリスタルが揃った。月への道が開かれたのだ」
ローザは、甲板にカインの姿を捜したが、見つけ出せなかった。

## 5

ドワーフ城へと帰還したセシルたちは、ジオットの待つ玉座の間へ向かう。

一行の姿を目にし、ドワーフの王が玉座から立ち上がった。
が、すぐにセシルの沈痛な面持ちに気づいたように、眉根を寄せた。
「最後のクリスタルは――」恐るおそるといった口調で尋ねてくる。
セシルは、深く頭を垂れた。「申し訳ありません。ゴルベーザの手に」
言葉を失ったジオットは、倒れこむようにして玉座に身を沈める。「……そうか」
封印の洞窟から〝闇のクリスタル〟を持ち出そうとしたときに、そこに現れたゴルベーザに強奪された――セシルが語ったのは、それだけだった。
カインのことには、まったく触れない。
話せば士気が乱れるというだけでなく、このような状況になってしまっても、セシルはカインとの友情を信じていたからだ。カインは、決して臆病風に吹かれて逃げ出したのではない。今もきっと、己の心の中で強大な闇と向かい合い、闘っているはずだとの確信があった。そんな彼を、なぜ裏切り者と斬り捨てることができよう。
「ゴルベーザは大いなる力を手にするため、これから月へ向かうのでしょう」
セシルは、重い口調で言った。
が、言ってから、その言葉の重みを痛感し、後悔する。
我らには、彼方に浮かぶ月へと向かうゴルベーザを止める術などない。
案の定、玉座の間が沈黙に支配された。

つぎに打つ手が見つからない。

自分たちにできるのは、ただ事の成り行きを見守るだけなのだ。

「父上――」と、ふいにジオットの横に立つ少女ルカが口を開いた。「月までゆける船を造り出すことはできないかしら」

「月までゆける船――?」とセシル。

「セシル殿、どうか本気にしないでほしい」ジオットが笑いはじめた。「ルカは、ご覧のように夢見がちな子でな、ときどき突拍子もないことを言い出すのだ」

「父上やみんなは、あんな鉄の鳥なんかいるわけがないなんて言っていました。でも飛空艇は、実在したではありませんか」ルカは頬を膨らませた。

「しかし、それと魔導船の伝説は、まったくの別物であろう」

ジオットの言葉に、セシルは大きく目を見開いた。「――魔導船?」

「遥か昔にあったとされる、星まで旅することができる船の伝説だ。ご先祖様より口伝にて受け継いできたものだが……それを真に受けている者はルカぐらいであろう」

――と。

ルカが目を閉じ、一片の詩句を吟じた。

竜の口より生まれしもの

天高く舞い上がり光と闇を掲げ
眠りの地にさらなる約束をもたらさん。
月は果てしなき光に包まれ
母なる大地に大いなる恵みと慈悲を与えん。

「それはミシディアの――」とセシル。
ジオットが玉座の上で飛び上がった。「ご存じか、ミシディアを！」
「ぼくたちの地上世界にある、魔道士たちの里です」
「――父上！」
ドワーフの王は、娘に向かって頷いた。「よもやミシディアが実在するとはな」
「ミシディアの長老は、こうおっしゃっていました。ただこの詩句を後世に伝え、祈りを捧げるのが、我らミシディアの民の務めだ――と」
「――祈りを捧げるのが務め、か」
言ってからジオットは、床に目を落とす。しばらくの沈黙のあと、顔を上げた。「これは偶然などではないな。そのミシディアの長老は、魔導船を復活させるつもりであろう」
セシルたちは、互いに顔を見合わせる。
話が飛躍しすぎて、ついてゆけないのが正直なところだった。

だが、ジオットはそれを気にした風もなく、声を上げた。「何をしとる。ミシディアだ。ミシディアへ急ぐのだ！」
「ですが、地上への穴は塞がってしまっています」ローザが言った。
「バブイルの塔も駄目だろうな」エッジが肩をすくめる。「この地底から地上へは、どうやら俺たちじゃあ抜けられねえみたいだしよ」
——そのときだった。
「何じゃ何じゃ、またこのわしの出番か」
玉座の間に響き渡る声に、一行が振り返る。
「——シド！」
セシルは、驚きに目を丸くした。
シドは、飛空艇ファルコンを溶岩の上でも飛べるように改造した直後に倒れ、ドワーフ城の救護室へと運びこまれていたのだ。
あのときは寝台に横たわりながら、今にも消え入りそうな声で「どうやら、わしなんぞの出る幕じゃなくなってきたの」と弱気な言葉ばかり口にしていた。それが今では——。
「傷はもういいの？」
ローザが心配そうに声をかけるが、当のシドは、

「こんな老いぼれの怪我を心配しとるときじゃなかろう」と笑うばかり。
「おじちゃん、無理はしないでね」リディアは涙目になっていた。
「へっ。無理でもされて死なれたら、夢見が悪いからな」
エッジが憎まれ口を叩くと、それにすぐにリディアが反応した。
「止めてよ！」
エブラーナの王子は、両手を広げ、首をすくめた。
「しかし、シド」とセシルが話を戻す。「地上への穴は塞がってしまっているんだ。いったい、どうやって地上の世界へ戻れば――」
「なーに、簡単なことじゃよ。ファルコンの船首を改造して、岩を掘りながら進めるようにしてやればよい。それでお前たちは、地上へ戻れるという寸法じゃ」
シドの奇想天外な計画に、エッジが詰め寄った。
「おいおい、本当にそんなことできんのかよ」
「当然じゃ。飛空艇のシドに不可能の文字はないわい！」
睨み合うふたりの間に、セシルが割って入った。「今、ぼくたちが頼れるのは、シドしかいない。ぼくたちも手伝う、ファルコンの改造を頼むよ」
「任せとかんか」セシルに頷いたあとで、シドはエッジの顔を覗きこんだ。
「な、何だよ……」

「さ、また見せ場じゃぞ」
言われてエッジは、ちらりとリディアの様子を窺った。
彼女は不安そうな表情で、こちらを見つめている。
エッジは、シドに向き直ると大きく息を吐いた。
「――わかったよ。任せておけって」

6

台座の上に、クリスタルが置かれている。その数、七つ。それぞれが放つ光が微妙に混ざり合い、ゴルベーザのまとう漆黒の甲冑を複雑な色へ染め上げていた。
カインは、やや離れた場所に立ち、そんなゴルベーザを見つめる。
手には、八つ目の〝闇のクリスタル〟が握られていた。
封印の洞窟でこのクリスタルをセシルから奪ったカインは、《赤き翼》に乗りこみ、ここバブイルの塔へと連れてこられたのである。
この部屋には、ゴルベーザとふたりきり。
相手の背中を見つめながら、カインはずっと沈黙を保っていた。
対するゴルベーザも口を開こうとしない。

静寂の中、ただ時間だけが静かに流れてゆく。

――と。

ゴルベーザの背中が、わずかに揺れた。

「そのクリスタルをどうするのか、まだ決めかねているか」嗤っていた。

「俺に選択肢などあるとは思えんのだがな」

槍を握り直すと、カインは浅く腰を落とした。

対するゴルベーザは、その切っ先が自分に向けられていることに気づかぬのか、振り返ろうともしない。「私は、お前の意思を尊重するつもりだ」

カインは鼻を鳴らした。「クリスタルを渡したが最後、俺を始末する気だろう。騙されるとでも思っているのか」

「騙すだと――？」

ゴルベーザが振り返った。「いつお前を騙した」

「――――」

「私の言葉に偽りはない」

「なぜだ」

問われ、ゴルベーザはわずかに首をかしげた。「意味がわからぬが」

「お前は、俺がみずからクリスタルを差し出すのを待っている。力ずくで奪うこともできるの

に、そうしない。その理由が聞きたい」
「私にもわからぬ――」
「ふざけるな！」怒りに任せ、槍を突き出す。しかしその切っ先は、ゴルベーザの甲冑に触れる寸前で静止した。「くそ」カインは吐き捨てるように言ったあとで、槍を引いた。
ゴルベーザを試したつもりだった。
奴が動じる様を、この目で見たかっただけなのだ。
だがゴルベーザは動かなかった。それが余計にカインの心を乱す。
「私はお前を信じ、期待しているのだ」
カインは、言葉を返そうとしなかった。
ゴルベーザがつづける。「誰の心にも、光と闇がある。お前は、その生まれ育った境遇から心の中の闇が光よりも少しだけ大きかったに過ぎない」
「それが、お前の術によって光の力が弱められた――」
「そのとおり。だが光に生きるか、闇に生きるか。最終的には、本人が選ぶこと」
カインは、右手に握っている〝闇のクリスタル〟に視線を落とした。そして、そのまま呟くように言った。「俺に選択権があると」
「私の右腕となり、闇の宴で舞い踊るか。ここで英雄を気取り、命を捨てるか。いずれを選ぼうと、私はお前を咎めぬ」

沈黙。
カインは思い知った。
ふたつの選択肢があるが、両者は決して等価ではないのだと。
脳裏をよぎったのは、ローザの顔だった。
かつてカインは、彼女を幸せにできるのは自分しかいないと思っていた。
今では、それが間違いだったのだと、よくわかる。
ローザに必要なのは、俺ではなくセシルなのだ。
ならば――！
カインはクリスタルから顔を上げ、ゴルベーザを見つめる。
「お前は、俺に偽りの言葉を吐かないと言った」
ゴルベーザが、無言で頷く。
「お前は、すべてのクリスタルを手に入れたあと、どうする」
「言ったはず。月に眠る大いなる力を手にするのだ」
「俺が訊きたいのは、力を手に入れたあとだ。全能の王として君臨するのか、それとも世界を破滅に追いやり、それで満足するのか」
「――――」
「どうした」

ゴルベーザの視線が動いた。カインから己の爪先へと。
失意にうな垂れているようにも見えないこともない。
「——わからぬ」消え入りそうなほどの小さな声が返って来た。
カインは自分の耳を疑う。
それは予想もしていなかった答えだった。
ならば、どのような衝動に突き動かされ、世界をこのような戦乱に巻きこんだのだ。
怒りを鎮めようと、カインは大きく息を吸い、そして吐き出した。
「俺が気にかけているのは、仲間のことだ」
ゴルベーザが、ようやく顔を上げた。
カインはつづけた。「だが、お前の目的が世界の破滅でないのならば、あいつらの生は保証されるのではないかと考えた」
「勘違いするな」いつもの鉛の声に戻っていた。「我が望みは、月の力を得ることのみ」
「——そうか」
「奴らが、そこまで心配か」
言うとゴルベーザは、右の掌を薄闇にかざす。そこにひと抱えほどもある巨大な鏡が出現した。映し出されているのは、溶岩の海を飛行するファルコンだった。
「安心するがよい。彼らには、この地底世界から抜け出す術はない。私とセシルは、もはや交

わることはないのだ」
　鏡の映像を見つめるカインの顔に、あるかなしかの笑みが浮いた。
　その視線が注がれていたのは、ファルコンの船首だった。
　カインは、手にしていた槍を光の疾さで突き出す。
　鏡が粉々に砕けた。
　それからゴルベーザへと向き直り、〝闇のクリスタル〟を放り投げた。
「そいつは、お前にくれてやる」
　ゴルベーザが、受け取ったクリスタルを台座へと置く。
　八つの水晶は、共鳴するかのように耳障りな音を発した。
　つぎの瞬間、バブイルの塔が、大気が震動をはじめる。壁の至るところが発光し、室内を満たしていた闇を駆逐。ついに塔が稼動したのだ。
「月への道が開かれた」
　鉛の声が高らかに宣言した。「これよりバブイルの巨人を、この大地へと降ろす。我らに歯向かう者あらば、容赦なく殲滅する」

## 7

「――待っておったぞ」
背後に生じた気配に向かって、目を閉じたままで言った。
日課の祈りを妨げられるのを何よりも嫌うが、相手が待ちわびた者たちならば話は違う。
長老は微笑み、そしてゆっくりと目を開いた。
祈りの塔の最上階から見下ろすこの景色が、ミシディアの長老ミンウは何よりも好きだった。
特に太陽が彼方の水平線へ没する瞬間、一面の海が青から黄金に染まりゆく光景は、何度眺めても決して飽きることがなかった。
「長老、まずご報告しなければならないことがあります」と背後の男が言った。
「――ほう」
「ともに旅をしていたパロムとポロムが――」
「その話ならば、あとでゆっくりと聞くことにしよう」
「しかし――」
食い下がる男に、ミンウは固い口調で言い放つ。
「我らに残された時間が、それほど多いと思っておるのか」
それでようやくセシルが沈黙した。

――と。

背後の気配が、つぎつぎと増えてゆく。

村のすべての魔道士たちに、ここへ集まるように申しつけてあった。

やがて、「準備が整いました」という緊張した声が聞こえた。

長老は頷くと、ゆっくりと目を閉じ、精神を集中させた。

無意識が意識を呑みこんだ瞬間に、くちびるが動く。

祈りの塔へ集いし者たちの声が、心がひとつになる。

高く、低く。長く、短く。

古より伝えられてきた詩句が、独特の旋律を得て、まるで生き物のように大気中を漂う。やがて祈りを含んだ風が光をまとい、天へと昇っていった。

竜の口より生まれしもの
天高く舞い上がり光と闇を掲げ
眠りの地にさらなる約束をもたらさん。
月は果てしなき光に包まれ
母なる大地に大いなる恵みと慈悲を与えん。



眼下の大洋に、巨大な渦が生じていた。
長老は目を開いた。声が歓喜に震える。
「おお、見るがよい。我らが祈りに光が応えたぞ」
大渦の中心から、異物がゆっくりと浮上していた。
「あれは、いったい――」セシルが息を呑んだ。
「大いなる眩き船、魔導船」
長老は、そこでようやくセシルたちを振り返った。
「祈りの最中に、どこからか暖かな声が聞こえてきた。その声は、こう告げた。月へ参れ、と。月で、そなたらを待っている者がいるようだ」
「月へ――」
「そのための魔導船であろう」
長老の言葉に、セシルは考えこむように沈黙した。
ふた呼吸ほどののちに、聖騎士は力強く頷く。「やってみます」
「頼んだぞ」
長老も頷き返した。と、そこで思い出す。「ところでバロンの状況は」
「すでにゴルベーザより解放し、治安も回復しております」その問いの意味するところを、セシルも理解したようだった。「しかし、パロムとポロムが――」

「また、あいつらがやらかしたか」
「いえ、違います」
セシルは、双子が石化して自分たちを救ってくれたのだと説明した。「あのふたりがいてくれなかったら、ぼくたちは、こうやって生きていることはできなかったでしょう」
祈りの塔に集まった魔道士たちがざわめいた。
しかし、長老はそれを意に介さず、
「石化したのであれば、それを解けばよい」
「それが――」
セシルのあとを、ローザが引き継いだ。「私も試してみたのですが、みずからの意思で石化しているため、〝解呪（エスナ）〟では何の効果も表れないのです」
「あの賢者テラも、同じことを言っていました」
聞いて長老のミンウは、笑った。
それが意外だったのか、セシルとローザは目を丸くする。
「あの――いったい、どういうことなのでしょうか」
「案ずるな。長旅の疲れから居眠りでもしておるのだろう」
「そ、そんな――」
「どうやら私の目に狂いはなかったようだな」長老の顔に、孫を見つめるときの笑みが宿って

いた。
「心配はいらぬ。あやつらのことは、私に任せておけ」
セシルとローザは、しばらく互いの顔を見つめ合ったあとで、破顔した。
「さてと、それじゃあ行ってみるか、あのお月さんへ」エッジが拳を突き上げた。
リディアも頷く。「ええ。ゴルベーザを止めないと」

*

一行が祈りの塔から姿を消したあとも、長老は、ひとりそこに佇んでいた。
思い描くのは、パロムとポロムの笑顔。
あのやんちゃな子供たちが、ここまで逞しく成長したかと思うと感慨深い。
ふたりを石化から解放したあとに、何と言葉をかけてやろう。
これまで長老は、双子を一度も褒めたことはなかった。
だが、今回ばかりは別だ。
その行ないを賞賛してやろうと心に決めた。



# 第10章

FINAL FANTASY IV

ファイナルファンタジーIV

1

無意識の海に沈んでいた意識が、ゆっくりと浮上する。
永い永い眠りだった。
半身を起こして周囲を見まわす。
同胞たちが目覚めた形跡はない。みな、いまだに夢の世界を漂っているようだ。
適度に湿度を含んだ大気が、青く明滅をくり返していた。
老人の鼓動は、それよりももっと速かった。それで目覚めた理由を知る。
待ち望んでいた〝約束の刻〟が、ついに訪れたのではない。
予兆だ。破壊と破滅の――。
寝台から降りると、夢に耽る同胞たちに背を向け、眠りの部屋をあとにする。
水晶の回廊を進みながら、予兆について思いを巡らせた。
しかしいくら思考を積み重ねてみても、その糸口さえつかむことができない。あれはただの悪夢に過ぎなかったのかもしれないと思えてくる。
――と。
一陣の風が、老人の腰まである白髪と豊かな髭とを揺らし、消えていった。
そこに色濃く溶けていたのは、邪悪な想念。

久しく触れていなかったその強烈な負の感情に老人は身震いした。
間違いない。奴が目覚めたのだ――。
光の牢獄で肉体を拘束、心を封じたはずだったが、それでもあきらめなかったのだろう。何事にも決して屈することのないその精神力に、老人は舌を巻いた。
とはいえ今一度、強固な封印を施せば、この平穏が乱されることはないはずだ。
やがて老人は地下の回廊を抜け、館の大広間の中央部へと出た。
ゆっくりと視線を巡らせ、確認するように八つの台座を順に見つめる。そのひとつずつに美しい光を湛えたクリスタルが安置されていた。
老人の表情が曇った。
心に安らぎをもたらしてくれるはずの光が、今はなぜか冷たく感じられる。
つぎの瞬間、八つのクリスタルが微細に振動をはじめた。
それは一切の音を伴わない大気の震えとなり、彼の臓腑と鼓膜とを直撃する。
老人は両耳を押さえ、背を丸めた。
――封印されていた次元エレベータが稼動したのだ。
苦悶の表情を浮かべながらも、老人は懸命に歩を進め、館をあとにする。
彼方を見やると、暗天に浮く青い星が見えた。

## 2

ふいに現れた人影に、セシルは腰の剣を抜き放ち、浅く腰を落とした。
魔導船に乗った一行は、星々の海を航行し、月へと降り立った。
そこで発見した奇妙な建物へと足を踏み入れた瞬間に、その影が現れたのである。
「よくぞ、参られた」
腰まで届く髪と豊かな髭は白。青みがかった法衣をまとった老人だった。
セシルを見つめる老人の目が大きく見開かれた。が、それは一瞬の出来事。すぐに満面の笑みを浮かべ、一行を館の奥へと招き入れる。
「あなたは――」
セシルたちは緊張を解かなかった。老人の姿をしているとはいえ、油断はできない。
「私は、フースーヤ。月の民の眠りを守る者だ」
「月の民……ですか」訊いたのはローザ。
フースーヤと名乗る老人が頷く。
「まさか、月に人が住んでるとはな」とエッジ。
遠まわしにフースーヤの正体を探ろうというのだろう。
それに気づいたのか、老人は背を向け、一行に無防備な姿をさらす。「気が遠くなるほど昔

のことだ。我らが故郷が絶滅の危機に瀕し、生き延びるためには別の星へ移住する他なくなった。そこで私たちは船に乗り、青き星へたどり着いた」
「――青き星？」剣を握ったまま、セシルは訊いた。
「そなたらの住む、あの美しい星だよ」
「俺たちの大地を奪おうって魂胆かよ」エッジが吐き捨てるように言った。
それにフースーヤは小さく首を振った。「我らが求めたのは、共存共栄だ。しかし、そなたらの先祖の築き上げてきた文明は、私たちから見ればまだまだ発展途上だった。我らが移住すれば、彼らの未来を壊してしまうかもしれなかった」
セシルは、剣を収めた。
老人の話を、じっくりと聞いてみたくなったのだった。
「そこで我らは、青き星の近くにもうひとつの小さな星を作り出し、永き眠りについた」
「それが、この月なのですね」
フースーヤは、セシルの言葉に頷き、先をつづけた。「そなたらの文明が成熟したのちに、改めて共存のための話し合いの場を設けるつもりだった。しかしある者は、眠りにつくことを拒んだ。そなたらの先祖を滅ぼし、青き星を我が物にしようと考えたのだ」
「ひどい……」リディアが呟いた。
「私は、奴を――ゼムスを光の牢獄へと封印し、眠りについた。しかしその永き間にも、ゼム

スは己の心に棲む闇を育て、そなたらの星へと邪念を送りつづけていたようなのだ。そして、その呼びかけに応えた者が現れた」
「それが、ゴルベーザ――」とセシル。
「いかにも」老人は、そこで大きく息を吐いた。
「ゴルベーザは、ぼくたちの世界にあるすべてのクリスタルを手中に収めました」
「そのようだな。ゼムスの発する思念を解読して、私もそれを知った」
「教えてください、フースーヤ。月にある大いなる力とは何なのでしょう。ゴルベーザの目的は、その力を手に入れることだといいます」
問われて、月の民の老人がセシルらを振り返った。
「クリスタルには、膨大な魔力が宿っている。ゴルベーザが――いや、ゼムスがそれを欲したのは、バブイルの塔を稼動させ、次元エレベータでバブイルの巨人をそなたらの星へ降ろそうと画策したからであろう」
「バブイルの――巨人ですか」
「恐ろしい兵器だと聞く」そこでフースーヤは遠い目をした。「いずれ来る脅威のために造られたと伝えられておる。私が生を享けるよりも遥か昔のことだ。その脅威とやらが、いったい何なのかさえも忘れ去られて久しい」
「へっ。そんな大昔の代物で、俺たちの世界を支配しようってのかよ」

エッジが吐き捨てるように言った。「ずいぶんと舐められたもんだな」

「甘く見てはならぬぞ。その力は海を蒸発させ、森を枯らし、大地を引き裂くとか。あまりの恐ろしさゆえ、封印されていたほどなのだ」

「止めないと――」リディアが体を震わせる。

そんな彼女の肩を、ローザはやさしく抱いた。「でも、どうやって……」

「バブイルの塔へと潜入し、次元エレベータを破壊する。それしか方法はない」

「しかし、バブイルの塔は不気味な光に包まれていて、近づくことさえ――」

「私ならば可能だ。そなたらの青き星へと連れて行ってくれぬか」

セシルは、フースーヤのその真っ直ぐな視線を正面から受け止める。

両の瞳に宿った光に、なぜかある種の懐かしさを感じた。

睡魔にも似た心地よさが、セシルの心を包んでゆく。

「――頼む。時間がないのだ」

老人の声で、セシルは我に返った。

そうだ、急がなくてはならない。

故郷の大地で、みんなが待っている。

一行は、フースーヤとともに館をあとにし、魔導船へと乗りこんだ。

＊

月面から離陸した魔導船は、全速力で青き星を目指す。
その船内――。
「――懐かしいものだ」ふいに、フースーヤが呟いた。
それに気づき、セシルは魔導船を制御するクリスタルから顔を上げた。
懐かしい？
その言葉の意味を考え、思い当たることがあった。だから訊いてみる。
「この魔導船は、月の民が造り出したものなのでしょうか」
「ああ。遠い昔、私の弟クルーヤがな」
「あなたの弟が――」
なぜか老人の顔に寂しげな表情が浮かんだ。「クルーヤは、青き星に憧れを抱いておった。みなの反対を押し切ってこの船を建造し、たったひとりでそなたらの母なる大地へと降りていった。そして――月へは二度と帰ってこなかった」
「そのクルーヤという人は、ぼくたちの先祖と一緒に……」
「クルーヤは、己の持っている知識を惜しげもなく与え、青き星の民たちの成熟と進化とを促した。それが正しい行為だったのかは、私にはわからぬがな」

「飛空艇の技術も」横からローザが口を挟んできた。
フースーヤは微笑んだ。「飛空艇だけではないぞ。〝魔の道（デビルロード）〟を作り出すのに骨を折り、バブイルの塔の建築にも携わったという」
「そんな――いったい、何のために」ローザは言葉を失った。
「月と青き星をつなぐ、物質の移送装置――それが次元エレベータだ。バブイルの塔は、その次元エレベータを支える柱に過ぎぬ」
そこで老人は一度言葉を切った。前方の船窓から、次第に大きくなってゆく青き星を見つめている。ややあってから、再び口を開く。「クルーヤは、青き星の民の進化に手応えを感じていたのだろうな。いずれやってくる、ふたつの星の民の邂逅のために用意した。それが、このような事態を引き起こすとは」
「で、そのクルーヤってのは、今は何をしてやがるんだ」とエッジ。
「亡くなったよ」
聞いてエッジは頭を掻いた。「そいつは、すまねえ」
しかし、老人の顔からは、寂しげな表情が消えていた。
「奴は幸せだった。青き星で出会った娘と恋に落ち、ふたりの子供を授かった」
魔導船の船内が静まり返った。
それは、月の民の子孫が青き星にいる、ということを意味していた。

「その子供というのは——」ローザが訊いた。
フースーヤは、答えなかった。ただ目の前に立つ若者を静かに見つめているだけである。
セシルの心臓が早鐘を打つ。「まさか、ぼくの体には月の民の血が——」そこで心に引っかかっていた、あの出来事を思い出す。「試練の山で聞こえた声は、ぼくの……」
「そなたの父、クルーヤの魂だ」老人が頷いた。「そなたをはじめて見たとき、私は自分の目を疑った。あまりに若いころのクルーヤに似ておったからな」
「——」
「ゼムスの謀略を食い止めるために、クルーヤはそなたにその力を授けた」
言われて、セシルは自分の両の掌に視線を落とす。
父さんがくれた、聖騎士としての力——。
セシルは顔を上げると、老人の視線を正面から受け止めた。「必ず、ゼムスを止めてみせます。大地に生きるみんなの、そして月の民のために」

3

月の民の血——。
そのようなものが自分の体に流れているなど、想像したこともなかった。

フースーヤによれば、クルーヤは青き星で出会った娘と恋に落ち、ふたりの子供を授かったという。ぼくたちの世界に文明を築き上げ、父は亡くなったらしい。だが、それでは母は、そしてもうひとりの子供は、どうなったのだろう。

フースーヤに訊けば、教えてくれると思う。しかしセシルは、そうしなかった。この歳になれば、理解している。世の中には、知らないほうがいいことも少なくないのだと。

セシルは、孤児だった。

森をとおりかかった亡きバロン王が赤子の泣き声を聞きつけ、配下の兵士に調べさせたところ、置き去りにされていたセシルを見つけたのだそうだ。

両親には、ぼくを捨てなければならない理由があったのだろう。

それを今さら知ったところで、悲しみしか生まれない。

ぼくには、たくさんの大切な仲間がいる。それで十分じゃないか。

そう思いこもうとしたが、心は正直だった。知らぬうちに涙が零れる。

故郷の大地が見えてきたと、誰かが言った直後のことだった。

「——何だ、ありゃあ！」突然、エッジが声を上げた。

セシルは涙を拭い、船窓へと駆け寄る。

そこで言葉を失った。

バブイルの塔の外壁を、縦横無尽に無数の稲妻が疾っている。

「遅かったか」
フースーヤのその言葉に、一行の肌が粟立った。
「見よ、バブイルの巨人が誕生する」
塔の外壁をでたらめに駆け抜けていた稲妻に、秩序が生まれた。それは光の束となり、塔の入り口付近へと収束。そこで眩い光の球となった。
轟音に大気が震える。それは、どこか獣の咆哮にも似ていた。
――と。
光の球が消失すると同時に、巨大な影が姿を現す。人型をした城という形容が一番適切だと思われる外観だった。双眸に真紅の光が点ると、巨人が動きはじめた。
一歩踏み出すたびに大地が揺れる。規模のそれほど大きくない町ならば、その片足で踏み潰されただけで一瞬にして瓦礫の山と化してしまうだろう。
巨人が、両腕を真横に広げた。それぞれの指の先から発せられた光の束が、周囲の大地をつぎつぎと撃ち抜いた。着弾地点に天を突くほどの火柱が上がる。
「――ひどい」とローザが口を押さえ、震えた。
エッジも拳を握りしめ、「ちくしょう」と呟く。
リディアがフースーヤに駆け寄った。「もう、どうしようもないの？」
そのとき、セシルが気づいた。「――あれは！」

上空から距離を詰める四艇の《赤き翼》、大地をゆくのはドワーフの戦車隊。バブイルの巨人に対して包囲網を敷いているのが見えた。

戦車隊の陣頭指揮を執るのは、ドワーフの王ジオット。
みずからを鼓舞するかのように拳を振り上げ、仲間たちの士気を上げる。
その隣に立つのは、ジオットの娘であるルカ。
彼女は、頭上をゆく魔導船を見上げると、両手を振った。
「あたしたちも闘うわ、リディア！」

別の戦車には、バブイルの塔で散ったと思われていたヤンの姿があった。
「遅くなってすまぬ、セシル殿」
ヤンの周囲を飛びまわるのは、掌ほどの大きさの光。
幻獣シルフの群れだった。「……ヤン、無理をしないで」
それにファブールの拳闘士は笑みを返す。
「そなたらに救われし命を、この闘いのために！」
《赤き翼》には、ビッグスとウェッジが乗っていた。

ふたりは、魔導船を見上げると敬礼。
「お帰りなさい、セシル隊長！　お待ちしておりました！」
その後ろを飛ぶ《赤き翼》の舵輪を握っているのはシド。
魔導船に片目をつぶって合図すると、前方へ向き直る。
「わしが来たからには心配はいらんぞ。それ、エンジン全開じゃあ！」
さらに後方の《赤き翼》の甲板には、ミシディアの長老ミンウだけでなく、元気そうに飛び跳ねるパロムとポロムの姿があった。
三人は魔導船に気づくと、
「久しぶりだな、あんちゃん！」
「ご心配おかけしました。長老に助けていただきましたの」
「セシル殿、この戦は、そなたたちだけの問題ではない。生きとし生ける者すべての未来がかかった闘いなのだ」
ギルバートは、殿（しんがり）をゆく《赤き翼》に乗船していた。
「セシル……閉ざされていたぼくの未来は、君に出会ったことで開かれた。だから、ぼくも闘



う。君たちに教わった勇気で！」

「みんな——」セシルの目に涙が浮かんだ。

ローザも目頭を押さえる。「ヤン……生きていてくれたのね」

「シルフが助けてくれたんだわ」とリディア。

「泣くのはまだ早いぜ」そこでエッジはフースーヤを振り返り、「おい、爺さん。どうすりゃいいんだ。何か策はねえのか？」

「巨人の口から、内部へ入る」

「なるほどな。それで奴の心臓部を叩くってわけか」

「しかし、この船では大きすぎる」セシルは言うと〝飛翔のクリスタル〟に駆け寄った。

魔導船の高度が下がってゆく。

それに呼応するかのように、シドの《赤き翼》が上昇。

二艇の飛空艇が並ぶ形になったところで、セシルは魔導船を自動操縦に切り替え、ハッチを開いた。コクピットに突風が吹きこんでくる。

「シド、そちらの船に移る」

そう声をかけてから、同船している仲間に向き直った。

「行くぞ」

セシルを先頭に、つぎつぎと《赤き翼》へ飛び移る。
最後のエッジが甲板に降り立ったところで、シドが訊いてきた。
「どうするつもりじゃ」
「あの巨人の口へ近づくのだ」答えたのはフースーヤ。
シドは眉をしかめた。「何じゃ、こやつは」
「月の民のフースーヤだ」とセシル。
「――月の民じゃと？」
フースーヤは、それには答えず、「できるのか？」
「わしを誰だと思っとる、飛空艇のシドじゃぞ。任しとかんかい！」
シドが怒鳴ると同時に《赤き翼》が急加速した。
バブイルの巨人の顔が近づいてくる。すでに視界に収まりきらないほどに大きい。
セシルが叫ぶ。
「奴の口が開いたところを見計らって飛び移る。シド、船を寄せてくれ！」

4

カインとゴルベーザは、バブイルの巨人の心臓部にいた。

巨人が出現したと同時に、ゴルベーザの術によってここへ転移したのである。
制御施設の奥にある、薄暗い部屋だった。
豪奢な椅子に腰を下ろしたゴルベーザは、中央の大きな鏡に右の掌をかざす。
鏡に巨人の見る光景が映し出された。
カインは奥歯を強く噛んだ。
ドワーフたちの戦車隊、そして四艇の《赤き翼》が、巨人に向けて砲撃をくり返している。
無駄な攻撃と、彼らもわかっているはずなのに、その手を緩めようとしない。
だが、それも時間の問題だろう。
あれだけの攻撃を受けながらも、バブイルの巨人はかすり傷ひとつ負っていない。弾が尽き、燃料が枯れ、やがて彼らの心は折れる。
そうなれば、この魔人に逆らう者はいなくなる。
さぞかし満足であろう――とカインは、ゴルベーザを見やった。
そのときだった。
ゴルベーザの四肢が突然、がくがくと震えはじめる。
全身に強い電流を流されているような動きだった。
ふいにその動きが止んだかと思うと、立ち上がる。
「おのれ……フースーヤめ」

漆黒の兜の奥から、声が漏れた。
カインには、その言葉の意味がまったく理解できなかった。
フースーヤとは、いったい誰のことなのか。
だが、それ以上に竜騎士の肝を冷やしたのは、その声音である。これまでの鉛のように重々しいものではなく、しわがれた声だった。
「――ゴルベーザよ」ゴルベーザが己の名を呼ぶ。「はびこる虫けらどもを一掃し、この大地を焼き尽くすのだ。奴の力が及ぶ前に」
「しかし――」と言ったのもゴルベーザだった。
カインは、この罪にまみれた魔人にも葛藤があることを意外に思った。
バブイルの巨人が動いた。
突き出した指先からつぎつぎと放たれるのは、光の束。それは瞬時にして着弾した大地をえぐり、巨大な火柱を上げげた。樹々は燃え、川の水が干上がる。
「やめろ――！」カインは叫んだ。
しかしふたつの人格と闘う男に、その声は届かなかったようだ。
「未熟な文明を破壊しこの地に我らが民の王国を築き上げるそれを貴様も望むのであろう違う私は確かに人々を憎んでいたならばその憎悪に耳を傾けよ違うこの地にもたらされた様々な技術が我らを変えたのだだから私が憎むべきはそういった黙れ我に従わぬ者には――」

ひとつの声で吐き出される、ふたりの言葉が複雑に交じり合う。
カインには、もはやその内容を聞き取ることができなくなっていた。
天を睨むようにして姿なき自分と罵り合うゴルベーザ。
そんな彼を見ているうちに、ふとある考えが浮かぶ。
今なら逃げ出せるのではないか、と。
いや――とカインは小さく首を振り、その甘い誘惑を払いのける。
それでは何にもならない。
すべての元凶であるゴルベーザを倒さなければ。そして今がその時なのかもしれない。
カインは手にしていた槍を強く握ると、腰を落とし、頭上めがけて跳躍する。
上昇する途中で体の上下を入れ替えて頭を下にした。
ゴルベーザは、こちらに気づいた素振りを見せない。
祈るような気持ちで、カインは天井を力強く蹴った。
槍の切っ先を漆黒の甲冑へと突き出す形で急降下する。
手応えがあった。
カインの槍に貫かれたゴルベーザは、そこで言葉を失い、崩れ落ちる。

＊

全身を疾る激痛に、視界を覆っていた闇が瞬時にして消え失せた。
半身を起こすと、槍を手に身構えるカインの姿が目に入った。
それで何が起こったのかを悟る。
ゴルベーザは目を閉じ、胸の傷に意識を集中させた。
止血が終わるとゆっくりと起き上がり、竜騎士を睨みつける。
「裏切ったか――」
「俺が忠誠を誓ったのは、バロン王ただひとり。だがその陛下も、もはやこの世にはいない。俺に命を下せるのは、自分自身だけだ」
「それは、どうであろうな」
ゴルベーザの言葉に、カインが眉根を寄せた。「貴様、まさか――」
「お前の心を操るなど、造作もない」
そのとおりだった。
ゴルベーザは、カインのすべてを知っている。決して表に出てこられないようにと、無意識の牢獄に閉じこめられていた感情までもその目で見ていた。
――カインの抱えている闇は大きく、そして濃い。

それがわかったからこそ、ゴルベーザは術に頼らなかった。いかに強力な暗示をかけたところで、やがては破られる。ならば、みずから己の光を消し去るように仕向け、ふたりで闇の絆を結ぶべきと考えたのだった。

この男は、私にどこか似ている。

それは錯覚などではなかったはずだ。

私を理解してくれる者が、ようやく現れたと思っていた。

しかし、どうやらそれは幻想に過ぎなかったようだ。

ゴルベーザは、失望とともにカインへの興味を失った。

残ったのは、臓腑が沸騰するほどの怒りだけ。

バブイルの巨人は、もう誰にも止められない。

愚かな人間どもに制裁を加える準備は、完全に整った。

すべての望みを叶えた先に、いったい何が待ち受けているのかはわからなかったが、たとえそれが己の死であろうとも喜んで受け入れるつもりだった。

ゴルベーザは嗤った。

裏切り者への処遇が決まったのだ。すなわち、死。

——と。

それに感づいたのか、カインが動いた。

突き出された槍を払いのけ、ゴルベーザは一気に間合いを詰める。
無防備な竜騎士の腹に右の掌を押し当て、念をこめた。
後方へと吹っ飛んだカインは、背中から壁に激突し、その場に崩れ落ちた。
ゴルベーザは、立ち上がろうと必死でもがく裏切り者の前に立つと、
「ひと足先に、地獄で待っているがよい」
とどめを刺そうとした瞬間だった。
床の振動が消えた。大気を震わせていた動力音も、今は聞こえなくなっていた。
「来たか――」カインがにやりと笑い、呟いた。
ゴルベーザの背中を冷たいものが滑り落ちる。
このバブイルの巨人を止めた者がいる。恐らくはセシル――。
ゴルベーザは、カインに背を向けると、足早に巨人の制御施設へと向かった。

＊

巨人の制御装置は、民家ひとつ分は優にある巨大な代物だった。
その中核をなすのが、三つのシステム。バブイルの巨人の行動を司る制御システム、そして侵入者があった場合に起動する迎撃および防衛のふたつのシステムである。

だが制御施設の中央に鎮座するそれらは、今は火花を散らし、煙を吐いていた。
「おのれ、よくも――」
ゴルベーザの体が怒りに震えた。
煙の中から、セシルたちが姿を現す。
そこで気づいた。一行の中に、見たこともない老人が混じっている。
腰まであろう白髪を揺らし、その老人が一歩進み出た。
「お主、自分が誰だかわかっておるのか」
老人の意外な言葉に、ゴルベーザは気勢をそがれた。と同時に胸の奥に小さな痛み。
――私が誰なのか、だと？
だが、そこで己の名――ゴルベーザに強烈な違和感を覚えた。
胸の奥にある小さな、しかしとても大切な何かが疼く。老人の視線に晒されているからなのか、それが少しずつ大きくなってゆくような気がした。
私は、いったい誰なのだろう。
やめろ、と無意識の奥で誰かが叫ぶ。心の闇が血を欲して吠える。そして、みなぎる殺意。
そのとき老人が右腕を大きく振るのが目に入った。
眩い光に視界が閉ざされた。
固く閉じられていた扉が、ゆっくりと開くイメージ。

耳を聾するのは、朝日に照らされて溶けてゆく夜の断末魔の悲鳴なのだろう。
「――やめろ！」
絶叫したが、ゴルベーザはそれが自分の発した言葉ではないことを理解していた。
そして、永い夜が明けた。
「私はなぜ、あれほどまでに憎しみに駆られていたのだ」ゴルベーザは呟いた。
力を使い果たしたのか、あの老人が片膝を床についていた。だが、顔に疲労の色はなく、かすかな笑みが浮かべていた。「ようやく自分を取り戻したか」
「自分を――？」
「お主、父の名を覚えているか」
問われ、記憶の海へと潜ってゆく。懐かしいあのころの思い出を見つけ、引き上げた。
「父……クルーヤ――」
ゴルベーザが呟くように言うと、老人の背後に控えていたセシルが体を震わせた。
「それじゃあ、セシルの――」ローザが口を押さえる。
エッジは信じられないといった表情となった。「兄貴だってことかよ……」
老人が、ゆっくりと立ち上がる。
「クルーヤは、私の弟。すなわち、お主も月の民だということだ」
「月の民――」

「お主は、ゼムスの強力な思念で利用されていた。その体に流れる月の民の血が、奴の邪悪な思念によって反応し、心を縛られていたのだろう」
「私は、操られていた——」
老人が頷いた。
「では、ぼくは——」セシルは拳を握りしめた。「兄を憎み、闘って……」
「仕方があるまい。セシル、お前は正しい。そうするしかなかったのだ。私が悪しき心を持ち、闇の誘惑に耳を貸したばかりに」ゴルベーザが言った。
「でも、もしかしたら逆の立場になっていたかもしれない。ぼくがゼムスの思念を受けてしまっていたら、あるいは——」
「それは、あるまい。私がゼムスの思念に屈したとき、お前はまだ生まれたばかりだった」
セシルが、うな垂れるように顔を伏せた。
そんな弟に、ゴルベーザは背を向けた。
「待って、どこへ——」とリディア。
「私自身で決着をつける」
その背中に、老人が声をかけた。
「ゼムスとて、奴が月の民であることに変わりはない。私もともに行こう」
こうしてふたりは、セシルらに別れを告げ、バブイルの塔へと転移した。

クリスタルの力を再び使い、次元エレベータを作動させる。
目指すは、月。そこにゼムスがいる。

5

予想だにしなかった事実を突きつけられ、セシルの心は麻痺していた。
思考は空転をくり返すばかりで、ただ立ち尽くすことしかできない。
そんなセシルに痺れを切らしたのか、
「おい。いいのかよ、セシル」とエッジが言った。
その言葉は耳に届いていたが、セシルは何の反応も示さなかった。
ローザが言葉を添える。「あの人……自分の命で償うつもりよ」
わかっている。わかっていたが、そう簡単に割り切れるものではない。
彼の犯した罪によって、たくさんの血と涙が流された。
操られていたから、というたった一言で片づけるには重過ぎる罪である。
それに加え、兄だとはいっても、今はじめて顔を合わせたにも等しい。
憎しみをぶつけていた時間のほうが遥かに長いのに、急に気持ちを切り替えられるわけもなかった。いくら血がつながっていようと、愛情を感じられようはずもない。だから、彼を追い

かけ、ともに手を取り、ゼムスを倒そうという気力が沸いて来ないのだ。

——と。

突然、足元が揺れた。それは崩壊を意味する震動だった。

エッジが舌打ちした。「こいつは……やばいぜ」

「早く逃げないと」と周囲を見まわしながら、リディアもそれに同意。

「——セシル！」

ローザに肩を揺さぶられたが、セシルは自分の爪先に視線を落としたままだった。

もう何を信じるべきなのか、わからなくなってしまっている。

「ったく、何してんだよ」エッジがセシルの胸倉をつかんだ。「早く逃げねえと、このまま死ぬことになるぞ」

それをなだめるようにリディアが、「でも、出口が——」と言ったときだった。

「——こっちだ」という言葉が聞こえた。聞き覚えのある声だった。

セシルは弾かれたように顔を上げた。

「カイン！」ローザが息を呑む。

エッジは目を細めた。「へっ。もう、その手には乗るかよ」

「話はあとだ。死にたいのか」

その言葉に最初に反応したのは、ローザだった。

カインへと駆け寄ると、一行を振り返る。
「――急いで！」

*

「――すまなかった」
そう言うとカインは、うつむくように顎を引いた。
一行は、カインの手引きによって崩壊するバブイルの巨人から脱出。バロン城の左の塔の最上階にある、セシルの私室へと集まっていた。
「許してもらおうなどとは思っていない」
「当たり前だ。てめえのせいで巨人が現れたも同然だろ」
エッジが、飛びかからんばかりの勢いで、カインに詰め寄った。「一歩間違えれば、国のひとつやふたつ、消し飛んでいたかもしれねえんだぜ！」
「やめて！」ローザが、ふたりの間に割って入った。
「おいおい、何でこんな奴の肩を持つんだよ」
収まりのつかないエッジに、ローザは小さく首を振った。「あなただってわかってるはずでしょう。カインに非はない。あのゴルベーザだって……」

「奴が――どうかしたのか」とカイン。
「ゴルベーザは、セシルのお兄さんだった」
言われて、カインは言葉を失った。
そのあとを、リディアがつづける。「ゼムスという月の民が、ゴルベーザの体に流れる月の民の血を利用していたの」
「つまり――」カインはセシルを見やる。「セシルも月の民だったのか」
くちびるは真一文字に結ばれており、答える意思はないように見えた。
セシルは目を閉じ、顔を伏せていた。
「そうだったのか」とカインは大きく息を吐いた。
ゴルベーザも操られていたとは――。
バブイルの巨人での彼の不可解な言動と行動の意味が、そこでようやく理解できたような気がした。ふたつの人格を持っていたのではなく、邪悪な思念に支配されていたのだ。
許容量を超えた闇が精神へ流入し、異常をきたしたといったところであろう。
だが、それでもカインは、ゴルベーザの心が弱かったのだとは思わない。
操られていてもなお、彼は己の美学を貫いた。
数々の悪事をくり返しながらも、虚言を吐くような真似は一切しなかったのだから。
それは、ゴルベーザの心にも光があったという証なのだと思う。

ゴルベーザは、ゼムスに操られることを望んでいなかったはずだ。だからこそ奴は、俺の心を闇の鎖で縛って服従させようとはしなかった……。
カインは、再びセシルを見つめる。
強く握られた拳。眉間に皺を寄せ、奥歯を噛みしめている。
彼のその複雑な心のうちは、そういった様子からもよくわかった。
「それでゴルベーザは、ゼムスを倒すためにフースーヤと月へ向かったの」
リディアが、小さく呟いた。
誰に向けた言葉だったのだろうか——ふとカインは、そんなことを考えた。
これ以上、セシルに何かを背負わせることはできない。そして、俺は犯した罪を償う必要がある。覚悟が固まった。
「——俺が、月へ行く」
カインは、そう言い放った。
全員の視線が、竜騎士に注がれる。
エッジが鼻で笑った。「また操られなけりゃいいがな」
「そのときは遠慮なく俺を斬るがいい」
「いい覚悟だ。なら、俺がそいつを見届けてやるぜ」
「エッジ……」

「ま、俺もゼムスとかいう奴に一太刀浴びせてやらんと気がすまねえからな」
にやりと笑うエッジ。
カインは、その友情に心から感謝した。
そのときだった。
「行こう」セシルが顔を上げた。「ぼくも月へ行く」
カインは、セシルへと視線を転じた。
迷いなきセシルの眼光が、こちらへ向けられていた。
「すまなかったな、セシル」
カインが頭を下げると、セシルは微笑んだ。「お前らしくもない」暖かな笑みだった。
「しかし――」
「お前が、そんなでは張り合いがない。ゼムスを倒すのは、ぼくだぞ」
言われてカインは、はっとした。
どこかで聞いたことのある、否、どこかで自分が口にした台詞だと気づいたのだ。
「そうだな」
カインの顔にも笑みが浮いた。「俺も負けはしない」



# 第11章

FINAL FANTASY. IV

ファイナルファンタジーIV

1

魔導船のコクピットは、薄闇に沈んでいた。
船窓から差しこむは、月明かり。
その寂しげな光が、床に座りうつむく三人の男を照らしている。
エッジが、ため息をついた。あれこれと思いを巡らせるのには、もう飽きていたのだ。
そっと視線を上げ、セシルとカインの様子を窺う。
ふたりは、まだ膝を抱え、視線を床に落としたままだった。
ローザたちのことを考えているのだろうな、とエッジは思った。無理もない、これが永遠の別れとなるかもしれないのだ。だから、エッジは彼らに声をかけられずにいた。
――あれは、つい先刻のこと。
俺たち三人が、月へ向かう決意を固めた直後、セシルは言った。
「ローザとリディアは、ここに残ってくれ」と。
セシルにしてみれば、未知の危険が伴うこの旅に、彼女たちを連れて行きたくないのだろう。しかも相手は、あのゴルベーザを手玉に取ったゼムスである。最悪の状況を考えれば、セシルの言動に何らおかしなところはない。
だが、ローザとリディアは、それに異を唱えた。

ここまで己の命を削り、世界のために闘ってきた。ようやく首魁の存在を突き止めたというのにお役目御免では納得できるはずもない。

月へ向かうことに彼女たちが恐怖を感じていないわけがない。それでも行きたいと願うのは、心から仲間を心配しているからなのだろう。特にローザは、セシルを愛している。彼を失うぐらいならば、生きている意味などないとさえ考えている様子だ。

しかしセシルは、決して首を縦に振らなかった。

やがてふたりは折れ、涙ながらに部屋を出てゆく。

セシルの自室をあとにするとき、リディアがエッジを振り返った。

「馬鹿！」

別れの言葉としては最悪だった。

――馬鹿、か。

ああ、そのとおりなのだろうな。

俺はリディアを守るためならば、命を懸けることだってできる。だが、その俺が死んでしまったら、彼女はどうするのか。いったい、誰が彼女を守る。

普段のエッジならば、自分の死や敗北などは一切考えない。いくらだって強がりを口にすることができる。しかし今度ばかりは話が違った。

後悔があるとしたら、ひとつだけ。

自分自身にけじめをつける意味で言ったつもりだったが、あんな状態じゃあ気の利いた言葉になんかなりっこない。

「――ガキは、いい子でお留守番でもしておきな」

形として売り言葉に買い言葉となってしまった。まったく最悪だ。

エッジは、また深くため息をついた。

船窓から覗く空が、白んできているのが見えた。

夜明けが近い。出航の時間だ。

エッジにつづいて、ふたりも立ち上がった。

言葉はないが、心は通じ合っている。

セシルが魔導船の動力を司る〝飛翔のクリスタル〟に手をかざした。

同時に微細な振動が足に伝わってくる。

つぎの瞬間、月の民の叡智が造り出した船は急速上昇。瞬く間に大地を離れ、やや青みがかった空へと吸いこまれていった。

船首の船窓に月が見えている。

それが大きくなってゆくにつれて、空から色彩が抜け落ち、黒く染まっていった。

月の地表が確認でき、間もなく離陸の態勢に入ろうかというときだった。

三人は息を呑んだ。

コクピットに、ローザが姿を現したのである。
セシルが顔を伏せた。「どうして――」
「私がいなかったら、誰があなたたちの傷を癒すの」
無言を貫くセシルに、ローザはなおも言った。「あなたの側にいられるのなら、どんな危険なことだって――」
「――仕方ないな、セシル」とカイン。
セシルが弾かれたように顔を上げた。「カイン、お前――」
「やっとわかったよ。お前たちふたりは、似た者同士なんだってな」
「――」
エッジが笑った。「まったく、羨ましいねぇ」
しばらくの沈黙のあと、セシルは頷いた。
「わかったよ、ローザ。何があっても、ぼくが君を守ってみせる」
――と。
そこへもうひとつの声が上がった。「うまく行ったわね！」
エッジの笑みが凍りついた、「お、おめえ……」
つづいてコクピットに姿を現したのは、リディアだった。
「リディア、君も乗っていたのか」セシルが大きく息を吐く。

「幻獣たちの力が、きっと役に立つと思う。みんなも世界を守るために闘いたがっている」
「――幻獣たちが？」
「そう……これは、みんなの闘い。人間だけじゃなくて、ドワーフも幻獣も、それからたくさんの花や動物たちも」
「ああ、そのとおりだ」セシルが破顔した。それから船首へと向き直る。
月の地表が、船窓から溢れている。
セシルが〝飛翔のクリスタル〟に触れると、魔導船は着陸態勢に入った。
「行こう、ぼくらの闘いに！」

2

「――何を考えておる」
ふいに、そう訊かれて我に返った。
フースーヤに導かれるようにして進むゴルベーザは、改めて周囲を見渡す。母なる大地からいつも見上げていた月の地下に、このような渓谷があるとは想像もしていなかった。
天然の洞窟かと思ったが、やがてその景観は一変。切り出した水晶の立方体を敷き詰めた通路となっている。頭上を仰ぐと、これまでとおってきた道筋が、淡い光の線となって浮かび上

がっているのが見えた。ため息の出るような光景だった。
「昔のことを思い出していました」ゴルベーザは、呟くように答えた。
月からやってきた父。彼もまた、遠い昔に、これと同じ景色を眺めていたのだろうか。
そういえば父は、事あるごとに暗天に浮かぶ月を見上げていた。
「ねえ、父さん。どうして、いつも月を見ているの」
と訊いたことがあった。
それに父クルーヤは、こう答えた。「教えてやるよ。お前がわかるようになったらな」
今になって思えば、父は苦悩していたのだろう。
父のもたらした魔法の概念は、凄まじい勢いで世界中へ広まり、人々の生活は激変した。よい意味でも、悪い意味でも。一番の問題は、人間同士の争いに魔法が使われるようになったことだった。父は率先して、そうしたことを禁じるための活動に身を投じた。
理想と現実の隔たりに心を痛めていたクルーヤ。
故郷の月を見上げるたびに後悔の念に駆られていたとしても不思議ではない。
そして父は死んだ。
父の教えに反対する者が、魔法でその命を奪ったのだ。
クルーヤは、一切抵抗することがなかったという。いまわの際に父が呟いた。
「間違っていたのだろうか。私の思いは――」と。

話を聞いていたフースーヤが、やりきれないといったように首を小さく振った。
ゴルベーザは言った。「あのとき、私ははじめて人を憎みました」
それから半年も経たぬうちに、今度は母セシリアがこの世を去った。
無理な出産が原因だった。
「それで生まれたのが、セシルか」
「はい」ゴルベーザは、静かに目を閉じた。「母の葬儀が終わり、幼い弟とふたりきりで薄暗い部屋に取り残されたときに、どこからか声が聞こえてきました」
「——ゼムスの声か」
「両親の死は、セシルによって引き起こされたものだと声は言いました。馬鹿げた話です。しかし当時の私は、この冷たい現実を受け入れるための捌け口を求めていたのでしょう。すべてを弟に押しつけてしまえば、楽になれる。……私は弱い人間です」
「いや、そなたもまだ幼かった。無理もない話であろう」
「しかし、私は弟を捨てたのです。生まれたばかりで、まだ泣くことしかできないセシルを、あろうことか獣や魔物の徘徊する森に——」
そして故郷を捨てて辺境の地に身を隠し、黒魔法の修練に明け暮れた。
闇からの声を師と仰ぎ、父と慕い、友として寂しさを紛らわせた。セオドールという名を捨てて生まれ変わった。朽ちた竜の骸から生まれし毒虫——ゴルベーザとして。

＊

地下渓谷を進むに従って、ゼムスのものと思しき邪悪な思念が強くなってゆく。
〝月のクリスタル〟が語ったとおりだ、とカインは思った。
月の民の館に置かれていた〝月のクリスタル〟によれば、バブイルの巨人が破壊されたことでゼムスの封印が解けたらしい。
状況は最悪だった。
懸命に先を急ぐが、まだフースーヤとゴルベーザの背中は見えてこない。このままでは、カインたちが追いつく前に、彼らはゼムスと命のやり取りをはじめてしまうだろう。
フースーヤたちがゼムスを倒せればいい。
だがカインは、その可能性は低いのではないかと考えていた。
鍵を握るのはゴルベーザである。彼はフースーヤによって心の闇から解放されたというが、再び邪悪な思念によって操られないとも限らない。そうなれば月の民の老人は孤立し、戦況は一気に劣勢へと傾くことになる。
だから急ぐ。
しかしカインの心には、焦りと同じだけの幸福もあった。
自分とセシル、そしてローザ。三人で行動をともにすることの幸せを噛みしめていた。

まるで幼いあのころに戻ったかのような錯覚さえ覚える。
そう、ずっと三人は一緒だった。
日が暮れるまで野山を駆けまわり、夜がくると明日が待ち遠しくてたまらなかったあの懐かしい日々。それが永遠につづくことを信じて疑わなかった。
やがて成人を迎え、各々が国を支える重要な任に就くと、すべてが変わった。
激務に追われ、三人がそろって顔を合わせることは、ほとんどなくなった。
とはいえ、それはカイン自身が望んだことでもあった。
セシルとローザが一緒にいるところを見るのがつらかったのだ。
ローザがセシルに見せる笑顔は、カインへ向けられたことがないものだった。
それに気づいてから、カインは三人でいることを避けるようになった。
あの胸が締めつけられるような想いをするぐらいならばと、あえて孤独を選んだ。
そんなカインが今、そういった苦痛を感じずにいられるのは、
——これが最後だ。
と、わかっていたからだった。
ゼムスを倒して我らが大地へ帰還したところで、もはやバロンに自分の居場所はない。生き恥をさらしてまで、竜騎士団の長という地位にしがみつくつもりはなかった。
だからこそ、心に重荷を感じず、ふたりと行動をともにできる。

最後ぐらいは己を殺し、ふたりのために生きよう。
いずれ結ばれるであろう彼らへの、それがカインなりの祝福だった。

＊

——近い。
とセシルは思った。明確な理由があるわけではない。本能が、そう告げている。
邪悪な気配が、すぐそこまで迫ってきているのがわかった。
フースーヤとゴルベーザは、どうしているのだろう。
急がなければと焦りに背中を押されるが、同時にセシルの襟首をつかみ、足を鈍らせようとする感情もあった。それは——ゼムスへの恐怖だった。
セシルは、ゼムスが恐ろしかった。
再び兄ゴルベーザが操られてしまったら……。いや、今度は自分がその邪悪な思念に囚われ、奴の言いなりになってしまうのではないかと考えてしまう。
己の歪な心の闇を、ゼムスに気づかれたらと不安になる。
自分の抱えている負の感情を、完全に肯定してくれる存在が現れたとしたら、ぼくは果たしてその邪悪な誘惑に打ち克つことができるのだろうか。

自信のなさが、歩く速度に表れた。
立ち止まってしまいたい。
足が鉛のように重くなってゆく。それでも懸命に歩を進めるのは、なぜだろう。
愛のために？　友情のため？　平和のため？　それとも――。
ついにセシルの足が止まった。
その目が捉えたのは、フースーヤとゴルベーザの背中だった。
全身を雷に似た衝撃が駆け抜ける。
セシルは、知らずに走りはじめていた。
――兄さん！

3

黒い法衣の男が、宙に浮かんでいた。
目は虚ろで生気がなく、肌さえもが闇に染まっていた。
ゼムスを前にして、ゴルベーザの体に緊張が走る。
言葉など必要なかった。何か言うつもりも、また相手の言葉に耳を傾ける気もない。一瞬でも早く、この悪夢の元凶を滅ぼしてしまいたい衝動だけがある。

ゴルベーザの心を焦がす炎が、〝炎獄（ファイガ）〟として具現化する。
フースーヤも同じ想いだったのだろう。ゼムスへ〝遅延（スロウ）〟。
矢継ぎ早にゴルベーザは〝氷塊（ブリザガ）〟。
フースーヤは〝呪縛（ホールド）〟を詠唱。
さらに〝轟雷（サンダガ）〟、そして〝聖光（ホーリー）〟。
息をつく暇を与えずにゼムスを追いつめてゆく。
「もうひと息だ」フースーヤが呟いた。
本当だろうか、とゴルベーザは不安になった。これだけの魔法を喰らいながらも、ゼムスの表情にまったく変化はない。また反撃の素振りさえも見せなかった。
まるで傷つくことを望んでいるかのようだった。
フースーヤも、気づいているはずだ。何かがおかしい、と。
となると、あれは、みずからを鼓舞するための言葉だったのかもしれない。
そんなゴルベーザの心を読み取ったかのように、
「すべての精神力を――〝隕星（メテオ）〟に変えるのだ」
フースーヤが叫んだ。
ゴルベーザに異論があろうはずもない。封印されていた最強の黒魔法ならば――！
ふたりの詠唱がはじまった。

――と。
ゼムスが口を開いた。「使うがよい、すべての力を」
ゴルベーザの心を不吉な予感がよぎる。しかし詠唱を止めるわけにはゆかない。
魔法の威力を信じるしかないのだ。
かくして呪文が発動する。
頭上に現出した無数の岩が、術者の怒りの炎によって燃え滾った。
つぎの瞬間、それらが容赦なく降り注ぐ。
ゼムスの顔に浮かんだのは、苦悶を意味する表情ではなかった。
「この肉体が滅びようとも、魂は不滅なり」
歓喜の笑みを浮かべながら、崩れ落ちていった。

＊

「ひゃっほー！」
エッジの上げた声で、セシルは我に返った。
目の前でくり広げられていた光景が信じられなかった。
フースーヤとゴルベーザの〝堕星（メテオ）〟の前に、あのゼムスが何もできずに倒れた。悪夢は終わ

りを告げ、平和が戻ってきたのである。
エッジが、フースーヤたちに駆け寄った。
一行も、急いでそのあとを追う。
「ちぇ。ひと足遅かったか」とエッジは、絶命したゼムスをちらりと見たあとで、フースーヤへと向き直った。「俺がぶちのめすはずだったのによ」
ゴルベーザが振り返った。「セシル――」
しかしセシルは、顔を伏せて、その視線を避けた。
そのときだった。
ゼムスの遺体が、ゆっくりと起き上がった。首は後方に傾き、両の腕がだらりと垂れ下がったままで。まるで見えない糸に操られている、出来の悪い人形のようだった。
体が縦にふたつに裂ける。その亀裂から、闇が立ち昇った。
闇は竜巻のごとき渦となり、見る見るうちに巨大な柱と化した。
「我は、完全なる暗黒物質」闇が言った。「ゼムスの憎しみが増大せしものなり」
一行の周囲を黒い突風が吹き荒れる。
まともに目を開けていられないほどの勢いだった。
それでもフースーヤとゴルベーザは、歯を食いしばり、ゼムスのもとへと向かう。
「ゼムスめ……光の牢獄に囚われている間、密かに心の闇を育てておったのか」

月の民の老人は、奥歯を強く噛んだ。「それに気づかなんだとは」
闇の声が風に混じる。「我が名は、ゼロムス。すべてを……憎む」
「ゼムス――いや、ゼロムス。今度こそ私の手で消し去る」ゴルベーザが叫んだ。
再び、フースーヤが〝堕星(メテオ)〟を詠唱。
ゴルベーザも、それにつづく。
しかし、究極の黒魔法も完全なる闇の前では何の効果も表さなかった。
漆黒の男は、老人の言葉に頷くと、懐からひとつのクリスタルを取り出す。
「ゴルベーザよ、今こそクリスタルを使うときだ」
様々な色彩の交じり合った不思議な光を放っていた。
それを頭上高くへと掲げる。
しかし――
ゼロムスの哄笑が響き渡った。「暗黒の道を歩んだ貴様がクリスタルを手にしようとも、そこに輝きなど戻るわけもあるまい。――死ね！」
突然、上空から燃え滾(たぎ)る無数の岩が降り注いだ。
ゼロムスによる〝堕星(メテオ)〟だった。
まともに食らったのは、フースーヤとゴルベーザだけではなかった。
セシルたち一行も、その余波を受け、そのまま床に伏す。

風が止んだ。
一条の光もない闇の中、悪鬼のごとき顔が浮いていた。
「光の牢獄へつながれていたのは、肉体があればこそ。だが訪れた死によって、そこから抜け出した私は、完全なる自由を得たのだ」
セシルは、自分が死の一歩手前にいることを自覚しながらも、必死で立ち上がる。
倒れているゴルベーザと目が合った。
「……兄さん」
「セシル、これを」差し出されたのは、クリスタルだった。「お前が使うのだ」
クリスタルを受け取ったセシルは、ゼロムスへと向き直る。
仲間たちは、みな動けない。ゼロムスの〝隕星（メテオ）〟によって、肉体から急速に生命力が失われてしまっているのだ。
だが――それでも負けるわけにはゆかなかった。

## 4

ミシディアの祈りの塔、最上階――。
祈りを捧げていた双子の魔道士が、弾かれたように顔を上げた。

「長老！」とポロム。
同時にパロムも叫ぶ。「あんちゃんたちが！」
「今こそ、彼らの……」長老が目を開いた。「いや、すべてのために祈るときだ」
そこに集まっていた者たちは頷き、目を閉じて顔を伏せた。
「――セシル殿」ヤンは己の無力を呪い、この体に残されているすべての力を差し出す覚悟で一心不乱に祈りを捧げた。
「今こそ、本当の勇気を……」未だに体の傷は癒えていなかったものの、それでもギルバートは信じていた。セシルたちが敗れるはずなどないと。
「わしらが待っとるんじゃ！」シドが叫ぶ。セシルたちと再会する日がやってくることをまったく疑わなかった。
「この大地のためにも」ドワーフと人間の、種族を超えた絆を結んでくれたセシルたちに、ジオットは感謝していた。
「立ち上がって！」ジオットの娘ルカも一行のために祈る。リディアたちのあの笑顔を、また見たくてたまらなかった。
バロンの《赤き翼》の隊員であるビッグスとウェッジ、そしてトロイアの神官たちの姿もあった。彼らもまた、セシルたちの力を心から信じていた。
「しっかりしろよ、あんちゃん」パロムが月に向かって呟いた。

「セシルさん……みなさん……」ポロムの声が涙に溶けてゆく。
「――月よ！」長老ミンウが、両手を頭上に掲げた。「我らの祈り、受け取りたまえ」
立ち昇った光が、彼方に浮かぶ月へと吸いこまれるようにして消えていった。

5

闇の中に生じた淡い光が、セシルたちを包みこむ。
母なる大地で帰りを待っているみんなの顔が、つぎつぎに現れては消えていった。
やさしさ、勇気、耐える心、力強さ、そして聖なる光――。
青き星より届けられた数々の祈りが、仲間たちを蘇らせ、闘う力を与えた。
「お前に秘められた聖なる力をクリスタルに託すのだ」
どこからか、兄ゴルベーザの声が聞こえてきた。
セシルは、迷わずそれに従った。
――と。
掲げたクリスタルに亀裂が入ったかと思うと、砕け散った。
その八つの破片は、土水火風、そして闇のクリスタルとなり、それぞれの持つ八つの眩い輝きでゼロムスを照らした。

闇に浮いていた悪鬼の首が歪んだ。
つぎの瞬間、地下渓谷を支配していた闇が消失し、ゼロムスがその正体を見せる。
それは、奇怪な姿だった。
あらゆる生き物の容姿を掛け合わせたかのような外観である。
だがその混沌とした悪夢じみた姿にも、一行は決して恐怖しなかった。
自分たちがここで敗れれば、すべてが闇に閉ざされることになる。
両肩にのしかかるその使命の重さも、今では心地よい。闘いが終われば、みんなにまた眩しいほどの笑顔が戻るとわかっているのだから。
セシルとエッジが飛び出した。
ふたりがゼロムスの注意を引くその背後で、カインが頭上へと跳躍。
ローザは、〝防殻(プロテス)〟と〝障壁(シェル)〟で支援にまわる。
初撃を加えたのは、エッジだった。手にしていた風魔手裏剣を投げつける。
ついでセシルの剣による一撃。
そこへリディアの〝炎獄(ファイガ)〟が追い討ちをかけた。
と——昆虫を思わせるゼロムスの眼が、リディアに向けられた。上空から舞い降りたカインの槍に貫かれても、その視線を動かそうとしない。
「てめえの敵は、こっちだ」



エッジがそう叫び、捨て身の攻撃を仕掛ける。
しかしゼロムスの憎悪を自分へ向けるには至らない。
大気中に生じた凄まじい熱量が、瞬時にしてリディアに収束。小さな悲鳴とともに彼女の緑色の髪が舞った。ゼロムスによる〝核爆(フレア)〟だった。
「――リディア！」エッジが崩れ落ちた召喚士へと駆け寄る。
ぐったりと動かないその細い体を抱き起こすと、ローザを見やる。「頼む」
死の一歩手前にある彼女を蘇らせようと、ローザが詠唱を開始。
しかし――
「駄目よ」というリディアのか細い声が、それを中断させた。
「どうして――！」
「エッジ、あなたの言うとおりだった」
「――――」
「お留守番しておけばよかった」リディアは目を閉じたまま、微笑んだ。「ゼロムスは、これまでの相手とは比べものにならない」
「わかってる」
リディアの顔から笑みが消えた。「それなら、私のことは放っておいて」
「そんなことできるわけねえだろが！」

「今の私じゃあ、ゼロムスに太刀打ちできない。みんなの足を引っ張りたくないの」
エッジはリディアをやさしく抱きしめると、その耳元で囁いた。
「わかった、待ってろ。あんな野郎、すぐに片づけてやるから」
肩越しにゼロムスを睨みつけた。そこで異変に気づく。ゼロムスの体が振動をはじめたのだ。
エッジの本能が警告する。身を守れ、と。
「――来るぞ！」叫ぶと同時に、リディアに覆い被さるようにして、それに備える。
ふた呼吸ほどののちに、内臓が破裂するかのような衝撃が襲いかかってきた。
全身を引き裂かれるような痛みが全身に走る。思わず悲鳴を上げそうになるが、エッジは奥歯を噛みしめて、それを必死で呑みこんだ。
腕の中で震えるリディアに、そんなものを聞かせるわけにはゆかないのだから。
無意識の底に沈みそうになる意識を、懸命に奮い立たせる。
「お前は、俺が守る。絶対に――」
エッジは自分に言い聞かせるように叫ぶ。そしてリディアが小さく頷くのを確認してから、彼女の体を静かに床に横たえた。ゼロムスに向き直る。「――どうした、この程度かよ！」
「ぼくらは、負けるわけにはゆかない」膝を折っていたセシルが立ち上がる。
それにカインもつづいた。「勝負は、ここからだ」
「絶対にあきらめない」ローザの〝極癒(ケアルガ)〟が仲間たちの傷を癒す。

果てしない消耗戦がつづいた。
何度も瀕死の窮地に陥りながらも、セシルたちは怯むことなくゼロムスに立ち向かう。
自分たちのうしろにはローザがいる。
彼女がいてくれるからこそ、己の身を心配せずに闘うことだけに専念できる。
ローザもまた、そんな三人を心から信頼していた。
幾たびも絶望の危機に陥りはしたが、いつか必ず彼らと鬨の声を上げられる瞬間がやってくる――そう信じて、仲間たちの援護と回復に徹していた。
「待ってろ。もうすぐだ」エッジは、背後に倒れているリディアを振り返り、折れそうになる心を奮い立たせようとした。
しかし召喚士は、身動きひとつしていなかった。
呼吸さえもしていないように見える。
不安に駆られたエッジは、リディアの駆け寄ろうとした。
そのときだった。周囲に、淡い光を放つ霧が満ちた。
『我らが大地のために――』どこからともなく声がする。
一行とゼロムスの間に立ちはだかるようにして、それが実体化した。
見上げんばかりの巨躯は、竜そのもの。純白の翼を開き、咆哮を上げた。
その衝撃に、ゼロムスが苦悶の声を漏らす。

白き竜が姿を消してから、ようやくエッジは言った。「幻獣か――」
「リディアのお母さんだ」とセシル。
ついで大地が鳴動する。ローザが小さく悲鳴を上げた。
土くれでできた巨人としか形容のしようがない幻獣がゼロムスの前に現出する。
巨人――タイタンは、大樹を思わせる両の腕を頭上高く掲げたかと思うと、つぎの瞬間、そのふたつの拳を振り下ろす。轟音とともにゼロムスの体が揺らいだ。
タイタンが消えたのちに、再び声。
『我らの力を光のために――』慈愛に満ちた声だった。
現れたのは、姿形こそ人間に酷似していたが、明らかに幻獣とわかる女性だった。三つの顔と六本の腕を持っている。『立ち上がりなさい、リディア！』
王妃アスラによって呼び出された光が、緑の髪の召喚士を包みこむ。
つぎの瞬間、リディアがゆっくりと顔を上げた。
エッジは目の奥が熱くなるのを感じた。
リディアが小さく頷くを見てから、ゼロムスへと向き直る。
アスラの姿はすでになく、代わりに青みを帯びた巨大な竜がそこにいた。
「――リヴァイアサン！」言ったのは、セシルだった。
幻獣王リヴァイアサンは、頭上高く舞い上がったかと思うと、ゼロムスへ向けて急降下する。

その姿が次第に透きとおり、大気に溶けてゆく。
いつしか竜は巨大な波へと変容していた。その圧倒的な質量の水の塊が、闇に蝕まれた月の民へと激突し、呑みこんでいった。
『小さき者たちよ、あとは頼んだぞ』
それでエッジは我に返った。「幻獣たちに負けてられるかよ！」
「ああ」とセシルが剣を握りしめる。
カインも頷いた。「行くぞ！」
そして、ついにその瞬間が訪れる。
セシルに剣を突き立てられたゼロムスの肉体が、ゆっくりと崩壊してゆく。
「我は……滅びぬ。この世に闇がある限り、邪悪なる心を糧に何度でも蘇る——」
断末魔の悲鳴を上げ、悪夢の元凶は消滅した。

6

死の淵から帰還したリディアは、ローザの肩を借りて立ち上がる。「勝ったのね」
「ええ」とローザ。その目には、涙が浮かんでいた。
ゼロムスの消えた空間を見つめる一行の背後で、

「見事であったぞ」と声がした。
振り返ると、そこにはフースーヤとゴルベーザの姿があった。
月の民の老人がつづける。「そなたらが、あれほどの力を秘めているとはな。青き星の民は、すでに我ら月の民を超えたのかもしれぬ」
その賛辞にエッジは、「いやあ、そのとおりかもな」と頭を掻く。
「しかし、ゼロムスの最期の言葉――」
カインのその言葉に、ローザが頷いた。「この世に闇がある限り……」
「闇が消え去ることはない」フースーヤは、遠い目をした。「どんな者の心にも、聖なる光と邪悪な闇が潜んでいる。それが大きいか、小さいかの問題でしかないのだ。しかし心配はいらぬであろう。青き星には、そなたらのような者たちがいるのだから」
「爺さん、結構いいこと言うじゃねえか」エッジはリディアの肩に手をまわした。「まあ、そこまで褒められると、さすがの俺も照れちまうけどな」
リディアが、その手をつねった。
「いててて」
と飛び跳ねるエッジを横目で睨む。「調子に乗らないの。あんたなんか、ゼムスに利用されなかったのが不思議なぐらいなんだから」
「へへっ、俺は正義を愛してるからな」

胸を張るエッジに、リディアは我慢できずに吹き出してしまった。
「さて――」フースーヤが、一行の顔を見まわした。「そろそろ私も眠りにつこうと思う」
それを聞いて、セシルは眉根を寄せた。
「眠りに――? なぜです」
「我ら月の民は、そなたらとの共存を夢見て、これまで永き眠りについていた。青き星の文明が成熟したときにこそ、その交渉を持とうと考えておった」
「それなら、どうして……」
「私の先刻の言葉が、単なる世辞だと思っておるのか」
「――」
「今、我らが青き星へ移住したところで、そなたらが得るものなど何もない。そればかりか、無用な混乱を持ちこむことにもなりかねん。そう、我らはあまりにも永きに渡り、惰眠を貪り過ぎた。だからこそ、旅立たねばならん」
「でも、どこへ――」
「永住できる星を探す。私たちは、みずからの文明を過度に誇り、慢心していたのであろう。だが、これからはもっと謙虚に生きようと思う。そなたたちを良き手本とし、月の民のさらなる成熟と進化を目指してな」
フースーヤが、セシルに向かって頷いた。

セシルは、それに頭を下げた。
「では、ぼくらは故郷の大地へと戻ります。みんなが待っているのです」
「そうか、素晴らしい仲間を持ったな。また会える日が来るのかはわからんが――」
そのときだった。これまで沈黙を貫いていたゴルベーザが、口を開いた。
「私も……一緒に行かせてはもえませぬか」
「お主が、か」フースーヤは、片方の眉を吊り上げた。
「私は、戻れません。あれほどのことをしたのですから」
「――ふむ」
「それに父クルーヤの同胞と会ってみたいのです」
「お主にも、月の民の血が流れておる。断る道理はない。しかし――」そこでフースーヤの双眸が強い光を帯びた。「永き眠りになるやもしれんぞ」
「はい」
ゴルベーザが頭を垂れると、老人はやさしい目へと戻った。「よかろう。では、参るぞ」
ふたりが、一行に背を向けて歩きはじめた。
「――セシル」小さく、しかし鋭い声で言ったのはローザだった。
カインがセシルの肩をつかむ。「いいのか、行かせて」
「お兄さんなんでしょ」リディアも言葉を添える。

しかしセシルは応えず、うつむくだけだった。
ふたりの姿が、次第に小さくなってゆく。
その背中が、闇に溶けようかというときに、ようやくセシルは顔を上げた。
「ひとつ……ひとつだけ訊かせてください」
セシルの声に、ゴルベーザが足を止めた。
だが、振り返らない。沈黙を守ったまま弟からの言葉を待つ。
「——あなたは、ぼくが憎かったのでしょうか」
さらに沈黙。
「……どうして、ぼくを殺そうとしなかったのでしょう」
「そんなことができると思っているのか」ゴルベーザが声を荒げた。「だから森に捨てた。修羅の道へ踏みこむことを決意した私の姿を、お前だけには見られたくはなかった」
ゴルベーザの背が震えている。泣いているようだった。
セシルの胸のつかえが取れた。
あれは、当時の彼にできる精一杯の思いやりだったとわかったのだから。
「さよなら、兄さん」いつしか、セシルも涙を流していた。
「——ありがとう、セシル」
そしてゴルベーザは暗がりの奥へと消えていった。


終　章
FINAL FANTASY.IV
ファイナルファンタジーIV

故郷の月が、次第に遠ざかってゆくのが感じられた。
と同時に、忘れかけていた様々な思い出が心に去来する。
あのころの私は、何と精神的に未成熟であったのだろう。理想という熱病にうなされ、みずからの行動に一切の疑念をはさむことなく、この青き星へとやって来た。そんな自分を、仲間たちがなぜ必死で制止しようとしたのか、その意味さえ考えようともせずに。
クルーヤは、ひとつの土地にとどまることを嫌い、世界各地を放浪し、まだ未成熟だった青き星の民たちの心へ、たくさんの知識の種をまいていった。
やがてその種は芽吹き、人々の間に魔法の概念が浸透してゆく。
未知の力を得たことで彼らは強く、逞しく、そして賢くなっていった。
月の民は、青き星の者たちに比べ、途方もなく永い刻を生きることができる。ひとつの土地に永住すれば、やがて彼が青き星の民でないことが知られてしまうだろう。
そうやって奇異の目を向けられるのを避けるために、クルーヤはいくつもの名を使い分けては旅をつづけ、文明の成長を陰ながら見守っていた。
しかし、そんなクルーヤに転機が訪れる。
訪れた街で、セシリアという少女と出会ったのだ。
聡明で献身的、いつも笑顔を絶やさない彼女は、みずから進んでクルーヤの身のまわりの世話をするだけでなく、魔法の基礎を学び、彼の助手としても活躍してくれた。

幸せな日々がつづく。

そろそろこの街を去らなければならない――そう思いながらもクルーヤは旅立つことができずに、十年にも及ぶ月日が過ぎ去ってしまった。

セシリアが成人したその日、クルーヤは彼女にだけ、自分の秘密を明かした。セシリアの反応は、予想外のものだった。つぎの日の朝、ふたりはともに手を取り、街をあとにした。

ミシディアにほど近い森のはずれに、粗末な家を建てた。

ふたりを慕う者たちが、ひとり、またひとりとそこに移り住んできて、やがて小さな村となる。クルーヤは、ここに永住しようと決めた。

長男セオドールが生まれてから間もないころだった。魔物を撃退し、生活を豊かにするための魔法の数々を、武力として行使しようとする者たちが現れた。

クルーヤは、自分の教えに背く者を説得しようと努力をつづける。しかし彼らは聞く耳を持たぬばかりか、あろうことかクルーヤを糾弾しはじめたのだった。

曰く――

クルーヤは、魔法の始祖としての地位を守りたいがために、我らがそれを使うことを制限しようとしている。彼は不老長寿の魔法を編み出しながらも決して広めようとはせずに、自分だけがその恩恵にあずかっている。奴は魔法によって人々の煩悩と欲望とを刺激し、この大地を戦乱の渦に巻きこもうとしているに違いない。

次男の出産を控えたある日。
クルーヤは、自分の存在を嫌悪する者の魔法の前に倒れ、そのまま帰らぬ人となった。
しかし――。

竜の口より生まれしもの
天高く舞い上がり光と闇を掲げ
眠りの地にさらなる約束をもたらさん。
月は果てしなき光に包まれ
母なる大地に大いなる恵みと慈悲を与えん。

絶えることなく捧げられる人々の祈りによって、クルーヤの魂は天へは召されず、この青き星にとどまった。
次男の出産で命を落とした妻セシリア、ゼロムスの闇の誘惑に道を踏み外したセオドール、そして孤児として生きる運命を背負ったセシル――。
残された家族たちを、様々な苦難が襲う。
それらを目の当たりにしながらも、クルーヤは彼らに救いの手を差し伸べることをしなかった。できなかったのではなく、あえてしなかった。怖かったのだ。

この地に魔法をもたらしたことで、自分はたくさんの人々の未来を変えてしまった。変革と進化に犠牲はつきものだ——そう言い切れるほどの自信が、クルーヤにはなかった。私の勝手な理想のために、涙した者たちは決して少なくないだろう。
だからクルーヤは、ただ見守るしかなかった。
この青き星では、所詮、自分は異邦人に過ぎない。どのような形であれ、もう彼らに干渉することはやめよう。ただ人々を見守り、その行く末に光があるようにと祈ろう。
そう固く心に決めたはずだった。
だが、試練の山を訪れたセシルと心を通わせたことで、決心が揺らぎ、誓いは破られた。
そして——。
未来への扉が、こじ開けられた。

＊

クルーヤの墓碑が建てられている試練の山の山頂を、爽やかな風が吹き抜けていった。雲ひとつない青い空には、もはや月がひとつしか浮いていなかった。その違和感のある光景に一抹の寂しさはあったが、やがてそれにも慣れてしまうのだろう。
みずから月の民として生きる決断を下したセオドールの意思は尊重すべきだとクルーヤは考

えた。離れていても、絆が断ち切られたわけではないのだから。
——セシリア。
愛する妻の名を呼んでみた。
返事はなかったが、きっとこの声は彼女に届いていると確信していた。
見えるかい、息子たちの姿が。
あのふたりは、私の誇りだ。彼らがいなかったら、私は今でも不安の迷宮から抜け出すことができずに、後悔の闇の中で涙を流しつづけていただろう。
ありがとう、セオドール。ありがとう、セシル。
そして、君にも。ありがとう、セシリア。
私が君のもとへ向かうのは、もう少しだけあとになりそうだ。
寂しい想いをさせてしまってすまないが、辛抱してくれ。じきに、たくさんの土産話を手に、きっと君のもとへ行く。だから、もう少しだけ——。

ファイナルファンタジーⅣ　完

「解説にかえて　―紡がれる絆―」

『FINAL　FANTASY　Ⅳ』初のノベライズ、いかがでしたか?
オリジナルのスーパーファミコン版の発売が1991年7月19日。
湾岸戦争の年でした。
いつものように会社に泊まり、朝コーヒーを飲んでいると総務の女性社員が「戦争が始まった!」と駆け込んできました。
慌ててテレビをつけ、ニュースを見たのを鮮明に覚えています。

当時の僕は、旧スクウェアの社員になってまだ1年。
グラフィックのアルバイトとして4年ほど開発に携わった後プランナーとして初めて関わった作品が、この『FFⅣ』でした。
シナリオやキャラクター、モンスターのアイディア出しから始まり脚色、マップのキャラ配置から、イベント演出など、最終的には僕が繋げないとゲームにならないという恐ろしいプレッシャーを感じつつもしゃにむに楽しんで仕事をしていました。
ゲーム業界の黎明期とはいえ、勢いだけの若造にそんな機会を与えてくれた

ディレクターの坂口さんの懐の深さには、改めて感謝します。

当時は、テストプレイも開発スタッフのリフレッシュエリアで行われており休憩がてら様子を見に行っては、自分たちの作ったゲームを一喜一憂してプレイしてくれていることに喜びを感じたものです。
最終の通しチェックでゼロムスを倒し、エンディングを迎えた頃には朝日が昇っていました。
その中で祝杯をあげ、スタッフ一同で共有したあの喜びは今でも忘れられません。

あれから17年。
様々な作品を作ってきましたが、『FFⅣ』とは要所々々で再会してきました。
同じスーパーファミコンでのイージータイプ、初移植となるプレイステーション版携帯機初のワンダースワンカラー版、追加要素も加えたゲームボーイアドバンス版そして記憶に新しいフルリメイクのDS版。
そのDS版を制作している時、社内のモバイル開発と何か一緒にできないかという話が持ち上がり、DS版から続けて遊んでもらえたら！　という理由で、思いもよらなかった続編の制作が進んでいきました。

それが現在携帯電話で配信中の
『FINAL FANTASY Ⅳ THE AFTER ―月の帰還―』です。

当時のグラフィックそのままに、手軽に遊んでもらえる。
けれど、携帯電話ゲームの域を超えた王道のRPGを。
そして、17年たっている作品だからこそ、世代を超えた物語を。
といったコンセプトのもとに、DS版と並行して制作がすすめられました。
そんな中、オリジナルの『FFⅣ』に惚れ込んでいただき、アルティマニアなどでゲームにも精通しているベントスタッフの手塚一郎さんにシナリオで協力いただくことになりました。
『月の帰還』の配信が開始され、好評を得ている最中開催された打ち上げの席でこのノベライズの話が出てきました。
是非！　とご快諾いただいて、この『FFⅣ』初のノベライズが実現したのです。
ゲームのストーリーとキャラクターを大事にしつつも、小説として新たな物語を紡いでくれた手塚さん。
多忙な中、カバーだけでなく多数の口絵、挿絵を描き下ろしてくれたオグロさん。
お二人のおかげで、また新しい形での『FFⅣ』が、ここに誕生しました。

17年前の作品が時を経て、新たな形で紡がれていく。
『FFⅣ』のテーマは、『心』でした。
多くのキャラクター達が、それぞれの思いを胸に秘めながらも、大きな流れの中で
その思いが紡がれ、大きな物語となってゆく。
ゲーム制作もまた、ユーザーのみなさんも含め、多くの人たちで紡ぐ大きな物語。
生きていくこともまた、同様なのかも知れません。
この『FFⅣ』こそが、僕の原点であることは間違いありません。

セシルやカイン、この物語のキャラクターたち。
そして、『FFⅣ』に関わったすべての方々。
プレイしてくれたユーザーのみなさん。
そして、この本を読んでくださっているみなさん。
これからも絆が紡がれていくことを信じて——。

2008年11月　時田　貴司

てづか　いちろう
手塚　一郎　Tezuka　Ichiro

1966年4月11日生まれ。AB型。……と書くと、必ず二重人格ですか？　と訊かれます。
残念、人格はたったふたつではありません。ちなみに、この小説は三番目の人格が書きました。
三郎は、なかなかの働き者です。スタジオベントスタッフ所属。

GAME NOVELS
ファイナルファンタジーIV　下巻

2009年1月15日　初版第1刷発行

原　作◆ＤＳソフト「ファイナルファンタジーIV」
　ⒸⒸ1991,2007 SQUARE ENIX CO.,LTD.All Rights Reserved.

著　者◆手塚　一郎

発行人◆田口浩司

発行所◆株式会社スクウェア・エニックス
〒151-8544
東京都渋谷区代々木3-22-7
新宿文化クイントビル3階
営　　業 03(5333)0832
書籍編集 03(5333)0879

印刷所◆加藤製版印刷株式会社

乱丁・落丁はお取り替え致します。
大変お手数ですが、購入された書店名と不具合箇所を明記して
小社出版業務部宛にお送り下さい。
送料は小社負担でお取り替え致します。
但し、古書店でご購入されたものについてはお取り替えに応じかねます。
定価はカバーに表示してあります。


ISBN978-4-7575-2459-0　C0293

9784757524590

1920293009339

ISBN978-4-7575-2459-0

C0293 ¥933E

定価：本体933円＋税

SQUARE ENIX.

